かりの小勢にて浦和を差して進まれしは去る十日の事なりしが「今に軍の樣子も知れず其上に我君には後詰の用意も是なきは不審の次第「我君彈正殿の御心底何とも以て計られず「多分今日の評定は「管領方かに沙汰して區々に語り合ふたり。此時襖の内にて「御出座」と呼ぶ聲の聞ゆれば一同は話を止め威儀を正し列を直して敬禮す。當家の主人豐島彈正陳盛は今年五十二歳の老武者にて紺地緞子の鎧直垂に折烏帽子聖柄の刀を差し赤銅の金具したる猛者造の陣太刀の備前鍛冶が鍛へたる二尺六寸許なるを弓手に引提げ悠然として設の座に着きたるは善か惡かは知らねども威あつて猛き有樣は實に豐島一家の旗頭とぞ見えたりける。彈正は出仕の一座を見渡して

彈正『何れも參着して居るよな

ト云ふに豐島修理亮秋庭掃部助の兩人は左右より進み出でゝ

修理『御沙汰に從ひ拙者はじめ御一門の面々

掃部『御家の子老黨物頭

修理『何れも參着仕つて御座る

掃部『但し御老臣練馬左門事は昨夕殿の御許を蒙り姉にて候ものゝ看病として練馬村へ罷越して御座ります

彈正『其儀は我等承知いたし居る、何れも早速の參着大慶至極

修理『拙者ども一同祝着に存じ奉る、シテ今日の御用と申すは

ト問へば彈正膝を進め平骨の扇を笏に取り屹度一座に向ひ

彈正『今日一同呼寄せたるは餘の儀に非ず、今度安王春王の兩公遂には隣國結城に栖籠り管領へ對しての御確執、鎌倉よりは討手の勢を差向けられ場合に由ては兵庫頭殿修理太夫殿の兩管領にも御出馬あるべしとの注進、まツた御所方には結城の一族を初として今川、小山、野田、里見、一色、桃井、木戸、小幡其外下總、下野、上野、武藏、甲斐、信濃に至るまで故長春院殿の御恩を蒙ツたる輩は雲霞の如くに集れば其勢一揆の類に非ず、御所管領の爭に關東擧げての大軍、かく太平に治ツたる世の中も再び修羅の街とならんは必定なり、尤も武藏一國の大小名は安否何れと定まらざる其中は雙方の催促に應ぜざる決心にて是迄は居たれども最早今日と相成つては其儀も叶はず、此上は御所方管領方いづれへ附き孰へ旗を向くべきか

豐島一家の繁昌も滅亡も此決着一つにあり、方々の心底殘す所なく申されよ、彈正これにて承はらん

トありければ、一座の人は互に顔を見合せて暫し詞も無かりけり。下野入道淨念は素絹の袖を少し捲りて持ッたる珠數を袂に納めて

淨念『御諚誠に御尤に承る、餘人は知らず此淨念に於ては旗頭たる我君の御賢慮次第仰に從ひ進退なし更に異存は御座り申さぬ、但し御一門を初め譜代外様の面々には……

ト聞くより須俣平兵衛、板橋、神谷其外も皆一同に首を下げ入道殿の申さるゝ通り御沙汰に從ひ申さんとは同じたり。彈正は打ほゝ笑みて

彈正『早速の同意祝着なり、然らば我等が所存の程を申聞けんが確と異存は無いと申すか

淨念『一同何れも異存は御座りませぬ

彈正『今日よりして豐島彈正管領方へ一味いたし催促次第結城へ手勢を繰出せば左様相心得て支度いたせト詞を改め嚴かに申渡せば、一同はッと承領しながらも其中にも案外の思をなして眉を顰むるものもあり。互に顔を見合せて默然たる計にて一座白けて見えたりけり。斯と見るより彈正は氣色を損じて膝立直し

彈正『いかに方々唯今この彈正より申達したる趣意がらが不承知なるか、差圖次第に相任せ異存なしと申せしは旗頭と云ひ主人たる我等に向ッて虚言なるか

ト大の眼を活と見開き一座をハタと睨めたり。秋庭掃部助は最初より何とも詞を出さゞりしが進み出でゝ掃部『敢て異存は御座らねども一應心底の程を申上げ御賢慮を願ひ奉るは拙者の役目、抑も今度御所方と管領家の御確執その原を尋ぬれば長春院殿の御僻事と計り申すべきに非ず、京都より追罰の御教書御旗を下されたるも長棟庵主（上杉安房守憲實の法名なり）の讒奏ならんも計り難し、良しや長春院殿に御謀叛の思し立ちありしに致せ未だ其事にも及ばれざりしに管領として主君を弑し奉つるは沙汰の限り、是れに由て今度兩公達には結城に楯籠り義兵の御旗を上げられ管領誅罰の御催しあると其理なきに非ず、然らば我君に於て豐島御一門の方々を引纏め何方へも御加擔なきは御尤ながら今更非道の管領方へ御一味あッて現在數代相傳の御主君たる公方の公達に弓引給はんは勿躰なし、此儀思召し止り下さる樣願ひ奉る

ト理非を分けて諫むれば、彈正は聞きも終らず怒の聲を荒らげ

彈正『ヤア奇怪なり掃部、さばかりの事其方の詞を聞いて理非を知る彈正なりと思ひ居るか、故長春院持氏公は鎌倉の公方にして一旦は我等が主君に相違はなかりしが京都へ對し由なき謀叛の思立ちに管領殿の諫を用ひず剩さへ京都の御領を掠め既に叛逆の萌顯れたるに由り室町殿より追罰の御旗を下され殊には禁裏より追討の綸旨賜ッたれば是ぞ即ち朝敵御敵この上は力及ばず御旗に從ッて誅罰せしと聊か管領の非分に非ず、然るに結城氏朝小山大膳亮の輩が兩管領に向て讐て遺恨を含み居り兩公達に憑まれたるを幸ひに謀叛の旗を上げたるが何が義兵、何が忠義、後先知らずの若殿原や田舍武士はいざ知らず此彈正は其手では欺されぬ、尤も彼奴等が結城小山に楯籠ッたる其時に手勢を繰出し追討の先を驅んと存ぜしが武藏一國の諸大名その旗色の分られば今日までは心ならずも延引せり、されば今度管領方御出馬の催促に應じ綸旨合命に從ッて賊徒を征伐いたすと武門の譽れ一家の面目、其を彼是申し拒むは言語道斷、エー控へ居れエ

ト捲し掛けて言ひ罵る。忠義に凝ッたる掃部助猶も屈せず進み寄り言はんとせしを、高田法眼傍らより引止め少しく前へ進み出で流石は年功の老人とて聲を和げて

法眼『段々の思召し承はッて恐入り奉る、正邪理非を分ッたる御諭し此年寄の法眼遂一御尤に存じ奉る此上は

速かに御旗を出されて然るべし老年ながら入道が今生の思ひ出に御先を驅け申さん

ト云へば彈正は喜びて

彈正『今に始めぬ和僧が忠義彈正滿足に存ずるぞ

ト云ふを機に法眼は

法眼『其に就けても心掛りは若殿民部丞殿の御事去る十日御所方に加はらんと僅かの勢にて浦和を差して御出馬ありしが今以て御樣子も相知れず、何とぞ急ぎ密使を以て若殿（民部丞がと）を呼返され然る上にて御馬を出さるべう存じ奉る

ト云はせも果てず彈正は面色を替へ

彈正『民部がと我等が存じた事で無いワ豫々安否如何と知るまでは御所方へも管領方へも浮と同心相成らず

と嚴しく申付け置きたるに民部丞の不埒もの我等が差圖を相背き御所方へ一味せしとは奇怪奴、もはや叔父でも無く甥でも無い、此上は戰場にて管領方に生捕れやうとも梟木に首を掛けられやうとも此彈正は更に搆はぬ。

ト心の底に貯へし所存は此に顯はれたり。掃部助は眉を顰め

掃部『コハ御諚とも心得ず民部丞殿は故平左衞門尉以盛公の御總領たりし先殿武藏介幡盛公の御嫡男、先殿御壯年にて不意の御卒去その折御嫡男民部丞殿には未だ二歳の御童形にて御家督も成り難ければ我君には先殿の御弟即ち民部丞殿の叔父君たるを以て權に御家督を續がせられたり左れば御出生の御息女鶴姫君を民部丞殿に娶せられ早く御家督を讓り給ふと我君豫々の思召かと存じ奉れば御當家に取ッては大切なる若殿たとひ一旦の御心得違ひあらうとも叔父て無い甥でないと御勘當は近頃御短慮の至り……

彈正『エヽ又しても忠義だての似是諫言聞く耳もたぬぞ先代の嫡男であらうが家督であらうが管領家に弓引く奴容赦しては豐島一家の破滅の基

法眼『デは御座りませうが今度若殿拔駈の御出陣は敢て御一己の思立とも存じ申さず抑も結城旗上げの注進ありし其時に恐ながら我君には御所方に内々御心を寄せ玉ひし御口氣もありしゆゑ若殿には全くさる御心なりと思ひ取り血氣に早るは若武者の習ひ御沙汰を待たず先陣うたせ直先驅て忍びの御出馬……

彈正『ハヽヽア老功に似合はざる法眼が詞よな、斯る匆劇の折柄には其間際までも心底を明さず虛實の謀計

巧みなるが大將の器量その表面の素振りをば覺り得ずして早まッたるは民部めが恐と云ふもの、誠その量見ならば叔父甥の親しき中、なんで我等が極意を相尋ね其上で進退を致さぬか、然るを自分勝手に心を定め我に背いて御所方へ一味なせしは察する所素より彼が心底に疾より謀叛の萠あるゆゑ……

ト云へば高田法眼も秋庭掃部と顏見合せ猶もや强て諫めんと進み寄らんとするを見て、一門の上座に居たる豐島修理亮（是は彈正が亡弟玄蕃が子息にて同じく彈正の甥なり）廿四歳の若武者にて姿は猛く見ゆれども心は邪横道もの、當主の彈正に男子なく唯鶴姫とて一人の息女、その艶色に假想なし養子となッて相續と戀と慾との二途を一つに歩みて覗ひより、望を遂ぐるに邪魔なる民部、折もありなば無きものにして除かんと思ひ巧らむ惡心に時こそ來れと進み出て

修理『何にも是は叔父上の御沙汰の通り嚴しき仰せを相背き御所方の謀叛に組したる民部丞御勘當あるは勿論のこと、但し不埒の民部其儘に差置かれては管領家へ對し後日の申譯も如何なり、此上は此貴盛御勢を申受け直樣浦和に馳向ひ民部丞を討取ッて御貳心なき證據管領家へ見せ奉らん

彈正『ウヽ流石は修理よくこそ申したれ、民部丞が討手其方に申付くる練馬池袋板橋の手を合せ三百餘騎に

て馳向へ

修理『畏ッて御座ります

ト既に其座を立たんとす

掃部『ヤレ待たれよ修理亮どの

ト呼び止め更に彈正に對ひて

掃部『已に御賢慮定ッたる上は掃部もはや御諫は申上げまい、善惡とも我君の思召に任せ其儀に從ひ奉らんが唯今修理亮殿へ仰付けられたる若殿の御討手御非道とは申上けねども言はゞ大切なる御成敗かりそめには致されず然るに御當家に於てに若年乍ら家老職の上席を承り總番頭を仰付賜かるゝ重職の棟馬左門今日の御評議に居合申さねば何卒左門が罷歸る其上にて一應御沙汰あッて改めて仰出さるゝ樣願はしう御座る

ト評議を延ばす掃部が氣轉それと覺つて高田法眼

法眼『成ほど掃部より申出でたる如く左門が歸りまするまで御猶豫願ひ奉る

ト云ふに此方は豫てより修理亮に心を通ずる惡人の池袋源左衞門板橋十郎三郎は臂おし張ッて二人に向ひ

源左『ヤア老ぼれの高田法眼

十郎『腰拔の秋庭掃部

源左『心得違ひの民部丞は謀叛に與する大罪人

十郎『其討手をば御一門の修理亮殿申請けて出馬あるに左門が留守に附托て猶豫せんとは卑怯至極

源左『但し民部に一味なし胸に一物あッての詮議か

ト罵り寄れば

法眼『ヤア舌長し源左衞門年寄つたりとて武邊に於て倆等ごときに劣らんや

掃部『不肖ながらも當國では勇士の譽を得たる掃部

法眼『若殿を追掛け討取らんと思はゞ御邊たちの手を假るに及ばぬ我々兩人の内一人にて馳向ひ討來らんは容易きこと

修理『其に止めだて致すとは

掃部『其ぞ即ち家老の上席たる練馬左門を重んずる武士の禮式我君への御忠節

修理『その左門呼ばはり片腹痛い、ナンノ根が練馬の土百姓叔父上の氣に入て小姓上りの青侍

源左『何の手柄が有るかは知らぬが俄出世の御家老職

十郎『御諚と云ふに詮方なく虫を殺して此日頃物頭の我々共控へては居るものゝ

源左『御邊たちは年來の家老職でありながら其左門に上席されをめ〳〵と下座に居りヤレ左門殿ソレ練馬どのと追從するが笑止千万

掃部『ハヽヽア御邊達の少な料見で考へたらソウ思はるゝかは知れれども流石は我君の御眼鏡にて拔群の御取立を蒙ッたる練馬左門、文武の業は言ふに及ばず國を治め民を憐れみ何事にも拔目なき天晴の御家老職に私なき法眼が潔白

修理『ムヽ夫程に大切なる練馬左門が居合せぬに由て待てと云ふなら待ちもせうが、若し待たざる其時は

十郎『何とし召さる

掃部『腕立しても止めて見せやう

修理『屹度止むるか

法眼『言ふにやおよぶ

ト雙方互に言募り太刀引そばめて睨合ひスワヤ大事と見えたれば一門諸士の人々は雙方を押隔て取鎭めんと犇めきたり。彈正は初より默りかへッて居たりしが聲を勵まして

彈正『尾籠なり控へ居れ

ト制すれば、豐島次郎富森は双方の中に割ッて入り

次郎『御諚で御座る雙方とも御控へ召され

ト制する。是にて雙方ともに元の座に直り恐入ッて平伏すれば

彈正『方々の爭ひ何れも當家の爲を思ひ忠義の餘りの口論なれば互に遺恨を差含むな、まッた民部丞が討手の事は猶ほ存ずる旨もあれば家老共が申立に從ひ左門歸着の上改めて申達すべし、尤も沙汰次第何時にても屹度出陣の支度油斷なく致し置け、屹度申付けたるぞ

皆々『ハッ畏り奉ッて御座る

彈正『一同太儀イザ退出いたせ

次郎『先づ入らせられませう

ト敬禮すれば彈正は心に諾づき悠々として張壁の内にぞ入りにけろ。

（二）練馬お絹生害

茲に豐島彈正陳盛が家の重職にて家老の上席に位せる練馬左門と申すは今年二十八歳の壯士にて練馬の里の住人元は豐島家の一族たる練馬平兵衛が末子とぞ聞えし。幼少の時より豐島家の小姓となり彈正に仕へしが原來才智武勇人に勝れ君を尊び民を憐み信義に篤き性なれば大に彈正の氣に適ひ次第に立身して今は權宰になり一家中肩を比ぶる者も無し。父の平兵衛も母の何某も共に疾に死去り兄の平五郎其外の者ばかりなるが是等は皆左門の立身につれて夫々の武士に取立られしかども獨り姉のお絹とて今年四十五歳の媼のみは若き時より夫をも持たず寡婦のやうにて暮し住居ひ亡父の平兵衛が家を離れて常に籠り勝にて居たりける。左門は母の亡後は此の姉のお絹をば母の如くに敬ひ己が家に引取りて老樂に其日を送らせんと屢說々勸めたれどもお絹は兩親の住居は去り難し且つ左門が孝養を受るは心苦しとて更に聞入れずして寂し

き田舍に住居て日々の暮し向も衣服其外も左門が仕送りは一切之を受けず左りとて左門をば我子の如くに愛しみたりけり。然るに此お絹は今年永享十二年正月の末より時の流行感冒に罹り初は微恙の煩にてありしが年頃の持病はげしく起りて三月の下旬には最も危く見えたれば左門の心痛は一方ならず主人彈正に其由を申立て暫しの暇を請受て昨夜より練馬の里に來りお絹が看病に他事なかりける。左門は二十八歳とは云へ其身の任の重き故にや年よりは少しく老て見え脊高く色白く額は細長くて眼大きく鼻筋通り剃りたる髯の跡は青く筋骨逞くて天晴の武士とは一見にて夫れと知られたり。お絹は是に變り四十路を過ぎたる姥櫻も天性の美人の俤は名殘を止めて常は三十路すぎに見えけるが今は病に惱みて眼も窪み頰も痩たれど昔忍ばれて其盛りには左とそにて有りしならめと思はれたり。左門はお絹が側に侍りける女共に差圖して湯藥その外ども自から信々しく仕へまつり枕屏風を靜かに押明けて

左門『姉上御氣分は如何で御座りますな。御顏の色も今朝ほどより少し御宜しい樣に見えますが……

ト云へばお絹は重き枕を上げて

お絹『左門どの今日は氣分も大層宜やうて御座る

左門『其は偽より重畳で御座ります

ト自から煎じたる藥をば茶椀に注いでお絹の前に置き

左門『此御藥は昨夕玄庵老が見舞はれし時に加減せられたる藥、御宜しくば唯今一服召上られて其から御粥を少し聞召ては如何で御座りませう

お絹『お藥は唯今直に戴かうが御膳は欲う無いほどに後に致しませう

ト藥茶椀を取つて飲干して差出せば側なる侍女は

侍女『御口直しに甘味の物を差上げませうか

ト伺ふにお絹は首を振りて

お絹『否々何んにも欲うない

ト少し思案して心に思ひ浮びたる事ありてか侍女に向ひ

お絹『私しは少し左門どのに内々の話のある程に其方は次に下つて居や

ト吩咐る。侍女は差し心得て一間にこそは入りにけれ。お絹はやをら起き直り左門が介抱にて蒲團の上に居

ばり枕元に置いたる錦の袋に入れし短刀と一包の書物を取り出して前に置き暫し差俯むき涙に暮れたりけるが左門に向ひて

お絹『私しが病は永の年月胸に積りし憂苦勞云ふに云はれぬ悲みを心に溜めて忍びかね凝固ッたが因なれば迚も全快覺束ない。貴めて息ある其中に今此絹が申すこと好う聞いて下されや

ト云へば左門は打驚き

左門『コハ思ひ寄らざる姉上の御詞よな平生からして御氣象勝れ男まさりと呼ばれたる御方には似合しからぬ御氣の弱さ。一兩日前から見れば御病氣も少しづゝ御快復に向ッたれば左樣な心細い事を仰せられずに御心を丈夫に御持ち下さるやう願はしう存じまする

ト心の底には姉の大病此世の名殘も遠からずとは思へども故と勵みを付けたるに、お絹は左門が顏をジッと見て

お絹『其方はソリ云やッてもどうで助からぬ我命今際の遺言聞いてたべ。コレ左門。其方は私が產んだ子ぢ

やぞや

左門『何と仰しやる

お絹『此身の懺悔其方の素性事永くとも一通り聞いてくりやれ。もと此絹は練馬平兵衛殿の娘、豐島の御家は御本家の筋目ぢやとあッて豐島平左衛門尉以盛さまの御邸に御小姓勤に上りしは丁度廿九年前私しが十七の歳であッた（應永二十年）その時豐島殿には武藏介さま彈正さまとて二人の御子息、彈正様は廿四にて年上なれど御妾腹、武藏介様は廿二にて年下でも御本妻腹にて御家督の御後目と定まりしが御二人とも

に御部屋住み

ト苦しき息を吐きて

お絹『若い同士の無分別互に誘ふ戀風に何時しか袖の結ぼれて人目の關を忍び逢ひ忘るまいぞや忘れじと語り合ふたる睦語の人には漏れじと思ひしが漏れて浮名の岩田帶たゞならぬ身となりければ御邸にも住ひ兼ね其とは無しに御暇を願ひ我家へ里歸り翌る春の三月に產落したは、左門、其方であつたぞや

左門『シテ〳〵其御短刀は

お粗『コレぞ即ち其方が實の父上武藏介様の御紀念

ト涙ながらに持つたる短刀を左門に示して

お絹『其をり武藏介様は妾に其短刀と此御畫附を密かに御渡し遊ばして

ト書物の包を取り出し左門に示し

お絹『其方が懷妊の子は我等が種に紛なし父上に申し上げ表向に安產させんは事易すけれど妾腹の兄たる彈正どの家督に心を掛る折柄是幸ひに如何なる巧をなさんも知れず、附ては其方内々にて此事を父平兵衛に語り何にもして人知れず產落して養育なし我等が家督を取つたる上で此二品を證據となして訴へ出でよ必らず取り立て母子とも安泰に得させんと事を分けたる御頼み。父上にも御承知あッて其方を安々產落し世間へも親類へも亡母上の御出生と披露なし妾が弟の積にて大切に養育てました……

左門『承はッた此身の素性。夫れよりしての成行は

お絹『其後武藏介様には御一門より奥方をお迎へあッて御出生の若殿は唯今の民部丞さま。然るに其方が七歳の時に先殿平左衛門尉様には御他界あッて武藏介様御家督ありしゆゑ豫々の御約束イデ其方を召連れて御館へ上り訴へ出でんと思ひしが。イヤイヤ〳〵御當主様とは申せども御年若の武藏介様御家督あッて間

も無い中に其方が御落胤であると云ふと表沙汰に相成つたら御一門の御批判、殊には奥様の御腹には民部丞様と云ふ立派な御總領も出來てある、モシひよつと此組が申ない望あツてかと御疑ひ蒙らんも心苦し、マダ生先のある子供急いては御爲によろしからずと父上にも相談なして表向の訴へ出はマツ後の事として其とは無しに其方をば家の筋目を申し立て豐島殿の御館へ御奉公に差し出だし責ては武藏介様の御小姓か民部丞様の御伽にもと存じたに思ひ掛けなく彈正様の御意に適ひ遂つて御所望これあつて御小姓には成されしぞや

左門『扨は左様で御座りましたか。シテ〳〵其武藏介様には

お組『サア其武藏介様には其翌る年の（應永廿八年）七月十五日然も中元の御祝儀の其夜の中に急病にての御他界御跡目の民部丞様は未だ漸漸に御三歳、世は靜とは申せども斯る御幼少の若殿では迚も御家の成敗は成り難し此上は民部丞様御成身の其時まで御後見代りの御相續と御一門の御評議にて鎌倉殿へ申し上げ今の彈正様が御當主に御成り遊ばしたは其年の十月であツたと。然るに武藏介様の奥方にも其年の十二月に俄の御病死、殿様と云ひ奥様と云ひ同じ様に急蹤の御病死こそ疑はしと高田法眼どの其頃は高田李之進

とて御家老の末席を勸められたるが御一門の豐島織部殿とて今の豐島次郎殿の父御と心を協せ若殿民部丞様を高田の屋敷に預かツて十五にお成りなさるまで御育て申して御座ツたと申すこと

左門『シテ又先殿先奥方御二方の御病死は

お組『其事て御座る哩のウ、當殿様たる彈正様には豫てより本妻腹の弟たる武藏介様にお家の跡目を取られしを殘念に思し召し池袋神谷なんど申す諸士を語らひ内々にて御謀叛の企ありとは御代替りの其時より世間にて密々の取沙汰。尤も御二方の御急病これぞ彈正様の御惡事と我も人も推量はしたれども是と云ふ證據は無し其上に御當主の御威勢に取り調も出來ざりしが、其年の暮の然も廿八日の夜父上平兵衛様用事あツて戸田河原をば御通りなされし其折に堤際にて人殺し提灯の火影に驚き曲者は逃去りしが痛手に苦しむ共人は豫て知つたる豐島家の御手醫者城山正齋、コハ何事ぞと劬はツたれば正齋は苦しき息の下よりも「彈正殿に語らはれ勿躰なくも先殿武藏介様並びに奥方を毒殺の藥を整へ事成就の上は莫大の御褒美を下さるべしと彈正殿の誓詞の書付然るを他日此の惡事我口より漏れんかと今夜我をおびき出し神谷池袋の兩人が河原に於て欺打ちすでに留めを刺さんず折から御身の參られしに驚いて兩人共に逃去つたり、此上は平兵

衛殿との正齋の敵を取り恨を晴して下されよ書付の在所は云々」と詞を殘して其儘息は絶果てしが

左門『其より父上には（平兵衛を云ふ）何となされしよな

お紺『父上はコハ容易ならぬ一大事と直樣その書付の證據を手に入れ御一門方へ訴へ出てんと思はれしが御一門の方々とても大抵は彈正樣の一味なれば浮とは口外なり難しと心に秘置たまひしに其後三年ほど立ちて父上には御大病今際のきはに其事を妾にはじめて御物語あそばして此書付を御渡しありしは十七年前の事（應永三十一年）其方が成長の上いつかは此事言ひ聞かせんと幾度か思ひしかど其方は彈正樣の大恩を受けたる身の上懇ひに言ひ聞かせては事の敗れと案ぜし故今日の今まで控へたれど此母が命も今日か明日かに迫ッたれば此の事を明します

トお紺は病氣の苦痛を堪へ初めて明す左門が身の上、左門は餘りの事に打驚きて

左門『扨は我身の父と申すは平兵衛樣に非ずして先殿の武藏介樣にておはせしか、大恩あつき御主君は亡父上の敵なるか

ト智勇に勝れし丈夫も且は驚き且は嘆き唯茫然たる計りなり、暫くあッて形を改め

左門『承まはッて驚入つたは此身の柔性、永の年月母上とは露知らで姉上とのみ存じまして不孝の罪を重ねし段御免なされて下さりませ

ト涙と共に詫入つて前なる書付讀下し

左門『實に誠これぞ我君彈正樣の御直筆應永廿八年六月十日彈正陳盛判城山正齋殿と宛たるは紛もない慥な證據

ト又取上ぐる一通は母のお紺へ與へたる武藏介が賴の狀、これが實の父上の世に無きあとの形見かと讓りの短刀とも〳〵に押し戴きてカッバと伏し涙に伏して居たりしがジッとお紺の顏を見て

左門『母上の御病氣の原と申すも此一儀廿餘年の其の間御嘆きも御無念も御察し申し奉る、亡き父上の御敵は彈正樣、あの世にて聞し召せ何時かは修羅の妄執かならず辯し參らせん

ト思はず無念の齒噛を成し落つる涙はハラ〳〵〳〵

お紺『ヤレ待て左門、彈正樣は先殿武藏介樣の敵にせよ其方が爲には大切なる御主て無いか。其方は先殿樣の御落胤でも生前に父子の御對面の出來ざれば表立つて父上の敵とは申されまい、また先殿の御跡目は正

しく今の民部丞様、此母が今生の願みと云ふは何にもして民部丞様豐島の御家の御家督を御繼ぎ遊ばす様其方が影にも日向にも成つて御取計ひ申してたべ。妾こそ彈正様に恨みはあれ其方の爲には大切な御主様よくよく忠義を盡されよ、ゆめ〳〵此事民部丞様に御知らせ申し叔父殺しの惡名を御取らせ申すまいぞや

是まで永の年月を是なる鄙の住家に送り其方が邸へ參らぬは彈正殿の扶持知行受けまいと云ふ心の操とは知らずして此絹が故も無き頑とさぞや思ふて居たであろ免してたべ是れ左門

ト細き息の下よりも涙にくれて口説しは無慘にも亦哀なり。左門は涙の顔を上げ

左門『其仰せ委細承知いたして御座ります、民部丞様御相續の事は御安心あれ幸ひ我君に御男子なければ御娘の鶴姫君と御夫婦になし奉り御家御相續ある様に左門かならず取計らひますで御座りませう、次に彈正様御事は此左門が大切なる御主君成るほど亡き父上の御敵は私し事勿體なくも決して御恨みは申し上げますまい、又この事を民部丞様へも申し上げず我心一つに秘置き彈正様御愛度御成り遊ばしたる其上で民部丞様へ密に言上いたすで御座りませう

お絹『オ、其れ聞いて安心しました

ト母子が歎きの語らひに四つの袖をば絞りし折から侍女は周章しく次の間より出て來り

侍女『ハア申し上げます唯今急の御用なりとて御家來上田惣平どのが豐島の御館より駈付け參られて御座ります

左門『ハテ何か急用あッて參りしならんアレへ通せ

ト吩咐け傍の一間に立ち出づる。程もあらせず左門が若黨山田惣平罷り出てて

惣平『ハッ申し上げます今日豐島の御館に於ては御一門御家來惣出仕の大評定我君彈正様には愈々管領方に御一味と仰せ出だされ若殿民部丞様には御許しも無きに御所方へ馳せ付けられたる段不埒なり管領方への御申し譯とあッて御一家の修理亮殿へ討手の御沙汰尤も秋庭どの高田どのより達つて御諫に及ばれたれば御歸館あるまでは討手の出陣御猶豫と申すと、此段急ぎ御注進申し上げますれば直様御歸館あッて然るべう存じ奉る

ト注進の様子を聞いて打諾き

左門『心得た注進太儀左門唯今に歸館いたせば我君より御尋ねもあらば其趣を申し上げい

惣平『畏ッて御座ります

左門『往け

惣平『ハッ

ト惣平は館を指してぞ引返す。後に左門は默然として手を叉き扨は日頃より我君が民部丞様を憎み今度の出陣拔駈も密に勸め置きながら俄に變る管領方是ぞ民部丞様を無きものにし給はんとの計略なるか如何はせんと流石の左門工夫に凝つて居たりける此方の間にはギヤッと魂ぎる一聲と共に障子に血烟のパッと掛かるに驚く左門、障子を明くればコハ如何に、お絹は滿腹をすべり下り形見の短刀逆手に持ち我と我手に咽をば差し貫きたる覺悟の自害

左門『コハ何故の御生害

ト立寄り掛かるを押留め

お絹『驚くまい左門、この母の生害こそ其方が腑を固むるため、どうで助からぬ妾が大病今際のきはに此命彈正様へ差し上げる程に我に代つて民部丞様御身に迫る御危離を御救ひ申し奉れ

ト云ふも苦しき病苦の痛手、左門は涙の聲を上げ

左門『御氣遣ひ遊ばすな命に替へて屹度御救ひ申し上げます

お絹『それ聞いて安堵しました

ト左門が顏を打守り是が此世の別れかと左門が手を取り引き寄すれば左門は悲しさ遣方なく只今知ッた母上に只今別るゝ母子の緣、薄きは前世の因果かや父の敵は我主君恩愛忠義の二途に母の自害は我爲に絆を救ふ情ぞと思へば〳〵勿體なや空恐しゝと取り縋り互に見合す顏と顏人合告ぐる山寺の鐘に散るてふ櫻花その姥櫻老櫻散る武士の母櫻そのまゝ息は絕え果てゝ名殘りは惜しき夕まぐれ左門が歎の心の底思ひ遣られて哀なり

此一場を演劇に仕組むときには滑瑠璃を使用すべきこと勿論なり。又武藏介の毒殺及び左門が其落胤たる事の物語りも長きに過ぎたればお絹左門兩人の間に宜しく析裏すべし。併し脚本は趣意を十分に知らしむるを專一とするに由り斯は書き綴りたるなり。實地に施すに當りて取捨するは狂言作者の任なりと知るべし

因に豐島一家の系圖を左に掲ぐ。但し是は此劇の趣向に出でたる系圖なれば眞の豐島系圖には太だ異なる事を諒し給へ

- 亡 豐島平左衛門以盛
  - 應永廿七年卒
  - 亡 武藏介幡盛
    - 應永廿八年卒
    - 練馬左門
    - 後に 豐島大炊助近盛
    - 民部丞秀盛
  - 亡 彈正陳盛
    - 鶴姫
  - 亡 玄蕃龍盛
    - 修理亮貴盛
  - 亡 豐島造酒助某
    - 亡 縫部某
      - 次郎富盛

第二幕（一）豐島民部丞落去

此は豐島彈正が館の奥にて息女鶴姫の居間なり。此鶴姫と申すは今年十七の花盛り父の彈正が猛きに引き替へて心も優にやさしく絲竹の藝は云ふも更なり草手書花結びなどにも長じ給ひ殊に色白く髪長く容顏實に美麗にて絶世の美人なれば彈正の慈愛別けて深く實子とては此姫一人其上に母上には三年程前に卒去しかば親子二人のみなるをもて彈正はよき聟金を擇び此姫に娶はせて豐島の家を讓らんと兼々思はれしに付き彈正が甥の修理亮貴盛を初めとして一門他門にて我こそと心を運ぶ輩の多かりけれど彈正の心に適はず今年迄も未だ其定めなかりけり。然るに此姫は何時か當館の若殿民部丞秀盛と人知れず忍び語らひわり無き中に成り玉ひしが素より從兄弟同士の間柄その上に民部丞は當家嫡流の若殿なれば此姫と夫婦になり玉はゞ先殿當殿御二人の血統一ッになりて御家の納まり方も極めて宜しかるべしと内外の人々心あるものは内々にて悦び居たりけり。

扨も民部丞は手勢二百騎ばかりにて浦和に着陣なし御所方と一手になり管領方の大將醜鼻性順が後より押寄せんと手段を運らし其用意をなしたれど武藏にては一味に加はるものも思の外に少なく其上に去月十九日高橋の城は大石石見守が勢に攻め落され國府野美濃守兄弟は大石が爲に討れしと聞えしかば浦和の勢は聞怖して追々に逃げ散り殘り少く成つたる所に三月廿八日の曉に管領方根津伊豆守倉賀野左衛門の大軍に

攻め立てられ必死に防戰したれども多勢に敵し難く散々に打なされて落失せたり

此に豐島彈正は一の家老總番頭練馬左門が諫言に由つて民部丞追討の事は一旦思ひ止まッたれど浦和の敗軍に民部丞は其場を落延びたりと聞えたれば「若しも當地へ潛びて立ち歸る事もあらんぞ、左ありては管領家へ對して愈々以て申譯相立ちがたし領分の口々を嚴しく固めて決して入れな」と沙汰したるに數日前より修理亮、池袋、神谷等より「民部丞は慥に豐島の領分に逃げ歸り潛伏に相違なし」と注進したりければ彈正は大に怒り「草を分ッて詮議なし民部奴に繩打つて引き連れ參れ」と下知を下し武家百姓の嫁ひなく家毎に穿鑿せしめたれど更に行衛も知れざりけり

頃しも四月七日の夜の事なりけるが豐島の奥殿鶴姫の居間にては息女鶴姫彼の民部丞が出陣の時よりして戀人の身の上をのみ案じ煩ひて居たまひけるが取り分けて此三四日このかたは三度の食事もつや〳〵聞し食し給はず一間にのみ閉籠り痛く苦勞の體に見え給へば侍女の冷泉、十六夜、卯月、吳服は如何にもして姫が心を慰めんと或は琴ひき唄うたひ或は繪合せ貝合せ草盡し花盡くし果は浮世の面白ばなし何がな憂を舞さんと千々に心を碎けども鶴姫は更に興じもし給はず侍女どもが持囃すを物懶とや思はれけん一同に打

向ひて

鶴姫『モハヤ初更になりつらん何も引下ッて休息しやトありければ冷泉其外は鶴姫が顏を見て

冷泉『有がたう存じ上げます御意に從ひ下りませうが此二三日以來は姫君樣の御顏の色十六『常に替つて物案じの御氣色にて物さへつや〳〵召し上らず憂ひに沈みてましますは

卯月『若やかの戀人樣の御行衛御案事あッての御事では御座りませんか

吳服『我殿には平生の御氣質とて嚴しい御詮議では御座りますが、ナンノマア元が血を分けた甥の殿

冷泉『御家老職の左門殿より御慰めあるならば、御身の上に御氣遣ひも御座りますまい

十六『やがて其内に御在家も知れまして元の通りに御成りあそばし

卯月『程無く御婚禮にも成りませう程に

吳服『御心を大丈夫に御持ちあそばし

皆々『必ず御案じ遊ばすな

ト慰め申せば鶴姫は思はず落ち來る涙の玉、振りの袂に受けとめて

鶴姫『皆のもの善言て呉遣たのう、妾も心が慥かに持つほどに其樣に案じてたもるに及ばぬぞや、短き夏の夜も更れば早う往つて休息しや

冷泉『左樣なれば姫君樣

皆々『御免を蒙りまするで御座りませう

ト侍女は心か殘し次の間へこそ入りにけれ。後に鶴姫四邊を見廻し忍び足にて傍なる唐櫃の側に寄り差錠の鑰を入るゝも物音を憚る手先ワナワナと震へながらに漸々と蓋を明くるも女の一心餘所に漏らさぬ忍び聲

鶴姫『申し民部丞樣サヅ御窮屈て御座りましたらう、モウ誰も居ませぬ程に是へ御出て遊ばせや

ト云ふに從ひ唐櫃の中より出づる民部丞年は二十を三ばかり越したる花の若殿振人目の關を忍び草文字摺したる直垂の露に萎るゝ風情なり、鶴姫は甲斐々々しくも勞はりて褥の上に請ずれば

民部『思掛けない計ひに御身の苦心察し入る。余こと計らずも先月下旬浦和の敗軍花々しく討死せんとは存

ぜしが落合五郎が達ての諫に多くの敵に後を見せ其場を退て樣子を聞けば叔父上には御心を醜へし管領方へ御一味剩さへ余を御敵なりと沙汰あッて追罰せよとの御差圖。もはや此上は敵勢の中を切り拔て結城の城に赴くか左も無くば尋常に腹切つて相果るか二ッに一ッと迫りし折から練馬左門が腹心の若黨上田惣平密使として陣所へ駈せ付け兎も角もと切に申し勸めしゆゑ詞に從ひ簑笠に姿を包み惣平が下僕に扮して館に入り込み夜深けを待つて人知れず御身が居間に潛みたるは三日以前

鶴姫『その夜の事で御座りましたが左門が密かに是へ參り民部丞樣云々に計らひたれば二三日の間妾が居間に忍ばせ申し奉れと世にも稀なる左門の信切其より此唐櫃に入れ申し侍女どもにも知らせずに妾が及ばぬ手一ッで心ばかりの御介抱サヅ御難儀て御座りませうなア

ト顏を見合せ取りすがり泣聲外に洩らさじと袖に覆ひて堪ゆれば民部丞も涙を浮めて

民部『御身が信切死ぬとも忘れは致さぬぞや、實に燈臺影暗しと申す諺の通り此奥殿に潛み居りなば兩三日は顯はれず其内には潛み所をしつらへて必ず匿ひ申さんと云ふに任せて御身の世話には相成れど、同じ館の奥なれば日數を經る其中に露顯に及ばゞ此身の恥辱御身の難儀、此上は一刻も早く此館を忍び出て何方

へなり立ち忍ぶか然らずば叔父上の檢使を引受けて生害いたす此身の覺悟

ト聞くより姫は取りすがり悲しみの涙おし拭ひ

鶴姫『ソリヤ聞えませぬ民部丞様貴郎ゆゑなら妾が體どうならうとも厭ひませぬ今この館を御出であらば往く先々は敵の中、一家の修理どの丶面憎さ折か見隙を求めては妾に向ひて無體の戀慕身の毛よだちて否らしく送りし文を突返し面恥見せしも二度三度それを根に持ち遺恨を含み態と討手を望み受け惡漢共と言ひ合せ貴郎を覗ふ邪もの、其に此所をば立ち退いて御出であらば一大事妾が身の上は御案じなく左門が知らせの有るまでは御窮屈ては御座りませうがマア〳〵是へ御忍び遊ばしませ、滅多に外へは出しませぬ

ト男を思ふ貞節心。民部丞も感じ入り

民部『情ある御身の詞一方ならぬ苦勞を掛け猶此上に潛み居ると言甲斐なきには似たれども左門が報知のある迄は御身の計ひ宜様に……

ト姫が手を取り頼み入る

鶴姫『ソンなら妾が申すこと御聞入れなされて下されますか、御嬉しう存じます

ト少しは安堵の思ひをなし猶も語らふ折柄に後の襖の外邊にて忍ぶ知せの咳拂ひ、民部は驚き立ち退きて姫の裾に隱るれば襖を明けて入り來る左門其と見るより手を支へ

左門『姫君これに御座しまするか。シテ彼の御方には

ト尋ぬる詞に民部丞は立ち出て丶

民部『左門其方の信切過分ちやぞ、其れに付けても此身の落着は……

左門『其儀に付き急ぎ申し上げん其爲に密に是へは參上いたしたり、當御殿へ御忍びあるも最早三日露顯の程も心許なく御座りますれば僕すでに手段を運らし練馬の里なる田舍家へ屈竟の御隱家用意いたし置きたれば今宵の月の入るを合圖に暗に紛れて奥山の築山傳ひに忍び行き西跳橋を出でさせ給へ跳橋は豫て錠を外し置きたれば物音聞えず下り申さん、橋の外には惣平と御忍姿の品々を持參いたして御待ち受け仕つて居りますれば直に姿を替へさせて惣平召し連れ御隱家へ落させ給へ、御敵の翠が草を分つて詮議なすとも御在所の知るゝ氣遣ひ更になし御心安く思召し疾々御支度遊ばされよ

ト云へば民部丞は左門に向ひ

民部『今に初めぬ其方が心遣ひ頼みに思ふは其方一人、然らば勸めに隨ッて今宵直樣館を出てん
ト聞くより鶴姫本意なき思ひ
鶴姫『其では左門其方は民部丞樣を練馬の里へ御連れ申して往きやるかや
左門『何にも當御館に此上永く御座ッては御身の上も掛念に御座れば
民部『少しも早く忍び出てん
鶴姫『マア忙しない、アレ御覽あそばせ、七日の月の照る影はマダあの樣に明るいては御座りませんか
ト云ふも別れの惜しまれて暫しなりとも置きたき謎。左門は早くも其と悟り
左門『何さまマダ月影も殘ッたれば、姫君、ナア、其間に御別れを惜ませ給へ
ト言ひ置て襖の外にぞ出でにける。後には鶴姫民部丞が側により
鶴姫『ソンナラ民部丞樣貴郎は愈々練馬の里に御出て遊ばすか
民部『唯今も左門が申す通りなれば是より直樣參るて有らう
ト聞くに鶴姫打嘆き

鶴姫『ソリヤ御身の上で御座りますれば御立退を御止め申しは致しませぬが、此場になッて御側を離れます
るが殘惜しい程に……コレ申し民部丞樣妾も共に隱家へ御連れなされて下さりませ
ト云へば民部丞は打驚き
民部『コハ思ひ寄らざる望みよな、民部丞は人目を忍び木にも草にも心置かるゝ落人の身の上いかで御身を
同道の成るべきぞ、一旦は左門が計ひにて虎口の難を遁るゝとも嚴しき詮議に見出だされ果なき最後を遂
げんも知れず、御身は後に止まッて我亡後は叔父上の御意に從ひよき聟金を夫に持ち家名相續いたされて
幾久しく繁昌あれ、其れに附けても今生の對面も是限り、今まで兩人が契りし緣し仇し夢ぞと明らめて我
死にたりと聞きたまはゞ餘所ながらに一片の回向を頼む鶴姫どの
ト流石に猛き武士も涙に暮れて悄然たり。鶴姫悲しさ遣方なく
鶴姫『ソリヤ餘まりぢやぞへ民部丞樣そもや二人が戀中は昨日や今日の事かいな、振分髪の幼けなき其の時
からの少なづれ、貴郎は先殿の御跡目妾は當主の息女ゆゑ從弟兄同士の好夫婦御羨やましい御二人と侍く
女の噂沙汰、子心にも嬉しいと思ひ初たが緣の端つひ戀風の吹きもつれ語り合ふたは去年の秋最中の月を

誓ひに掛け互に契る往末に小夜の寢覺めの睦言は皆偽で御座りましたか、どうぞ一所に立ち退いて練馬の里の隱家へ御連れなされて下さるか、其れが否なら今此で貴郎の手に掛け殺してたべ

ト處女心の一筋に泣き口説かるゝぞ無慙なる。民部丞は姫が心を推し量り涙に眼をしば叩き

民部『世に便なき余を斯まで思ひ給はるか、エ―添けないぞや鶴姫どの、去ながら我身一だに忍ぶに憚る此時節御身を伴ひ隱れなば其ぞ石を抱いて淵に臨むに異ならず、依つては御身の心にめで我生害を思ひ止まり此上にも憂目を忍び恥辱を堪へ一命を全ふして時節を相待ち申さん程に御身も短慮の心を押さへ何とぞして余が再び世に出る時を待たれよ、得心あれよ鶴姫殿

ト涙ながらに慰むれば

鶴姫『ソンナラ必らず

民部『承知いたした

鶴姫『忘れ給ふな

民部『忘れはせぬ

ト行末の末の末まで言ひ替はし、又た逢ふ迄の形見にと民部丞は腰に差したる短刀の小柄を脱て鬢の毛を研て渡せば鶴姫は押し戴いて懐中に納め入れしが其小柄乞受取りて妾が形見に持ち給へと前髪の毛を惜し氣なくズツクと研つて差出だせば

民部『添けないぞ鶴姫どの肌身に添へて持ち申さん

ト直垂の襟を披いて懐に納むる所に襖の外に又も聞こゆる左門が聲

左門『若殿早く出でさせ給へ御館の中心許なう御座りまするぞ

ト知らせの詞に打驚き

民部『ソンナラ鶴姫

鶴姫『民部丞さま

民部『無事で御居やれ

鶴姫『御大事に

ト急ぎ別れて民部丞暗ぞ忍ぶに便りなるとヒラリと椽を飛び下りて木の間樹蔭を千鳥駈奥庭傳ひに落ち行

きけり。鶴姫は殿の行衛の案じられ柱に取り付きつま立ちして後委を見え隠れ見送る折しも侍女どもが御姫様御姫様と呼ぶ聲にハッと驚き帳臺の中にぞ深く入にける程もあらせず練馬左門此所へ出て來り奥庭の遙か向ふを打眺め

左門『扨は若殿にはや落ち給ひしか先づ共れにて一旦は此場の危難を救ひたり有がたし忝なし此上とも若殿の御身の上守らせ給へ無事息災の擁護を願ひ奉る

ト心の中にて神佛に祈念を掛けて座敷を見廻し不圖目に附たる一ッの小柄取り上げ見ればコハ何に赤銅魚子に連獅子の金色繪是れはとハッと驚きて

左門『コノ小柄は若殿の御品、危ないと、既での事に人目に掛ッて露顯する所て有つたよなア

ト疊紙の間に入れ急ぎ懐中したりけり

(二) 豐島彈正横死

此方の座敷は當家の主君豐島彈正が居間なり。彈正は只一人默然として手を叉ぬき障子をサッと押し開き七日の宵の新月に露を含める夏木立青葉の色も美しき庭の景色を打ち眺め越し方行末の事ども思ひ續けたる折こそあれ空に聞こゆる杜鵑二聲三聲音信れば

彈正『夏山になく郭公心あらば物思ふ我に聲な聞かせそ。とは古今の名歌心に愛ひなき人は山郭公の初音を待ち聲の限りは我宿に鳴けよ聞かんと云ふべきが亡き鶯の巣に殘る子て子にあらぬ雛鳥は我身の末の仇なりと不便ながらも喰殺す邪見の喙恐ろしや

ト我と己を責むるなる懺悔の念に愛ひを帶び獨り心を苦しめて暫し眼を塞ぎたり。彌あッて眼を開き

彈正『ハテ我ながら心弱きは氣恥かし一旦思ひ定めたる上は是が非ても立て通さねば我身の大事、去とては甥の民部奴何れに隠れ居るやらん搜し出だして成敗を致してくれねば相成らぬ

ト又もや起こる非道の惡意、向ふを見れば築山の樹蔭に見ゆる物影に彈正不審と眼を附けて刀おッ取り立ち上がり屹度睨めば正しく人影、胡亂の曲者ごさんなれと猶も瞳を定めつゝ見遣れば如何に曲者は民部丞が姿に似たり。扨は民部か脱さじと周章く手を打ち鳴らし

彈正『誰ぞ居ぬか〳〵

ト呼び立つるに應と答へて次の間の襖を明けて入り來るは一の家老の練馬左門恭しく兩手を支へて

左門『急の御召し御用に御座りまするか

彈正『ムヽ左門か、アレ見よ向ふの築山の彼方に見ゆる人影は……アレアレあの如く泉水の橋を渡り……アノ植込に隱れしは正しく曲者しかも民部丞に相違ない。急ぎ館の裏表門を打ち木戸を固め外濠に勢を配り館の内を狩り立てゝ彼の曲者を引つ捕へよ

ト烈しき下知に練馬左門ハッと計りに驚きしが心を落ち付け左あらぬ體にて

左門『アイヤ我君あれは人影では御座りませぬ御寵愛の獅子犬が駈け廻るのて御座ります

彈正『言ふな左門、我老眼なりと雖ど人と犬とを見違へる程に老耄は致さぬ、あの姿こそ正しく民部奴早く往け、疾罷ッて下知いたせ

ト急立つれど左門は些とも騒ぐ氣色なく

左門『御意には御座りますれど正しく犬に相違は御座りません

彈正『イヽヤ問答無益、主命背くな、早く手配りいたさぬか

左門『アイヤ御諚固より背きは仕りませんが若しもあの犬が仰せの如く民部丞様で御座あらば我君には何と

遊ばされますな

彈正『何とするとは無用の尋ね、豫て申し達せし如く引つくゝッて首打ち落し管領殿へ差し上げろッ

左門『ソハ又何の爲て御座りますな

彈正『何の爲とは愚けたるか左門、此彈正に貳心なき心の潔白表はす爲だッ

左門『御尤には聞ゆれど民部丞様は先殿の御嫡男當家相續あるべき若殿、よしや一旦の御誤りの候とも我君年頃の御勤功に代へ達つて御赦免を御願ひあらば管領入道殿（憲實のこと）御聞き入れなき事は御座りますまい其上にて御息女の鶴姫君と御夫婦になし奉り愛でたく御跡目を讓らせ玉ふこそ御當然の御儀なれ、然るを未だ管領家より何たる御沙汰も無き中に草を分ッて詮義なし若殿に生害させんと厳しき御下知は恐れながら此左門御賢慮の程合點が參りません

ト不審をすれば、彈正は心せかれて聲荒らげ

彈正『ヤア入らざる汝が不審だて、彼是申す其中に後れては後日の妨げ

ト云ひつゝ傍の柱に掛けたる撞木をおつ取り文机の上に釣るせし喚鐘を已に打たんとなしければ左門は進

んで彈正が其手をおさへて

左門『御待ちあれ、我君樣、管頭方へ貳心なき證據に若殿民部丞樣を殺さんとは表向の申譯、實は是に附托て若樣をば無物になし先殿の枝葉を枯らして御心を休めん爲の御計略て御座りませうがナ

ト屋を指されて彈正は顏色を替へ

彈正『何と申す

左門『數ふれば二十年前勿躰なくも先殿を毒殺なし次いで奧方をも押し片付け醫師正齋を斫殺し露顯の口を塞ぎたれど若しも民部丞その密事を聞き出だし我をば父の敵なりと覗はゞ此の身の大事なりと思召し折もあらばと待つたる中に今度の騷ぎを幸ひに民部丞を嗾かし御所方に一味させ其を科に言ひ做して殺さうとの思し立ちて御座りませうがな

彈正『ヤア奇怪なり左門、兄を殺し家を奪ふたる覺えは此彈正かッて無いワ

左門『御包みあるな我君樣、餘人は知らず此左門其時の御密事始終明細に承知仕ッて御座る、去りながら恐れ多くも我君の御密事御高恩を蒙ッたる臣何樣の事あらうとも他言は決して仕りませぬが、何卒今日只今

御心を飜され民部丞樣を御跡目に立てゝ陛ながら先非御後悔の思召し立ち偏に願ひ奉る

ト兩手を突いて涙と共に諫むれど一かな聞かぬ荒氣の彈正

彈正『イヽヤ知らぬ、覺えは無い、其とも左門其方は痕跡も無き世間の噂を信實と心得此彈正に逆らふ所存かは臣が身命に替へても御救申し上げ奉り度御座ります左門が一命は後日露顯の掛念ありと思召さば何時にても召し上げられよ仰に從ひ潔く切腹仕らんが、若殿の御事は數なられども臣が諫めを御用ひあッて御改心願ひ奉る

ト忠義に凝つたる左門が諫言。彈正は流石に心に覺えある密事の惡惡且は驚き且は怪しみ迚も言ひ拔けはなり難く殊には器量人に勝れたる左門なれば我が出樣次第では如何なる大變出來せんも計り難し毒を喰はゞ皿までとは好諺不便ながらも惡惡知ッたる上からは、此世の暇を取らせて呉れんと心に起る大惡心故意と面を和げて

彈正『アヽ誤ッたり〳〵如何にも汝が云ふ通り思ひ廻せば二十年の其昔、妾腹たりとも長男に生れながら弟

の武藏介に家督を取られし無念に堪へかね道ならぬ惡逆に心の望みは達せしが、未來永劫空恐しき我身の罪業責めて懺悔の證しには其方が諫めに從ひ如何にも民部丞が赦免を願ひ鶴姫と夫婦になし我跡目を讓るであらう

ト思ひ掛けなき彈正が詞に左門は首を下げ落つる涙を押し拭ひ

左門『スリヤ臣が諫言を御聞き入れ遊ばし下されますか、ハヽ有りがたう存じ奉る

ト嬉し悅び平伏す。其隙を見て彈正は傍なる太刀を引き寄せて拔く手も見せず

彈正『左門覺悟

ト斫つて掛かれば左門はヒラリと身を替し

左門『コハ何故の御手討

彈正『大事を知ッたる諫馬左門其方が命は此彈正が申受くるぞ

ト再び太刀を振り上ぐれば

左門『民部丞樣御家督あるを見た上は何時にても差上げませうが先其迄は滅多には御手打に成りますまい

ト右に拂へば左に替はし左を斫れば右に披き飛鳥の如くに振舞へど相手は名に負ふ豐島彈正、年こそ寄つたれ修諫の太刀先左門は無刀の應戰に已に危うく見えけるが心附きたる懷中の小柄を取つて當座の得物受けつ流しつ戰ひしに猶も打込む彈正が勵しき切先丁と受け止め直に附入り利腕を取らんとすれば取らせじと互に爭ふ其中に思はず突いたる小柄の細身彈正が胸板ズブと貫ぬけば急所の痛手に差しも剛氣の彈正も堪り兼ゥント叫びて其儘に右の手には太刀を持ち左の手には小柄の柩を掴みつヽドウと其場に仆れたり。左門はハッと打驚き仆れし彈正が傍に寄り能々見れば急所の即死

左門『扨は此の左門が手に掛けて殺し奉りたるか……二十年前武藏介樣御夫婦を毒殺ありし報は的面廻り來て其落胤たる左門が刃に掛かり給ひしは自業自得の天罰なるか……とは云ふものゝ此左門、八歲の時よりして御高恩を蒙ッたる大切の御主君を弑したるは五逆の大罪勿躰なや恐ろしやイザ此の上は直ぐさま此座にて切腹なし死出の山路の御供なし三途の川原に追附て此身の御詫をなし申さん

ト心を定めて彈正が持つたる太刀をもぎ取らんと爲したりしが

左門『イヤ〳〵我いま此の場にて相果てなば豐島の御家は忽ち滅亡……誰あつて民部丞樣を御跡目に直

すべき……殊には浮念入道を初めとして御一門御家臣には修理亮殿の悪事に與し御家督横領の企巡ある時節……今は死ぬる時節に非ず惜からぬ命を惜らく永らへ民部丞様を御跡目に立てたる其の上にて此身の御詫を仕らん、夫れ迄は我君様、左門が命何ぞ暫らく御預け下さりませ

ト生たる人に云ふ如く彈正が死骸に拜禮し涙に暮て居たりけり、漸あッて氣を取り直し

左門『ア、我ながら後れたり心弱くては適ふまい

ト思案に屹と心を定め衣紋を作りて襖を明け撞木を取つて喚鐘を續け様に打ち鳴らせば宿直の武士は「スワヤ變事の起つたか」とおッ取り刀に飛び起きて前後を爭ひ馳せ來れば左門は聲を張り上げて

左門『ヤア我君の御大事ぞ、僕詰所に宿直して眠りも遣らず居たりしに物騒がしき御居間の物音心得難しと馳せ付けて見れば殿には横死の御最期曲者は御庭の植込に逃げ入つたりと覺ゆるぞ、方々御油斷あるな、御内庭の隅隅まで急ぎ穿鑿いたされよ

ト下知を下せば畏まッたと諸士一同松明照して内庭より奥庭かけて搜したり火急の報知に鶴姫は驚き周章て走り出て父の死骸に取りすがり

鶴姫『父上様悲しい御最期遊ばしましたか、左門はやく敵を打つてたべ

ト悶え悲しみ打ち嘆き正體なきも道理なり。迫々馳せ來る面々は一門の修理亮、下野入道、須俣平兵衛、鳩谷隼人を先として家來には秋庭掃部助、高田法眼、池袋源左衛門、板橋十郎三郎、神谷左近太郎、音羽平内兵衛、巣鴨八九郎等宗徒の輩みな一同に集まりて醫師は疵口改めて脈體見ればはや事切れて甲斐も無し。諸士隈なく館の内庭の隅々探し盡して立ち歸り

諸士『詮議を致して御座りますれば内庭の切戸をば明け放し夫れより西跳橋の錠を明け橋を下して曲者は逐電いたしたりと覺え其の足跡も慥に殘つて御座ります

ト注進すれば

修理『扨こそ曲者は館の内に忍び入叔父上を殺し裏手より逃げ去つたに相違ない

下野『其曲ものは何奴なるか

平兵『御所方の忍びのものか

隼人『但しは彈正殿に遺恨を存せし者なるか

掃部『思ひ掛けなき我殿の御横死

ト皆一同に彈正が死骸の周圍に座を組みて忠義に厚き人々は思案に餘ッて悲しみの涙の出て來る暇もなし

左門は諸士が報知にて民部丞は難なく諌馬に落ちたりと密に安堵の思ひを成し、此上は此場の納まり要こそあれと手を叉き默然として居たりしが一座の騒ぎ押し鎭めて

左門『我君の横死不意の御事に候へば姫君を初めとし奉り御一門の方々御家臣の面々御心底察し上る、取り分けて此左門事は幼少の折より御側近く召し仕かはれ抜群の御取立てを以て一の老職を仰せ付けられたる身分に御座れば我君を害し奉ッたる曲ものは身命を擲つて召捕へ必ず御恨みを霽し奉る覺悟に御座る、其に附けても急速に此事を管領入道殿へ注進いたし豐島の御家御取潰しに相成らざる樣御跡目を願ひ奉るが肝腎なれば此儀は家老中一座の評議を盡し其上にて御一門方の賢慮を鎭ひ郡合に由ては諸士一同の大評定を促す事もあるて御座らう、夫れ迄は當分の所この左門より申し上ぐる通り御取計ひを願ひ奉る、何はともあれ先づ我君の御遺骸御疵口を包み御穢れを淨め御書院に直し奉り其より御葬送の御式を行ひ申さん間方々其御用意あつて宜からう

ト詞を正して相述ぶれば皆一同に承領なし

諸士『如何にも事定る夫れ迄は左門が詞に從はん

ト心の底は知れねども其場の體を繕ろひて

諸士『左らば御死骸を淨め申さん

ト立ち寄る中に修理亮は彈正が左の手に掴みたる品こそ不審とこち放ち見れば血汐に染みたる小柄、紙にて拭ひ改めて

修理『コリヤ是赤銅魚子に金の連獅子

ト云ふに池袋源左衛門は小柄を受取り穗先を見て

源左『相模國住人秋廣と彫つたる銘は

下野『夫れぞ先殿武藏介樣の紀念とて民部丞殿が

十郎 肌身離さず差されたる國吉の短刀に添へられし見覺えある御小柄

皆々『扨こそ我君を殺害ありしは民部丞殿か

ト云ふに驚く鶴姫はソリヤ……と云はんとせしを左門は眼にて言なと制し、をのが胸先小柄にてゑぐらるゝ心地をばじッと忍びて默然たり

第三幕　（一）　豐島館奥庭

扨て練馬左門は民部丞を去る四月五日の夜に豐島の館の奥庭より跳橋を越えて落とし遣り腹心の若黨上田惣平に申し付け密に練馬の里なる隱れ家（即ち左門が實母お絹が住居ひし家なり）に潛ばせ民部丞が忠臣の落合五郎並に左門が義兄の平五郎を附け置いて深く在家を秘したれば表向に左門が下知にて民部丞を詮議に及べども更に顯れずして居たりける。去る程に豐島家に於ては當主彈正は曲者の爲に横死を遂げたる旨を鎌倉の管領へ早打ちを以て屆け出て猶豐島家跡目の事をも相願ひたるに近日御使を以て御教書を下さるべき旨を達つせられたりければ當家の興廢如何あるべき歟畢竟彈正の横死は管領方へ御味方申したるに由つて御所方の手に殺されたる哉に我も人も思ひたれば家督御取潰しには相成るまじきが誰に跡目を下さるゝやらん鎌倉の御評議の一向に知れざれば修理亮は下野入道淨念、池袋、板橋、神谷などの一味と謀り

内々鎌倉へ手を廻して修理亮へ跡目を賜はる樣にと賄賂を遣つて其筋に頼み込ば練馬左門にまた豐島次郎秋庭掃部助、高田法眼と心を協せ先代の嫡男民部丞秀盛が科を宥され彈正の跡式相違なく下し賜かるゝ樣にと内願書を奉つりて只管に願ひ上げて管領家よりの御沙汰なのみ相待ちたる所に五月二十日に至り鎌倉の御上使として和田作人正、赤堀左馬助の兩將豐島の館へ入來なりと先觸ありしかば一門一家中皆總出仕して上使の來たるを待ち受けたり。館の奥には彈正の息女鶴姫は去る四月五日の夜に戀人の民部丞には館を落ちて行方知れず父の彈正には其夜不慮の横死を遂げ殊に其場に落ち殘つたる民部丞の小柄が修理亮の手に入りて其曲者こそ民部なれと彼の一味のもの共に噂さるゝさへ悲しく現在その小柄は云々と言解かんとする時は民部丞の潛家を顯すの恐れあれば明らさまに言ふことは出來ず其さへあるに同じ從兄弟ながらも面憎き修理亮が姫の嘆も思ひ遣らず間がな隙がな折を見ては姫に戀慕の惡口説に困り果てゝ憂き悲しみに其の身も窶れいとど衰れに見え給へり。侍女、冷泉、十六夜、卯月、呉服等は責めては姫の御心を慰め申す便りにもと姫を勸めて庭前の程よき樹陰に床几を据ゑさせて今を盛りと咲き出たる池の畔の杜若あれ御覽ぜと申せども姫の心は八橋の蜘手に亂るゝ憂思ひかの唐衣いつしかに着つゝ馴にし其人は遙かの旅に

あらずして近きあたりに御座せども逢見るとも情なや暗き其身の罪科に五月雨かゝる濡衣を乾しかねてぞ
ましますと悔みの涙に袖濡れて打しほれたる御姿、侍女どもは是を見て實に御道理と俱涙落ち來る露を押
し隱し「さばかり御案じ遊ばすな今日は鎌倉より御上使さまの御入來あれば「御家督の御跡目も定まりて
民部丞樣には御芽出たく「御相續あそばしてやがて姫君樣と御夫婦に「幾千代までの友白髮御祝言の御悦
び『きつとさう成るに違ひ御座りませぬ」と慰め誘して居たりける。斯る所に修理亮葛袴の襞いかめしく
朱鞘の大小差し誇らしノッサ〳〵と大跨に遠慮會釋もあら氣の振舞姫が側にドッカと腰を打ち掛けて

修理『ハヽア鶴姫どのには是に御座つて庭前の杜若を御覽だな
ト元來不風流の修理亮花を愛する心は無けれど戀の奴の追從に咲いたる花を打眺め
修理『ムヽ成るほど奇麗によく咲いた……咲きも亂れず散りも初めず……花の外には松ばかり暮初て花や散
るらんと小町の名歌ハテ能く讀んだものだなア
ト風雅めかすも鶴姫へ言ひ寄る詞のはし掛り。侍女どもは可笑さを袖に包みて笑を隱し
冷泉『ホンニ御意の通り澤邊に匂ふ杜若花紫の由緣の色

十六『色ばかりこそ昔とは昔の宿の杜若
修理『それだから業平も……折りてこそ其かとも見め黃昏にほの〳〵見ゆる花の……
卯月『ほの〳〵見ゆる花の
修理『エヽ、花の
呉服『花の夕顏
卯月『杜若では御座りますまい
修理『エヽ存じて居るワ、其を汝等に習はうか、花の夕顏とあるを花の杜若と取り替へるが即ち歌の手際で
當意即妙と申すものぢや、ナント鶴姫どの左樣ては御座らぬか
ト姫が側に招寄れば姫はハツト遠くに退き左あらぬ體にて
鶴姫『仰せの通りで御座りませう
ト挨拶して侍女に向ひ此を立ち去らんと云ふ思入を目くばせなし靜に立つて修理亮に向ひ
鶴姫『修理亮樣御寬りと遊ばしませ妾は御免を被ります

ト會釋なし床几を離れて立たんとするを見て修理亮は姫の袂を捉へ

修理『コレサ鶴姫どの少し其許に折入つて御話し申す事も御座ればマア是に御出でなされ

ト無理に鶴姫に再び腰を掛けさせて侍女等に向ひ

修理『身共は鶴姫どのに内談の筋があれば其方共は此所を遠慮いたせ

ト申し付くれども冷泉はじめ侍女等は皆去らざれば修理亮は面色を替へて

修理『ハテ遠慮いたせと申すに

ト荒々しく言ふに鶴姫は其と悟ツて

鶴姫『イヤ其方たちには妾が用事ある程に是に居や

ト吩咐れば修理亮は頬をふくらして

修理『イヤ鶴姫どのが達てと仰せある上は致し方が無い、其では是で言ふてこまそ、コレ鶴姫どの其許は餘りつれ無いぞや〳〵、誰あらう當家の一門豐島修理亮貴盛とも云はるゝ武士が數度の手紙に心の丈を書き盡し其上ならず面會の度ごとに首を下げ手を突て頼むのに曾に一度も色よい返事を仕た事も無くピン〳〵と跳付て聞き入れぬは現在從兄弟たる身共に對して恥辱を與へる心得なるかモウ其分では相濟まぬぞ……

と云ふ所だが身共は左樣な野暮は申さぬ蓼喰ふ虫も好々で其許が是まで人目を盜み民部丞と乳繰り合つて居る事は……ハテサ隱すに及ばぬ身共よく存じて居るゾ、併し其の民部奴は管領方の御敵と相成つて姿を隱す天下の科人メツタに逃ふ事は相成らぬ、其に又叔父御の彈正殿樹死の上は豐島家の相續誰れに下さるゝかと思はッしやる今日上使の御入來にて此の修理亮に跡目に仰せ付けらるゝは知れた事、ソウなるから は其許は的きり身共が奥方天下晴れの夫婦中否應は言はれまい、ジヤに由つて身共が心に從ふて自由になるが其身の爲だ

ト鶴姫を引き寄すれば、鶴姫は修理亮が手を振りもどきて

鶴姫『遙な事を成されますな修理亮樣、まだ婚禮こそ致しませね民部丞樣と妾とは親が許した妹背の中……

ソリヤ民部丞樣が不圖した事から管領方の御敵になり唯今では日蔭の御身で御座しても追つ付け御迎の開くる時節も御座りませう程に……

修理『ハヽア假令煎豆に花が咲くとも民部が世に出る時は無いゾ、今にもあれ隱れ家を捜し出さるゝ其時は

輕くて切腹重くて獄門、見じめな樣を見るてあらう、……左樣な者に惚れやうより豐島の跡綴たる身共に
聯くが其許の得だ
ト猶も品垂れかゝるを鶴姫は振除て
鶴姫『女とて見侮り餘りな雜言聞く耳もたぬ修理亮殿
ト立上がるを修理亮は姫が細腰シッカと捉へ
修理『言ふな〳〵鶴姫どの否と云はうが應と云はうが身共が相續する上は縛ッても抱いて寢るヲ
ト聞くより鶴姫悔しさに柳の眉を逆立てゝ
鶴姫『ソリャ面白い修理亮どの跡目の事はいざしらず夫婦の契りは其身の心に任すもの親でも主人の威光で
も儘にならぬは此道ばかり貴殿の樣な邪非道の武士はハイ否で御座ります
ト思ひ切つて恥しむれば修理亮はクハット怒り
修理『ヤア女と思ひ勘辨すれば無禮至極の其一言イデ物見せん
トつッ立ち上がり刀に反打怖かせば、鶴姫は些とも驚かず

鶴姫『横戀慕に妾をば手籠にするが無禮ては御座りませんか……サア切れるもので御切りあそばせ女でこそ
あれ豐島彈正が娘其脅迫には恐れません
ト帶の間に挿みたる懐劍とり出し身構へすれば修理亮は增々怒ッて靡荒らげ
修理『憎ッくき女が詞よな可愛さ餘つて憎くさが百倍、奴覺悟いたせ
トあはや刀を拔かんとすれば冷泉、十六夜、卯月、吳服「コレ〳〵待つて」と左右より修理亮が手に縋り
止むるを聞かず振り拂ふ、猶も縋るを「邪魔ひろぐな」と取つて投げ退け鶴姫目掛けて飛び掛らんとす
る處に最前より樹陰にて樣子を見たる練馬左門後の方よりッッと出で修理亮が利腕をシッカと掴んで捻
上れば修理亮は不意を取られて顏を顰め
修理『名乘も上げず我腕を取つたる奴は何者だ
ト振り向いて左門を見れば
左門『イヤ誰でも無い豐島家の老職練馬左門で御座る
ト云ふより早く捻ぢたる腕を引荷ぎ頭顛倒と投り出し

左門『是は〳〵修理亮殿、姫君へ御機嫌伺ひの御出仕で御ざるか、御苦勞千萬に存じ申す

ト鶴姫に向ひて兩手を支へ

左門『豫て申し上げたる如く今日は鎌倉の管領家より上使の御入來もはや時刻も近づきますれば御着替あつて御待ち受けの御用意遊ばすやう存じまする……ソレ侍女衆御附き添ひなされい

ト差圖すれば、鶴姫は衣紋をつくッて

鶴姫『そんなら左門程よい時分に……

左門『御出座申し上ぐるで御座りませう

ト返答する。後の方より修理亮は起き上がり刀を拔いて

修理『左門覺悟

ト切り掛くるを引つばずして膝に組み敷き

左門『姫君には先づ御入あられませう

ト會釋して修理亮を引き起し遙に向ふに押遣ッて

左門『修理亮殿にも御上使御出迎ひの御支度あれ、イザ御同道仕るで御座らう

（二）上使入來

此は豐島の館の大廣間、上段の間には今日入來の上使を待ち受けの席を設け、下段の間には左の方を一門の座と定め豐島修理亮貴盛、同次郎富盛、同き下野入道淨念、須俣平兵衛尉、鳩谷隼人助を初めとして其他の一族居並べば右の方には當家の老黨秋庭掃部助、高田法眼、池袋源左衛門、板橋十郎三郎、神谷左近太郎、音羽兵内兵衛、巢鴨八九郎其外番頭物頭に至るまで列を正しく着座なせば老職の練馬左門は當家の息女鶴姫を先に立てゝ奥の襖を開かせて出て來り正面に姫を座らせ其身は遙か後に退き上使の入來を迎へたり。程なく「御上使の御入り」と呼ばり次の知らせに出り奏者が案内に長廊下長直垂の裾長く靜々と入り來るは管領家の執權和田隼人正五十路を越えたる分別盛り衣紋も優美に打通れば後に次いて赤堀左馬助立居も武骨の海月武士、一同の平伏したる其の前を會釋も無くノサ〳〵正使と共に上段の設けの席に着座なす。左門は鶴姫の介錯として後に附き添ひ上使の前に平伏なし

左門『豐島彈正が娘鶴姫

修理『豐島修理亮初め一門の輩

掃頭『練馬左門其外家來の者共

皆々『何れも伺候仕つて御座ります

と披露をすれば

隼人『彈正が一門並びに一家中の重臣ども殘らず相揃ひ居るか

左門『御意の通り相揃ひ罷り居ります、從つて御上使には遠路の御入來御苦勞の段恐れ入り奉る、何卒上意の趣き仰せ聞けられ下さる樣一同願ひ上げまする

ト云ふに上使は打諾き

隼人『唯今申し聞くるてあらう

ト鶴姫に向ひ

隼人『練馬左門と申すもの是へ進められよ

ト命ずれば左門は鶴姫の傍に進み出でゝ

左門『練馬左門是に伺候仕つて御座ります

隼人『扨は其方が練馬左門よな

ト顏を見て夫れより副使の左馬助に會釋をなし懷中の書付を恭しく取り出して

隼人『御敎書であるぞ

ト嚴かに知らすれば鶴姫初め一同に平伏して聽聞す其御敎書に云く

今度豐島彈正陳盛事不慮の横死を遂げたるに由つて所領沒收せしむべきの所彈正年來の忠勤をめで豫て生前に願ひ上げたる如く一族たる練馬左門聟養子を許され彈正が所帶跡目相違なく下賜かるゝものなり室町御所の御沙汰により仍て執達如件

永享十二年五月十三日

安房入道高岳　判

兵庫頭清方　判

ト讀み畢れば意外の御沙汰に一同は打驚きて顏見合せ暫し詞も無かりけり。當の外れし修理亮上使の前に、進み出で

修理『御教書に對し奉つて不審を立つるは恐れあれど練馬左門事は原來筋目も無き地武士の悴彈正の意に適ひ老職には致したれど豐島の家門にては是なきもの

淨念『殊に生前に願ひ立てたる狩養子とは一圓合點の參らぬ御沙汰

鶴姫『左樣な事は父にて候りし彈正も更に申せし事もなく

左門『拙者とても夢にも存ぜぬ儀に御座れば事の仔細何卒御上使より仰聞けられ下さる樣願ひ奉ります

ト云はせも果てず赤埴は一座をハタと睨み付けて

左馬『ヤア慮外なり田舍武士等忝なくも室町の御所より仰せ下させ兩管領より御執達の御教書に不審を懷くは無禮至極、左門鶴姫その外一同有りがたく御受け申さば兎も角も彼是申す其時は豐島一家の所帶所領この座に於て沒取いたすぞ

ト威權を振ふ横柄を隼人正は押し鎭めて

隼人『何さま其儀は不審にあらん隼人上使の役目仰せ付けられたる其砌り入道殿に相伺ひ即ち故彈正陳盛が自筆の願書是に持參いたしたれば左門を初め鶴姫其外篤と披見いたして宜からう

ト懷中より取り出だしたる一通を渡せばハット練馬左門請取つて押し戴き修理亮ともろ共に讀み下す其文

躰の趣意柄は

武藏國豐島城主豐島彈正少忠平陳盛誠恐誠惶謹て願ひ奉る家督相續之事

抑豐島の家は武州八平氏の其一ッにして等持院殿の御時より御味方に勵し奉り殊に鎌倉の御所御奉公數代の忠勤諸人の知る所なり陳盛に至り廿年の間曾て他事を願みず忠義の一途に勵みし所陳盛不幸にして五十の齡を越ゆれども唯一人の娘あつて血統の男子なし亡兄武藏介幡盛が一子民部丞秀盛並に亡弟玄蕃龍盛が長男修理亮貴盛は甥なりと云へども柔弱無骨にして相續せしむるに足らず其他一門の輩は皆盡く武門の道に缺くる所あッて一族の旗頭となり御奉公を勵き致すべきの器に非ず玆に家臣練馬左門と申すは幼年の砌より陳盛に仕へ今年廿八歲の壯士文武の業に秀でゝ夙に關東名譽の武士の其一つに數へらる況や練馬は豐島の一族にて彼が父平兵衞は陳盛が五代の祖豐島平馬助直盛の庶流たること系諦に於て歷然たれば疎族なれども敢て他門と云ふに非ず庶流を出でゝ嫡流を嗣がしむるは武門の例已に其先蹤あるを以て右の左門を陳盛が狩養子となし娘鶴子に相添はしめ陳盛が家督相續の御許を被らんと願ひ畢ぬ然者陳盛死後に及て豐

島一家をして忠勤の志を繼續せしめんとの願意なり仍て此段御披露を願ひ奉る者なり恐惶謹言

永享十二年二月三日　　豐島彈正少忠平陳盛　判

進上

上杉安房入道殿

とは認めたり。豐島の家督は我物と思ひ切つたる修理亮これに一味の輩も、又民部丞を跡目にと心を盡せし忠義の面々何れも思ひの外なれば左しも行儀を正したる其座も自づと崩れ立ち豐島の浮沈此時と一座白けて見えたりける。欲に目眩み語らはれ修理亮に内々加擔の左馬助此躰見るより大口明て笑ひ出し

左馬『どうで御座ろ隼人殿。豐島彈正横死の砌り家督を續べき血筋の者は修理亮貴盛の外には無いと身共が評定の席に於て申し張つたを聞き入れず貴殿には彈正が願書取次の厮を以て是非とも願ひの通りにと達つて剛情申されたが、此場の樣は如何て御座ろ、左門とやら右門とやら、文武が何か分らぬが高の知れたる蚊蜻蛉豐島一家の旗頭は覺束ない、こんな所に長居をせうより直樣鎌倉に馳せ歸り此場の樣子を言上なし改めて御沙汰を待つが上使の役目、イザ御立ちなされ御同道いたすで御座らう

ト事を敗らん下心其れと悟ッて隼人正

隼人『左馬助殿御扣へ召され、不肖ながら正使の役は隼人正、貴殿の御差圖は受けませぬ

ト一本さゝれて左馬助

左馬『扨々御老人は御氣が長う御座るナ

ト咳きながら座したるは手持不沙汰に見えにける。隼人正は聲を和らげ

隼人『彈正が家督の願ひ一同更に知らずとあらば意外の思ひも無理ならず去りながら既に御教書を下し賜はッて彈正が生前の願ひ相達する上は固より異議のあるべき筈は無い道理、左門御受けは如何てあるナ

ト問はるれば、最前よりして默然たりし練馬左門上使の前に一禮なし

左門『御懇の御諭し有がたく存じ奉る隨つて御受申し上ぐる其前に一應何ひ奉りたきは去る三月廿五日亡主彈正の名代として御執權方へ差上げ置きたる拙者が願ひ民部丞秀盛御赦免の一條は御沙汰如何で御座りませうや

ト云はせも果てず左馬助聲を荒らげ

左馬『ヤア無禮なり練馬左門、御教書の御受けもせざる其内に民部赦免の願ひとは聞入るゝこと罷り成らぬ
隼人『又しても御氣の早い左馬助殿……、左門よッく承はれ、其方より民部丞赦免の儀彈正に成り替つて願
ひ出てたれど、今度其方に家督を下さるゝは彈正年頃の忠勤に愛ての御恩、民部丞赦免の事も其方が忠勤
次第では又思召の程もあらう
ト明けては言はねど詞の奥意
左門『委細相分りまして御座る、然る上は一門一家中の存意を相尋ねましたる其上にて改めて御請け申した
う御座りますれば御上使には暫時の間御猶豫あつて彼なる一間に御休息を願ひ奉ります
左馬『イヽヤ暫時の猶豫罷り成らぬ
隼人『如何にも猶豫は聞き屆けぬ一門一家中の存意これにて相尋ねて宜からう
ト上使の詞に練馬左門所存を定めて下段なる首座に直ッて威儀を正し
左門『各々方にも唯今御聞きなさるゝ如く不肖なる此左門先殿彈正様の御見出に預り豐島の家の養子願の
通り仰付けらるゝと存じ寄ざる此身の仕合、尤も此左門に於ては先殿の御嫡男民部丞殿を御跡目と存じ込

んだれど彈正殿の思召に適はざるのみかは唯今にては御敵の事なれば其儀も屆き申さぬ、然る上は御遺言
に任せ各方には此左門をば今日より權の主人と仰ぎ召さるゝか、但し不服の御所存なるか腹藏なく申され
よ左門是にて承はらん
ト詞淀まず述べたれば高田法眼進み出でゝ
法眼『シテ民部丞殿の御事は
左門『左門家督いたす上は此の身に替へて幾重にも御赦免をば他くまで願ふ心底なり
掃部『御赦免ある其時には
左門『ハテ其時こそは左門が望み……
ト其と知らする心の謎。豐島次郎は推察して
次郎『イヤ御尤もなる其御所存、イカニ法眼掃部其餘の方々、此場に於て彼此と異存を申す其時は豐島の家
を亡す恐れ、心を籠めたる彈正殿の遺言も水の泡に相成つて佞人讒者に此家を横領さるゝは無念の至り、
此上は餘人は知らず此豐島次郎に於ては今日よりして左門殿を主人と仰ぎ忠義一途に盡す料見、この通り

に御座る

ト席を下ツて平伏すれば秋庭、高田、音羽、巣鴨其外忠義の面々は實に尤もと得心なし何れも共に平伏な

し

掃部『只今次郎殿の申されたる如く

法眼『我等一同貴殿をば

高田『三代相傳の御主君と

巣鴨『仰ぎまするで御座りませう

ト敬へば、左門は一座に打ち向ひ

左門『早速の御承知滿足いたす……シテ修理亮殿、入道殿、池袋、板橋、神谷の面々は最前より無言なるが

返答如何承はらう

修理『假ひ叔父御の遺言でも現在今まで家來の貴殿

皆々『主人と侍き敬ふは

左門『不承知なりと申さるゝか……、不承知ならば是非に及ばぬ遠慮なく國遠あるとも又は人數を語らひて

謀叛するとも心の儘に致されよ、左門鉛先にて相手いたして遣はすであらう

次郎『君の御出馬までも無く次郎が向つて退治なし

掃部『一々首打ち落して御覽に入れん

ト勇み立つたる威勢に恐れ修理を初め一味の輩初めの擬勢は何處へやら皆打ち揃ひて薄氣味わろく閉口な

して一同に首を下げしぞ見苦しき。左門は左こそと打ち諾き改めて上使に向ひ

左門『御覽の如く一門一家中の所存も定まツて御座りますれば御教書の趣き謹で承はり彈正が舞養子家督相

續之段有がたく存じ奉る忌明の上は速に鎌倉表へ伺候いたし御禮申し上ぐるで御座りませう

ト禮を述べ一座も俱に禮すれば

隼人『御請承り屆けた、シテ其許には此以後も左門と名乘り召さるゝか

左門『ハッ先祖の由緣も御座りますれば今日より改めて豐島大炊助近盛と名乘りたう存じ上げます

隼人『改名の段も我等より言上いたすてあらう

左馬『ムムシテ又鶴姫と婚姻の一儀は……』

ト云ひつゝソレと修理亮に目くばせなし……

左馬『イヤ思ひ出したり其鶴姫は修理亮より彼が父なる彈正へ修理『御意の通り婚姻の約束あれば拙者が妻

鶴姫『何言はるゝ修理亮どの疵跡(きずあと)も無い虚言(そらごと)を……

ト爭ふ所を左門はきッと押し止めて

左門『無禮なり修理亮これなる鶴姫は御敎書を以て下し賜はッたる此大炊助が妻なるぞ

鶴姫『デモ姿には民部……

左門『エヽお默り召され、ソレ、ナ、此大炊助が妻なれば

ト心の中を鶴姫に知らせて上使に向ひ

左門『婚姻の一儀は忌服(いみこと)を畢ッたる上にて御屆を仕るで御座りませう

牟人『何さま左もあるべきはず、上使の役目相濟みたれば退散いたすであらう

ト左馬助に會釋して俱に其座を立ち上がれば左門は一座に向ひ

左門『上使の御立なるぞ……

ト辭を改めて云ふを聞き修理亮は無念に堪へ兼れ刀の柄に手を掛くれば一味の諸士も各々鯉口くつろぐ

是を見るより秋庭、晉羽、巢鴨スワヤと身拂なしたりける、左門は左右を睨み付け

左門『ヤア御上使の前をも憚らず尾籠(びろう)の振舞雙方ともにエヽ控へ居らぬか

ト制する詞も自から威風に恐れをなし思はずハッと一同に平伏すれば其を潮に

左門『何れも御上使の御見送りを仕れい……

第四幕　（一）　練馬里民部丞匿家(かくれが)

此は練馬の里なる豐島民部丞が隱れ家にて即ち序幕に於て練馬左門が姉お絹（實は左門が母）の生害した

る家なり。既に第二幕に述べたる如く民部丞は左門が情にて危き難(なが)を遁れ此家に匿れ居り附き添ふものは

落合五郎および侍女小萩にて（此小萩は序幕の第二場にてお絹の看病に侍ひける女なり）練馬平五郎並に

上田惣平の兩人は左門が内命を受けて時々に見舞ひければ事缺くるとにはあらねども民部丞は日臨の身の心細く月日を送りて夏冬を過し今は嘉吉元年辛酉の五日になりて一年を經たり

玆に豐島大炊助近盛（練馬左門）は去年五月御教書を以て豐島の家督を續ぎ一門の旗頭となりてより程なく管領家の催促に應じ豐島次郎、高田法眼の兩士を留守に殘し其餘の諸士を盡く召し具して管領兵庫頭清方が被官の勢と一ッになり同じき七月荒河の難戰に御所方一色伊豫守を打ち破りたるを手初として安房入道長棟庵主（憲實）に從ひ同き八月九日小山庄祇園の城に着し夫れより寄せ手に加はり岩松三河守、武田刑部、千葉介の勢と共に結城の城の南手に備へて對陣したりけるが結城には中務大輔氏朝の一族を初めとして今川式部丞、木戸將監、宇都宮伊豫守、小山大膳大夫その外桃井、里見、岡、生源寺、内田、小笠原の諸將必死の籠城したりければ數度の城攻に管領方の寄せ手は合戰その利なく遠卷の對陣に月を送り明くれば嘉吉元年の春に至りても落つべき樣は見えざりけり。惣大將清方は斯る一城を攻めかねて數月を送ると末代の恥辱なりと四月十六日を以て總攻めをなしたれば左しも結城の名城も一日の合戰にて落城なし結城其外宗徒の人々概ね討死を遂げたれば安王春王の兩公達は長尾因幡守が手に生け捕れ玉ひ隨つて古河の城も

共翌日に落ちて事全く畢り着到實驗を行はれしに豐島大炊助は小勢を以て南の郭の一番乘をなし其上に敵方隨一の剛將と聞えたる小幡豐前守と組み其頸を取つたる高名は其勳功一方ならず恩賞これ重かるべしとあツて北武藏の土地を許多下し賜はッたれば大炊助は面目を施し同き廿二日を以て目出度豐島の館に凱陣なし勝軍の祝宴を開き諸士に恩賞を與へ一家の繁昌を極めたり、左れば初めより大炊助に歸服したる輩は言も更なり竊に異心を懷きし者までも今は皆大炊助の恩威に感じ貳心なく仕へぬれば彼の修理亮の一味のものも自づと無くなりて修理亮は猫の如くに成り家督の望は全く思ひ切つたれど鶴姫に戀慕の思ひは未だ去らざりけり。然るに大炊助が初の心底は結城の合戰を畢りなば其勳功に代へて民部丞の赦免を願ひ改めて家督を讓り鶴姫と夫婦にすべき所存にて其事は鶴姫も秋庭、高田の諸士も承知の事にてあり又彈正殺害の事は小柄が證據にて民部丞に疑ひ掛ッたりと雖ども已れが殺したるなりと名乘り出づる覺悟にてありけるが今日は正しく豐島城主となりて新恩の加增を下され、榮耀其身に餘ッたれば今更これを棄るも惜しく且つ鶴姫の麗はしき姿容を見るに附けても斯る女を要にせんこそ男子の果報なれと不圖起りたる戀の情おのれと押へて押へかれ既に管領家より許されたる我妻なれば憚るべき所なしと夫れより鶴姫を口說しに鶴

姫は民部丞に操を立てて背んぜざりけり。

是と云ふも畢竟は民部丞が此世に在る故なり彼さへ無くば鶴姫も我心に從ふべし又我身の榮華も幾久しかるべし兎角に今と成ッては我爲めの妨は民部丞にぞあるなれば不便ながらも寧ろ彼を無きものにして我望を達するに若じと戀と欲との二筋に心に起る邪見の横道、夫れより密に計略を運らして修理亮を嗾かし、

「家督相續の事を思ひ切る上は鶴姫を汝に與ふべし其爲には民部丞を討ち取るべし民部が歿れ家は云々なり」と知らせ修理亮の手を假りて民部丞を殺させ又落合其外民部丞に無二の心ある者の手を假りて修理亮を殺させ其後にて鶴姫は我妻となし永く豐島の城主たる榮華を占むべしと恐ろしき巧みぞ成したりける

斯る巧の大炊助に在りとは知らず民部丞は左門（大炊助）を世に頼もしく思ひて其身の運の開くるを待ち落合五郎は人目を憚る其爲に土百姓に姿を扮して杢助と名を改め侍女の小萩をば妻となし自分は練馬平五郎の宅守と云ひ觸し去氣なき者の樣に振舞ひて民部丞をば我弟にて風痛ゆゑに腰拔となりたる病人なりと拵へて深く奥に忍ばせて居りたりける。頃しも五月十五日の午過し頃なるが小萩は新茶を焙じて土瓶に入れ串に差たる燒團子を日光盆に打ち載せて四方を見廻し奥の間の障子を明けて手を支へ

小萩『若殿樣サゾ御退屈で御座りませう是へ御出遊ばして御茶一ッ召上りませ

ト招ずれば民部丞秀盛は一間を出づるも忍び足靜々と座に直り

民部『コレハ〳〵新茶の振舞、小萩其方が心遣ひ嬉しいぞ

ト茶碗を取つて飲みたまふに、小萩は思はず兩眼に涙を浮べて

小萩『チヽ誰あらう豐島家の御總領民部丞樣ともあらう御方が時世時節と云ひながら賤の伏屋の御住居に世を忍んで御座りまするも最早今日で一年餘り人目を深く憚るゆゑ五郎どのと言ひ合せ主人の弟が腰拔けの煩ひて一間の中て打ち臥して長の病氣と云ひ觸らし此奥に起臥あそばす御窮屈さぞ御不自由で御座りましようそれが何より御痛はしう御座ります

ト袖に泣を押し拭へば、民部丞は故と左あらぬ躰を造り

民部『ハヽア又しても小萩が愚痴を申し居るよな、余が身の科も左門が忠義の計ひにて程なく乾く濡衣の再び世に出る時節が來やう、さう成る時は今の苦勞は昔話しの語艸…夫れに附けても心掛りはあの鶴姫、去年四月に別れてより互に便りは致さねど余がと心に掛り嘸な案じて居るであらう

ト流石に猛き民部丞も戀に引るゝ心の靱、小萩は夫れと推量して

小萩『ソレハ〳〵姫君様には御案じの段では御座りますまい、どうか序があるならば責めて此に御座あると御知らせ申して御文なりとも御取り次申し度いと五郎殿とも相談して内々左門殿へ伺ひましたればモシ左様の事が有つては忽ちに御兩人の御身の上と厳しい詞で御座りますれば其れも出來ず御二人様の御心根を推量して涙に暮れて居りまする

ト又もや涙に沈みたる女心ぞやさしける。民部丞は愁ひに鶴姫の事いひ出して小萩が嘆きを引き起し慰めかれて居給ひしに折から表の片折戸明くる音に心附き急ぎ一間に入りたまふ。小萩もハッと心附きあたり片付け何氣なく働き居たる其所へ案内も無く入り來るは豐島の郡で隨一の破落ものと聞えたる地潜の金太と云へる博徒これに續いて小萩が義理ある兄石飽の泥八是も劣らぬ不成漢ノッ〳〵と沓拔に草履拔ぎ捨て押し上がり小萩に向ひ

金太『チイ姉御内の杢助殿は宿に居てか

ト問へば小萩は又しても兄の泥八と云ひ合せ悪黨の金太奴が悪口説に來りしよなと心の中では瓜彈して居

たれども顏には其氣を少しも見せず

小萩『コレハ〳〵金太さんヨウ御出でなされました兄さんもヨウ御座んしたが生憎と内の人は先刻庄屋さんから呼びに來て參らしやんした程に……

泥八『ナニ庄屋から呼びに來て往つたと云ふのか、夫れじやア今に戻つて來るであらう

金太『折角來た序だ歸りを待つて談合せう

トドッカと座ッて大胡座キョロ〳〵四邊見廻して一間の様子を伺ふ風情底氣味悪き處置振に小萩は氣になり兄に向ひ

小萩『兄さん御前がたが待つて居やしやんしても内の人は殊に寄たら庄屋さんから外へ用達に往かんしたも知れぬ程に又出直して來て下さんせ、其とも私に云ひ置いて濟むことなら……

泥八『ム、杢助が居らいても汝に話して埒の明く事だ、小萩マア聞いてくれい、ザット斯いふ譯だ、余も此中から引續いて運の悪さに此金太兄に大分の負借が出來た其上に御年貢の永樂錢二貫と八百、兄に斷らずに取り出して皆打ち負けて仕舞ッたれば償ひ戻しの仕法も無くなり此上は縛られて代官所の土の牢には入ら

にやア成らぬ仕合、レコで兄が云はるゝにやア余が負借は暫く猶豫も仕て遣らうが御年貢の金はソウは往かぬ由つて何でも算段して納めてくれい達つて夫れも出來ぬなら無理からでも工面して納めても遣らうが其代りに汝が妹の小萩を余が女房に呉れるかとの掛合、汝が否と云やア我は直に牢に這入らにヤ成らぬ、コレ小萩我を助くるも殺すも汝が返詞一ッだ諾と云つて余が難儀を救ッてくれい、コレ妹拜む〳〵

ト手を合せ唾でぬらす鬼の眼に涙つくッて口説しは否らしくも亦怖ろしゝ。小萩は兄に打ち對ひ

小萩『思掛けない兄さんの難題今と云つて今御金や工夫は出來ずと云ッて妾には今では杢助殿と云ふ定まッた夫のある躰

ト云はせも合へず眼をむき出して

泥八『ナニ杢助男が汝の夫だと、誰が汝と彼奴とを夫婦にした

小萩『戯つた事を云はんすな、去年の秋に御主人の練馬平五郎様の御差圖で表向て夫婦の盃

泥八『ヤイ〳〵小萩とぼけくさッて此御兄様を馬鹿にするない、汝を練馬殿に奉公には出して居るが躰まで自由にせいと任しちやア無いぞ、父親が死んだ後は此兄が親同前だ、其親に斷りなしに成つた夫婦は本統

の夫婦じや無いワ、理を分けてやさしく言つて承知せずばサア我と一所にうせ上れ、女郎に賣るとも水使に遣るとも我が勝手心の儘だ

ト泣き入る小萩が手を取つて引立てんとする所を金太は傍より押慰めて

金太『コレサ〳〵泥八かよわい女を捉へて手荒い事をするない、コレ小萩殿卿と杢助男と譯のある事をまん更知らねエても無いが卿に惚れたが此方の因果て此中から手を替へ品を替へて口説てもきつい斷り樣、ソコて今度の年貢の未進卿の兄貴の泥八が泣きの涙で達つての賴み、ソウ云ふ事なら汝の難儀無理ても救つて遣りも仕樣が妹の小萩を女房に呉れるかと掛合つたら一も二も無〻承知の挨拶、親代りの兄が承知の上は卿にあア言卿あるめエと思ひの外の今の斷り、現在兄貴が牢に入れらるゝも構はずに己が好の色狂ひ杢助を亭主に持つて居たいと云ふ料簡の腐つた女、モウ此方にヤア望みで無い、其代りにはコレ泥八氣の毒ながら年貢の金の遣ひ込みで汝にやア是れから難儀を見て貰はねば成られエわい、アゝ是から追々大暑の時節唯で居てせエ熱いのに風も通はぬ地の牢で汝さぞ難儀をするだらうが、どうて長エ月日の中にやア苦しみ死をする事と覺悟をしろ、可愛想だなア

ト是も同じく空涙翻して話す云ひ合せ

泥八『兄貴ヨウ親切に言つて呉れた、我も牢に這入るからは生きて返る所存は無えが、餘りと云へば意くぢの無譯、ソコで是迄は兄弟の好みに眼を塞で見ぬ振も仕て居たが向ふが不實なら此方も不實背に腹は替へられぬ、ナント金太、目の前に大きな金儲がぶら下ツてるが卿も我に手傳つてはくれめエか、ソウすりゃア其金で年貢の未進も償なひ戻し我が難儀も助かる上に大した金にありつくが・・・・

金太『ム、夫れゃア何よりの話だが、シテ其金儲の蔓と云ふのは

泥八『サア其蔓と云ふのは

ト指にて奥の一間を指して

泥八『アノ一間に居る奴は杢助の弟が腰拔けで煩て居ると云ふ觸込だが遂に醫者が來る樣子も無く人に顔を見せた事も無いが不審の一つ・・・・

ト云ふを聞くより小萩はびッくり驚いて

小萩『アヽコレ兄さん何を言はんす・・・・

泥八『エー喧ましい默つて居やがれ、其で其病人と云ふはモシヤ御尋者の民部丞・・・・

金八『ナヽ好い所に氣が附いた、ソンなら云はうが、アノ杢助男と云ふも民部丞が家來の落合五郎に寸分違はぬ人相書、我も疾うから此内が臭いとは思ツて居たが小萩女郎に引かされて今迄遠慮は仕たものゝモウ此上は仕方が無えワ、何にも汝に手傳ツて豐島の館に訴人なし大金儲を仕てこまさうか

泥八『添けねエ善は急げだ、是から直に代官所へ

ト立たんとするを小萩は「コレ待つて兄さん」と引き止めて

小萩『兄さん卿ソリヤ惡い推量奥の病人は杢助殿の弟て何も怪しい人ては御座んせぬぞへ滅多な事言ひ出して疎忽の難儀を受けさんしたら取つて返しが附きますまい

泥八『ハヽヽア弟野郎か民部丞か障子を明けて面を見るのが念晴しだ

ト金太ともゞ立ち寄つて障子の筭に手を掛くれば小萩は兩人が手を拂ひ障子の前に立塞り

小萩『女ながらも杢助殿の留守を預る此小萩卿がたの手籠めにはさせませぬ

ト身構なせば金太は嘲り笑つて顏を視き

金八『ハ、、、ア落合五郎が女房氣取でなかしく力身おッたな其身樁でかばふほど猶怪しい此一間、サア泥八汝アノ小萩を取つて押へろ我ア一間に踏み込まう

ト云ふを聞くより一間ては大刀引きそばめて民部丞切つて出でんと仕たまふ物音。ソレと覺ッて小萩は氣轉の一寸逃れ

小萩『アゝ早まるまい〳〵早まッては後の大事、なる程一間の病人に逢つて念弼が仕たいなら逢はせも仕やうが、若い身そらて腰拔けの難病、人に顏を見らるゝが耻かしいと一間に籠ッて居るものを空助殿にも斷らずに妾が勝手に見せたと有つては言ひ譯が立たぬ程に、どうぞ申し、金太さん、兄さん、夕方まで待つて下さんせ其時までには

金八『その病人の面を見せるか

泥八『我が云ふ事聞き入れて金太兄貴の女房になるか

小萩『二ッに一ッの返答は

金太『きッとするか

泥八『必ずするか

小萩『アイ御二人さん御顏を立てゝ見せませう

金八『ムゝ流石は小萩立派な詞

泥八『よもや相違は有るめエな

小萩『ハイ御念には及ばぬ哩なア

二人『確と詞を交ッたぞ

ト二人は互に諾き合ひ顏見合せて片折戸表の方に出てたるが耳に口よせ呟いて一人は裏手に立ち忍び一人は訴人に馳け出したり。内には小萩ゐと見送りホッと一息つく〳〵と途方に暮れたる後より一間を出で

て民部丞小萩に向ひ

民部『唯今の樣子では余こゝに隱れ居ると顯はれしと覺えたり、練馬左門が情にて一年餘り今日までは世を忍びては居たれどもハヤ極まる我が運命、下司下臈の手に掛り最後の耻辱を見んよりは潔よく此場にて生害いたす覺悟なれば其方は五郎と俱々に我首級を持參して名乘り出て其身の命を全くせよ

ト既に自殺と覺悟の體。見るより小萩は其手に縋り

小萩『アヽ御早まり遊ばすな今にも五郎が歸りました其上て御思案をば御定めなされて下さりませ

民部『其詞は尤なれど唯今にも打手の者が向ふも知れず

小萩『デハ御座りませうが少しの間の御辛抱

ト一途に止むる小萩が忠義。斯る處に落合五郎庄屋が許にて表向達示られたる主君の詮議腕を又き立ち歸り此場の體を見るよりも周章て生害押し止め

五郎『未だ御生害の時節に非ず……、シテ〳〵女房此場の樣子は

小萩『サア今しがた妾が義理ある兄の泥八が地潛の金太と一所に此へ來て妾に迫ッて金太に此身を任するか奥の二間の病人を見せるかと切羽詰まりし手詰の難題

民部『我この家に隱れあること知つたるのみか、其方が落合五郎と云ふ事まで

五郎『既に存知て居りましたか、其に附けても唯今庄屋が宅に於て面會したるは池袋源左衛門今日の日暮を合圖として我君を討つて渡すか討入らうかと延引させぬ役目の達し、露顯の上は是非に及ばず如何にも御

首打つて渡さんと立派には受け合つて歸りしが……

民部『扨は全く露顯に及びたるよな、然らば五郎介錯たのむ

ト押えし手先を振り拂ひ生害せんとの御覺悟、見るより五郎は涙を流し

五郎『御尤には御座れども御在所を搜し當て討手を向けたる其者は修理亮一味の惡徒が計ひなれば左門殿の心にあらず、然るを只今御切腹これ有つては是迄盡せし忠臣義士の方々が嘸殘念に思はれん、何どぞして一旦此場を落させて棟馬平五郎が屋敷へ赴き事の仔細を告げさせて左門殿の了見を御尋ねあッて然るべし

民部『如何にも其儀は尤なれど左門とても唯今にては豐島の當主大炊助

五郎『近盛とは名乘れども心は原の老職ゆゑ必らず御疎略には存じますまい

民部『我も然とは存ずれど遁るゝ途中安心ならねば

五郎『ナンノ〳〵賤の姿の百姓男に御身を扮し小萩を供に召し連れて耕作歸りの體に粧ひ裏道の間道より直樣急ぎ落ちたまへ、日暮れぬ中が却て人目に立たぬもの、サア小萩泣いて居る所で無い、早く若殿に御支度させ奉り平五郎方へ御供申せ

小萩『ハイ承知しました、シテ又貴郎も御一所に

五郎『イヽヤ我は此家に相殘り日暮を合圖に寄せくる討手を引受けて一旦御後を防ぎ其より御供に追ひ付かん

民郎『死るも生るも主從三人もろ共と豫ての覺悟もあるなれば・・・

五郎『言ひ甲斐なし我君、御未練あるべき時に非ず、高の知れたる臆病武士五十騎百騎押し寄せても忠義の刄に切り靡け案内知ッたる間道をやがて追つ付き申すで御座らう

小萩『ジャと申して貴郎お一人後に殘して

五郎『エヽ未練の女め落合五郎が女房で無いか、忠義を盡すは今この時サア早く往け、疾く落ちさせ給へ

ト急立る。折しも聞ゆる人馬の物音

五郎『アレ御聞きあれあの物音こそ寄せ手の大勢、手間取つては心盡しも水の泡サア〳〵〳〵

ト勸むれば民部丞は後に心は殘れども五郎が忠義の諫めの詞悖るも武士の不本意と一間に入れて御姿を替へさせ給へば小萩も俱に落ち支度後に心の引かされて忠と貞との二道に夫の意見に是非なくも裏道より

ぞ落ちにける

落合五郎は民部丞に小萩を附けて落し遣り今は心安しとて覺悟を極めて待つ所に池袋源左衛門捕手の侍召連れて庄屋が案内に入り來り

源左『ヤア〳〵五郎先程庄屋が宅に於て請け合たる詞の如く謀叛人の民部丞首打ッて相渡せイザ請け取らう

ト横柄に床几に腰を打ち掛くれば五郎は前に進み出で會釋をなし

五郎『何にも民部丞樣の御首打て御渡し申さんと一旦は請け合ひしが假初ならぬ三代相傳の御主君我身の難儀を逃れんとて打ち奉ると刀に掛けても相成らぬ、御苦勞ながら貴殿にはこれより直に御歸りあッて此旨を修理亮殿へ申されよ

ト言ふに堪へぬ源左衛門クワッとせき立ち顏を赤らめ

源左『ヤア無禮なる其一言、扨は汝この源左衛門を欺し居つたよな、裏道より民部丞を落したりとて數多の人數を配り置き出口々々を固めたれば民部丞は籠の鳥、サア尋常に縄掛れ、もの共其奴を引つくゝれ、家捜しせい

ト下知すれば五郎は刀に反打て

五郎『奇怪なる其雜言荒家たりとも武士の城廓若殿の御座所土足の儘に上がるさへ失禮なるに家捜しせよ』

は無法の差圖、落合五郎と云ふ武士が留守居いたして罷り在るぞ、近う寄つて怪我するな

トつゞ立ち上がつて身を構へ寄らば斬らんず勢に捕手の者は恐れをなし近寄きかねて控へたり。「其れ打ち取れ」と源左衞門が烈しき下知に命知らずの小頭が「取つた」と寄する一刀に斬つて落せし五郎が太刀先雀がる勢を引き受けて蛛手かく細十文字飛鳥の如くに切つて廻れば敵し難しと引き退ぞく許多の捕手は左ながらに颯と吹き來る山風に木の葉の散るが如くなり

（二）同く民部丞生捕

扨も民部丞は一旦は生害と覺悟をば極めしが落合五郎が切なる諫言に從ひて小萩と共に姿を扮し百姓男の體になり人目を忍びて裏手なる間道傳ひに足を早め練馬平五郎が屋敷へと志し前後に心を配りつゝ田甫道に差し掛りしが傍の森の樹蔭より顯れ出てたる一隊は修理亮を大將として是に附き添ふ板橋十郎三郎雜兵合せて十五人道さぬ遣らぬと支へたり。

扨こそ裏手も固まれしかと後を見れば地濟の金太石龜の泥八その外手下の惡黨ばら竹槍ならべて扣へたり

民部丞は斯くと見てモウ是迄と心を定め

民部『ヤア其に見ゆるは修理亮よな、此秀盛が討手には向ひしと覺えたり、イザ寄れ貫盛、汝が槍先受けて見せう

ト隱し持つたる腰刀拔き翳して構ふれば

修理『ム、謀叛人の民部丞討死とは好い覺悟、サア者ども民部めを討ち取れ

ト下知もろともに十郎三郎それと差圖に雜兵ども我れ討ち取らんと攻め寄れば必死を極めて民部丞手練の太刀先切つて廻り此を先途と戰ふたり。

後の方には金太泥八訴人の褒美の其上に小萩を捕へて金にせんと惡黨ばらを引き連れて手捕にせんと寄り掛かれば、小萩は用意の懷劍を拔翳して

小萩『ヤア女てこそあれ豐島家の勇士落合五郎が妻の小萩侮つて怪我しやるな

トか弱き女の細腕も忠義に凝たる一心に惡黨ばらはタヂ〳〵引足にぞ成りたりける。此方は民部丞勢

ひ込んで切捲れば雑兵どもは引き退く「穢し者共一人の敵に怖れて逃をるか」と大太刀抜いて板橋が切つて掛かるを丁と受け透き間も有らせず切つて入る民部丞が早業に敵し兼ね既に危く見えたれば修理亮は手鎗を捻て

修理『民部め覺悟

ト突き出だす「心得たり」と民部丞電光石火と働けども最前よりして數十合の戰ひに鐵石ならねば其身も疲れ太刀筋も思はず亂れて受け身には成つたりけり。小萩は主君の大危難叶はぬ迄も救はんものと惡黨を接ひながら後を見て駈け寄らんとする所を地潛の金太と石龜の泥八は右左より組付いて「ドッコイ遣らぬ」と支ふれば「邪魔なせそ其所放せ」と爭ひながら金太が二の腕一刀ハッシと切れば「己れ我を切りをッたなア」と腰に差したる大脇差抜く手も見せず切り掛かる大惡我慢の無法の刄に無慘や、小萩は肩先をづッくと切られて瞠と其場に倒れたり。斯かる所に落合五郎は寄手のものを切り散らし主君の御先途危しと韋駄天走りに駈け付けて此場の難儀を見るよりも飛ぶが如くに割つて入り修理亮が槍の鹽首丁と掴み民部丞對ひ

五郎『若殿様この場は五郎が請け取つたれば早々此を落ちさせ給へ

民部『イヽヤ落ちぬ、死なば主從もろ共に

五郎『名も無き武士の手に掛かり御首取らるゝものならば、屍の上の御恥辱、此場を切り拔け何地にても御生害

民部『デモ其方を見捨てゝは……

五郎『エヽ御未練で御座る

ト云ふ下よりも修理亮槍打ち棄てゝ腰刀拔いて掛かれば落合五郎「何を小癪な」と請け止めて

五郎『サア〳〵早く

ト急き立つれば

民部『然らば五郎あれなる森にて

五郎『御跡を慕つて冥途の御供、イザ道連れにつれ行かん

ト修理亮に渡り合へば、民部丞は生害をと志ざし森を目當に駈け入つたり。修理亮は民部丞を逃さじと思

はず振り向く其隙に、五郎が切り込む切先に右の肩より左の乳まで大袈裟に切り下げられアット叫んで倒れしは心地よくこそ見えにけれ。五郎も薄手少々負ひたれど些とも屈せず若殿の御先途如何にと血刀を打ち振り〳〵進み行くに藪の陰より泥八が突き出す竹槍に脇腹ぐさと突き貫かれ急所の深手に倒れしが倒れながらに竹槍を掴んで扱いてたぐり寄すれば不敵の泥八さうはさせぬと爭ふたり此方には深手の

小萩夫を見るより這寄て

小萩『良人か

五郎『女房どもか

小萩『シテ若殿様には

五郎『あれなる森にて御生害

小萩『エヽ

ト驚き迸る血汐にまみれて斷末場。泥八金太は左右より

泥八『己れ五郎め

金太『首打つて憂美の金

ト切つて掛かるを深手ながらも落合五郎、金太を取つて膝の下に組んで敷き泥八が利腕取つて捻返す。時しも森の彼方にて「ヤア〳〵謀叛人の民部丞板橋十郎三郎が生捕た」と名乗るを聞いて無念の齒がみ

五郎『仕なしたり御生害の御間も無かりしか……己れ等も三途の川の供いたせ

ト泥八が首を丁と切り返へす刀に金太を指し我と我手に太刀取り直し咽を突いて夫婦もろとも顔見合せ枕を並べて死したるは天晴れ忠義の鑑なり

第五幕（一）豐島大炊助酒興

扨も豐島大炊助近盛（即ち練馬左門は）豐島の城主となり管領家の御覺えも愛度加增の領地も許多賜はツたれば自づと起る驕奢の念何にもして鶴姫を口説き我心に從はせんとて既に民部丞を捕へさせて牢舍なる所に籠め置きて其旨を管領家に注進なし御裁許の日を俟ちつゝ日々に歌舞の遊びを催し月花の樂みを盡して鶴姫が心を慰め威しつ賺しつしたれども鶴姫は一途に民部丞が身の不幸を嘆き悲みて更に大炊助が心に

辟くべき樣ぞ見えざりける。今日しも大炊助は夕暮より例の如くに酒宴を催し家中の若殿ばらにて興ある
雅甲乙を召し寄せて侍女どもに打雜り舞ひつ歌ひつ打ち興じ杯盤狼籍に及べども大炊助は鶴姫が事のみ
胸に蟠ッたれば氣色頗る宜しからず、便嬖の者共は何かなして大炊助が機嫌を取り直さんと可笑も無きに
嗤ひ假初なる事を囃して戯れ騷ぎたりければ大炊助は是を見て

大炊『何れも何を騷ぎ居るか餘りと云へば囂し

ト叱り付くれば一座のものは扨こそ御機嫌を損ねたれと顔見合せて平伏なし
一同『興に乘じて無禮の段々恐れ入り奉ッて御座ります

ト詫言なせば打ち笑ひ

大炊『イヤ左程に恐れ入るにも及ばぬこと、實にや心に思ふ事あれば飲む酒も味ひなく妙なる舞も見るに煩
さく覺ゆるとは今更思ひ當ッたり……

ト云ふ所に庭前に虫の音の聞えたりければ

大炊『虫のごと辟に立てゝは鳴ねども涙のみこそしたに流るれ。この古歌の心は我身の上であらうとは我な

がら愧かしや

ト戀慕の心を取り直し忘れんものと杯を擧げて再び飲む酒は菊の露垂る酒ならで胸の焔を消す水の油に變
る心地なり。折から遙か奥殿の庭を隔てゝ聞ゆる琴の音、大炊助は耳を傾け聽けば唱歌も哀れ氣に
(小夜衣本調子)「きぬ〳〵に、替す形見の、小夜衣、つま戀かねし、鹿の聲にみだれ亂るゝ、糸萩の結ぼ
れ解けぬ玉の緒の、絶えなば絶えよ、忍ぶ身は、せめて哀を暫しなりとも(合)しのぶ山、しのび兼ねたる人
目の關を(合)道しるべせよしのぶ草、いッそ露とも消なば消えよ(合)あるに甲斐なき捨小舟(合)底こそ知ら
ね袖の海の、乾く間もなき枕の渚、あらき磯浪うち寄せば、明日をも俟たぬ我いのち(合)此夕暮を、限りと
もがな

ト唄ふ一節聞くに付け又もや起る煩惱心さては彼鶴姫は斯くも民部奴を慕ひ居るかと嫉妬の怒りに眉を逆
立てゝ

大炊『ム、あの爪音は鶴姫よな、直さま是へ引っ立て參れ

ト下知に從ふ侍どもアッと答へて長廊下奥殿さして走り往く。無慙やな鶴姫は二世と誓ひし夫には去年の

卯月に生別れ同じ其夜に父上は人手に掛つて敢へなき最期杖柱とも頼みて！練馬左門は榮華に溺れて何時しかに心變りの横戀慕親の遺言管領の御ド知か嵩に無理口説き靡かぬ操を憎みてか一間の中に押し籠められ身は恨めしき籠の鳥かてゝ加へて民部様在所あらはれ生捕れ今は御裁許まつ身と聞き絶入許りの物思ひ嘆きの中を武士に引つ立てられて力なき居所の羊の如くにて歩行なやみて來たまへば夫れと見るより大炊助は顔を和らげ

大炊『ヤア鶴姫か是へ御座れ〳〵

ト己が側に座らせて顔を眺め

大炊『イヤ艶やか〳〵愁を含める其風情は梨花の雨に惱める姿、ソウくよ〳〵と物案じは無益の至り憂ひを拂ふ玉箒いざ一献聞し召されよ

ト手に持つたる盃を指せば鶴姫は伏し俯向いて手に取らず侍女どもは氣を採んで

侍女『サア姫君様我君の御盃御頂戴あそばしませ

ト取々に勧むれば姫は漸々顔を上げて

鶴姫『妾は酒ば嫌じや哩のウ

大炊『ハテ嫌ひても有らうが我等が指した其盃責めて手に取り給はれよ

鶴姫『其盃も嫌ひじや哩のウ

大炊『ムヽ我等が指した盃を嫌ひとは

鶴姫『去ればいなア去年の卯月の五日の夜民部様には生き別れ父上には不慮の御最期世に頼みなき我身故既に自害と思ひしに御身が意見の信切に民部様の難儀を救ひ夫婦になして豐島の家を立てさせうと慥な詞夫れが力に永らへて樂み居つたに御身の戀慕……

ト言はせも果てず大炊助から〳〵と打ち笑ひ

大炊『又しても姫が繰言愚痴の至り、これよッく聞かれよ、民部丞と其方とが忍び契りし二人が中成るほどこの大炊助承知いたしては居つたるが表立たざる内證事、然るに我等先殿の御遺言にて當家の相續一周忌の忌明なば改めて鶴姫と婚姻せよと管領家の私しならぬ御差圖仇疎かには相成らぬ夫れ故にこそ其旨を其方へ得心させたるは早や數ヶ月以前の事、其に何ぞや親の許さぬ不義徒改心いたす様子も無く剰へ我等が

詞に從はず民部丞を戀ひ慕ひ一つに成らんと存じ居るはアノ此な不孝不貞の不埒女めが、……と叱り付くる所なれど我等左程には申すまい、後先を見ぬ處女心には一旦かうと思ひ込んだる民部丞添ひ遂げたいと思ふのも眞更無理ても無いが、ノウ鶴姫篤と分別いたして見やれ、民部丞は管領家の御敵たるに由つて日影の身の上一命の生死さへ知れざる者ては無いか、夫に引き替へ我等は當家の主人殊には管領家の御意もあれば其方と婚禮いたさねば第一管領家へ對して相濟まぬ其方とても同じと御父彈正公の御遺言に背き我等と夫婦になる事を忌嫌ふては此上も無い不孝であらうぞ、親の爲家の爲には思はぬ人に身を任せ妻となる計りかは其身を敵に汚されても辛抱するが女の道、況てや我等が妻に相成るは親の遺言上の御沙汰否應いふべき所で無い、じやに由つて心を改め快よく承知いたせ然る上は其趣き申し立て婚禮の式を執行なふであらう、聞き分けたるかコレ鶴姫

ト道理を正して述べたれば鶴姫は涙ながらに顔を上げ

鶴姫『何にも仰せある通り父上の御遺言管領家の御沙汰ゆゑ否と云ふではなけれど、妹背の中の語らひは親でも君でもソウ自由にはならぬもの、語るも今更恥かしながら民部様と妾とは振り分け髪の許婚互に袖を

絞りつゝ水瀬も荒き荒川の淵は瀬となり變るとも兩人が契は變らじと豐島の岡の松が枝を結び留めて誓ひし中、なんで思ひ切られうぞ、其譯知つて行末は添はせて遣うと御身の詞妾は覺えて居るものを御身は詞に背きやるか

大炊『ハテ聞き分けなき姫が詞、成るほど民部丞と其方が中知つて居たゆゑ行末は添はせて遣らんと受け合ひたるは未だ先代繁昌の頃にして身共が老職の身分てありし時のこと、併し當家相續の上にて御身と夫婦になれよとの御差圖あッては又格別

鶴姫『ソウ言はんすからは御身にはどうあつても妾をは

大炊『ム、是非とも妻にせねば成らぬ

鶴姫『チエー情ない其心假令ひ親君の差圖でも貞女の操は汚さぬ妾、堪忍して下はれよ

と心の覺悟に拔き出す懷劍、袖にくるみて逆手に持ちあはや自害と見えければ夫れと見るより大炊助姫が腕をしつかと押さへ姫を睨で怒りの聲

大炊『自害せんとは憎つくき女め（ト懷劍捻ぢ取り押し伏せて）如何に表立ッたる妻なりとて無理に枕を替

はしては本意に非ずと存ぜしゆゑ是迄は幾度となく慰め賺し既に只今も事を理て言ひ聞かせ納得させんと思ひしに猶も夫れを聞き入れず自害せんとは不所存千萬、假令契は結さずとも此大炊助の妻と定まる上からは民部を慕ふは不義であらうぞ

鶴姫『不義と云ふなら言ひ玉へ妾はどこのどこ迄も民部丞様思ひ切る氣は無い哩なア

トワッと計りに啼き出して聲を惜しまず泣きければ大炊助は益々怒に堪へかねて刀の下緒解くより早く障ゆる侍女突き除けて鶴姫が兩手を後にしッかと縛り椽より下に突き下ろし夫れと差圖に家來ども何の用捨も荒夫が泣き入る姫を引き立てゝ松の小枝に繋ぎたり。大炊助はきッと見て

大炊『何に鶴姫汝が慕ふ民部めは修理亮が忠義に由つて召し捕らへ厳しく牢舎いたさせたれば唯今にも鎌倉より撿使御入來ある上は輕くて切腹重くて磔どうで此世の者で無いッ

鶴姫『何と云やる、管領家へ弓引たる御咎は御身が願ひで免たで無いか

大炊『愚か〳〵御敵の科は免ても先殿彈正公を害したる叔父殺しの大罪は決して免されば致さぬッイ

鶴姫『それではあの民部丞様は愈々小柄が證據になッて

大炊『オヽサ叔父殺しに極まッた、ソレでも汝は親の敵の民部丞にまだ未練が殘り居るか

鶴姫『じやと言ふても其夜には跳橋からして御立ち退き父上の御座所には……

大炊『往かぬと云ふ證據イあるまい、併し此方が言ひ立て次第では其方が可愛と思ひ居る民部丞命を助くる手段もあり事叶はざる其時には又々逃がして人知れず匿ひ遣はす道もあるが其れも其方が心次第ト聞いて鶴姫せき來る涙思案に暮れて泣くばかり。大炊助は側なる皷を取つて家來に渡し

大炊『サア鶴姫返答はどうじや、エヽ默つて居るは民部が死んでも構はぬ氣か、ソレ郡司その皷をうて、姫が返答する間これにて一曲謠ふてあらう

ト云ふに家來の長命郡司は畏つたと皷を打てば大炊助

謠（富士太皷）

謠『げに理りなり父御前に別れし事も太皷ゆゑさあらば親の敵ぞかし討つて恨を舞すべし

同『妾が爲には夫の敵いざや覩はん諸共に

大炊『サア鶴姫民部めを見殺しにしても否と申すか

鶴姫『サア夫れは

謠『男の姿かり衣に物の具なれや鳥甲

大炊『親の敵の民部丞に添ひたいか

鶴姫『サア夫れは

謠『恨の敵うちをさめ「鼓を苔に「埋めんとて「よするや時の聲立ちて秋の風よりすさまじや

大炊『そんなら民部丞に白滅させうか

鶴姫『サア夫れは

謠『うてや〳〵と責め鼓「あらさてとりの鳴音やな

大炊『然らば身共が心に從ふか、

鶴姫『じやと申して

謠『猶も思へば腹だちや〳〵。けしたる姿に引き替へて、心言葉も及ばれぬ。富士が幽靈來ると見えて、

由なの恨や。もどかしと、太鼓打ちたるや

大炊『否と申すか、鶴姫、今宵の中に了見極めて返答いたせ、どれ奥殿にて一睡なし酒の醉を醒さうか

ト帳臺ふかく入りにける（此場には侍侍女ども數人出座なし其中には鶴姫を賺すものもあり或は怖すものもありて各々其科白あるべけれども茲には煩しきを厭ひて之を省きぬ）

（二）亡母の意見

此は廊下續きにて前の酒宴の座敷より少し離れたる一間なり大炊助が平常の居間なれば座敷の構造と云ひ庭前の模樣と云ひ風流を盡して清らかに黄昏の涼風に庭草の打ち水に薬を濕ほしたるが戯ぎて露の玉の摘るは早や初秋の音信るかと思はれたり。大炊助は侍女共に扶けられ蹌踉つゝ此所に來りて

大炊『ゲー、ア、酷く醉が廻ッて來た哩、コレ初瀬、水を持つて參れ……ソコに居るのは誰だ、ハヽア信夫に湖川の二人であッたか、コレ枕を持つて參れ……イヤ〳〵茵を敷くには及ばぬ少し睡めば直に起る程にソレ〳〵其座蒲團で宜しい……ム、水を持つて參ッたか、ア、甘露甘露……ア、好い心持だドレ一睡いたして面白い夢でも見やうか「磯枕苔の衣をかたしきて〳〵岩根の床の夜もすがら猶も奇特を見るやとて夢待ち顔の旅寢かな……

ト謠ひつゝ正體もなく寢入りたれば侍女共は御假寢の妨げせじと退きたり。斯かる所に何地よりかは來りけん大炊助が亡き母お絹の姿忽然として枕頭に現れ出てゝ「左門々々」と呼び起す。呼び起されて大炊助は

大炊『誰なれば我を起して假寢の夢を妨げなしぬるぞ

ト頭を擡げ朦朧たる醉眼を擦りながら其人を打ち見遣ればコハ如何に一昨年の三月に生害ありし母上の在りし姿を其儘の痩衰へたる俤を見るよりアッと驚きて、これは夢かや現かやアラなつかしの母上と膝立て直して近寄れば母のお絹は陷窪みたる兩眼に溜る涙をはら〳〵と流し大炊助を突き退けて

母『アイヤ左門近寄るまい

ト制しながら衣紋を正し嘆きの眼にじッと顏を打ち眺めて

母『これ左門、其方はよう此母を見覺えて居やるのウ

大炊『コハ恐れ入つたる母上の御詞大恩受けたる母上御顏を見忘れて成りませうや

母『ムゝ其母の恩を存じて居る其方には不似合な淺ましい心底、犬猫にも劣ッたる練馬左門、詞替すも穢しい

親で無ければ子でも無い七生までの勘當じやぞよ

大炊『ナニ犬猫にも劣つたる拙者ゆゑ七生までの御勘當とな……イヤ拙者に於ては御勘當受くる覺えは更に御座らぬ

母『覺えが無いと言やるのか。フウ有るか無いかよう其方の心に尋ねて見や、エゝ其方はなア〳〵よくもよくも此母まで不義不忠の者にはしやつたなア

大炊『何と仰せられます

母『さればいのウ。其方が私の顏を見覺えて居やるからは今はの際に此母が言ふた言葉もよもや忘れは仕やるまい、彈正樣は其方が實の父上を毒害ありし御方なれど其方の爲には御厚恩を蒙ッたる御主樣、それを親の敵じやと心得違をしては成りませぬと言ひ置いたにナゼ彈正樣を手に掛けやッた

大炊『コハ怪からぬ御疑ひ、然も其夜民部丞を竊かに忍び落し遣り我館所に引き取りしに彈正樣の御居間にて只事ならぬ騷ぎの物音、樣こそあらめと駈け付け見れば人手に掛かつて非業の御最期、拙者が手に掛け御主君を弑せしなどゝは覺えも無いこと

母『シテ其曲者は誰てありしぞ

大炊『サア誰とも相分り申されど其場に落ちたる小柄こそ民部丞が品なれば

母『民部様には叔父殺しの罪人と御成りなされたと云やるのか

大炊『如何にも左様に御座ります

母『シテ其小柄は其方が其前奥殿で拾うて所持して居やッたので有らうがの

大炊『エイ……、イヤ全く左様ては御座らぬ小柄を拾ひしこと曾て覺えは御座りませぬ

母『そんなら彈正様を殺したは慥に民部様と言ひ張るか

大炊『其儀では御座られど其曲者も知れざれば……

母『夫れではなぜ其曲者の詮議をして民部丞様の明りを立てゝは差上げぬ

大炊『其儀も拙者が望む所に御座れども何を申すも其節は民部丞管領家の御敵なれば

母『フウシテ又豐島の御家の跡目をば其方に下し賜はると御教書ありし其時に何て御受けを仕やッたか

大炊『さればなり母上もしも其時拙者が辭退いたしなば豐島の家の滅亡なりと存ぜしゆゑ御受けを仕て御座

ります

母『其時までは民部様を世に出だし鶴姫さまと御夫婦に成し參らせんと思やッたか

大炊『全く左様に存じ居ましたが……

母『そんなら何で其民部様を搜し出し牢舍に繫ぎ管領家へは注進して御裁許を仰ぎやッたか、ナゼ其方が身に枠へて御命乞は仕やらぬぞ

大炊『其御咎もさる事ながら民部丞が管領家へ向ッて弓引いたる科は拙者が勤功に代て御赦免を願ひ御聞き濟みには相成つたれど叔父殺しの大罪は其限りに非ざれば……

母『それで民部様を搜し出しやッたのか

大炊『イヤ民部丞を搜したは敢て拙者が差圖にあらず、一門の修理亮が表立つて承はッたる役目の上の事で御座ります

母『シテ又鶴姫さまを其方が妻に仕やうと云やるは

大炊『是以て先殿の御遺言管領家の御諚なれば據なく其儀に從ふ次第に御座ります

母『そんなら民部様の身の上は管領殿の御裁許に從ひ其方は鶴姫様を妻にして何所までも豐島の城主大炊助近盛と云ふ大名で居やる氣じやのゥ

大炊『室町殿の御教書管領家の御沙汰に御座れば如何にも左様いたす所存に御座ります。

母『それで其方は心に咎めは仕やらぬか

大炊『いッかな咎めは致しませぬ

ト聞くより母はズッと詰め寄せ大炊助が手に縋り

母『チェ情ない其心、天魔破旬が見入たか、餘りと云へば不孝不忠、ようまア失れて人らしう此母に口利いて欺さうとは仕やッたな、假ひ人は欺されても此母は欺されぬぞや、先殿彈正様を勿體なくも其方が手に掛けて御殺し申した其時に豐島の御家を大切に存じたならナゼ其後に鎌倉へ其身の科を名乘つて出で民部様をば御世繼には立てやらぬ、夫れさへあるに鶴姫様の色香に迷ひ由ない戀慕に執着なし民部様が御存命ては所詮叶はぬ戀と覺りあの惡徒の修理亮を語らふて御屋家を搜し出させ不便や忠義の落合夫婦非道の刃に殺させて現在其方が手に掛けた叔父殺しの大罪を民部様に濡衣きせ御命まで取らうとは强欲非道の限り

ぞや、實の父上武藏介様への不孝と云ひ先殿彈正様への不忠と云ひ此母が依托て置いた詞に背き民部様を殺した上で鶴姫様を奪はんとは呆れ果てたる大惡人、夫れ程曲ッた根性には此母は生まなんだにどうして斯うは變つたか、草葉の蔭で此絹はどの頭下げて御二方に逢はれやう、今生ばかりか冥土でまで我に苦現を見せ居るか

ト泣きつ嘆きつ口說きしが何思ひしかスックと立ち帶の間に挿みたる用意の懷劍拔くより早く逆手に持ち

母『これ程までに恥しめても善心に戻らぬ左門、イデ此上は不便ながら此母が手に掛けて責めて未來の罪業をば助けてくれう覺悟しや

ト云ひも果たさず切り付くれば大炊助は身を代はし

大炊『アイヤ母上これには深き仔細のあること

母『此期に臨んで卑怯の言理聞く耳もたぬ

ト女の凝たる怒りの一念太刀先烈しく切り立つれば外し損れて左の肩先拳も通れと突き刺され急所の痛手に堪り兼れアッと叫んで倒れしは是なん南柯の一夢にて醒めて跡なき枕邊に殘りし影もなかりけり。大

炊助は茫然と起き上がり正しく母の御意見に御手を下ろし玉ひしは此懐劍にてありつるかと取り上げ見れば コハ如何に父の記念の短刀にて母が自害の情の血汐まだ落ちやらぬ刄の雲り、

大炊『日頃大事に秘め置きたる此短刀どうして此へは……ムー扨は……

ト流石剛氣の大炊助身の毛戦立て默然たり。折から間の襖を明け侍女初瀬は手を支へて

初瀬『只今の御聲は召しましたので御座りますか

ト云ふに氣の付く大炊助短刀袖に押し隠して

大炊『ムヽ初瀬か早く水を持て

第六幕（一）鶴姫狂亂

此は豐島の館中奥書院なり。豐島民部丞秀盛が裁許に付き今日鎌倉表より上使として和田隼人正赤堀左馬助の両士當館へ到着あるべしとの注進に由り其待ち受けの爲にとて諸士數人この所に居並びて用意をなし民部丞の身の上如何相成るやらんと氣遣ひて取々に噂を爲し居たり。此時「秋庭掃部助高田法眼出仕」と

呼ばはッたる案内に連れて両老職禮服に容を正し靜々と書院に罷り通れば諸士は出で迎へて

諸士『是は〳〵御老職方には御早い御出仕御苦勞に存じまする

ト一同に會釋をすれば両人は共に一禮して「各方には御太義て御座る」と挨拶なして上座に居り

秋庭『今日は愈々鎌倉より上使の御入來御待ち受けの用意殘る所なく行屆いて御座るか

諸士『ハッ萬端御作法の如く用意相調ひ御座ります

高田『上使には未の下刻か合圖に御越と定まッたるが一同に其趣きを相觸申されしか

諸士『ハッ其義も唯今相觸れまして御座ります

高田『然らば秋庭殿乘て申し談ぜし如く我君へ我等が所存今一應申し上げると仕らうか

秋庭『如何にも左樣いたすで御座らう

ト織部と云へる侍に向ひ

秋庭『イヤナニ織部どの我等両人出仕のこと我君へ仰せ上げられよ

織部『畏ッて御座ります

、ト杉戸を明けて入りにける。後には一座の諸侍秋庭高田に打ち向ひて

諸侍甲『今日の御上使善か惡かは存ぜれど民部丞樣の御身の上の御裁許と承はれば

同乙『何とも以て心許なし既に鎌倉表より内々の注進にては

同丙『愈々先殿を御殺害の科とあッて切腹の御裁許とやら申す噂

甲『是と申すも畢竟は我君よりして其旨を

乙『小柄の證據に是非なくも

丙『御申立てになッたる故と專ら世上の

三人『喽で御座る

秋庭『是は仕たり各方又しても取り留なき喽咄し、上使の御沙汰は測れねど眞さか左樣の事も御座るまい

高田『夫れに我君の思し召しもある事なれば民部丞樣の御身の上ナニ大丈夫で有るで御座らう

ト口には云へど心の中案じ入つたる有樣は眉の皺にぞ現はれたる、折しも織部は出て來り

織部『唯今我君これへ御出座で御座ります

ト知らせに秋庭高田を初め何れも禮儀を繕ひて席を正せば正面の襖を明けて豐島大炊助近盛靜々と立ち出

でて設けの席に着座なし

大炊『掃部、法眼、出仕太儀であるぞ、今日の上使入來の待ち受け萬端用意は致してあるか

秋庭『ハッ萬事殘る方なく御用意行屆いて御座ります

高田『右に付き我々兩人より改めて申し上げ度き儀も御座りますれば恐れながら暫時の間御近習の面々を

秋庭『御遠ざけ下さる樣に願ひ奉ります

大炊『内々の用談とあらば何れも暫時遠慮いたせ

諸士『畏ッて御座ります

ト何れも打連れ一同に御次の方へぞ退きたる。後に豐島大炊助膝を進めて

大炊『望みの通り近習どもを遠ざけたれば近う寄つて申し聞けよ大炊是にて承はらん

ト顏を和らげ云ひければ、秋庭高田はすり寄つて

秋庭『今日上使の御入來にて民部丞樣愈々先殿を御切害ありしと定まり御一命にも關るべき御裁許も御座あ

らば我君には如何あそばす御賢慮に御座りまするか

高田『憚ながら御心底我々兩人へは前以て御漏し下さる樣願ひ奉る

ト心あり氣の兩人が詞にハッと大炊助胸に釘打つ思ひをなせしが左あらぬ體にて扇を笏に取り直し

大炊『別に分別あるべき筈なし謹んで御裁許に相任する分のこと

秋庭『モシ御切腹と御沙汰あらば

大炊『ハテ其時は是非に及ばぬ不便ながら民部丞上使の前にて腹切らする外は無いワ

高田『スリヤ我君には愈々以て民部丞樣を見殺しに成されまする御心底で御座るよナ

大炊『固より見殺しにする心底には非ざれど御沙汰の上は余が力に及ばぬ事

秋庭『一ト通り御尤には伺がへども民部丞樣我君の御心中より御命を救はんと思し召さば如何樣とも御手段の有るべきに御生捕より今日まで二ヶ月以上に及べども其事なきは恐れながら我々共不審至極に存じ奉る

ト云ふを聞くより大炊助顏色變へて膝立て直し

大炊『ナント申す

秋庭『さればなり我君抑々民部丞樣は豐島家の御嫡流にて御相續と定まるべき御血筋、然るに御廚はれと成らせたるは先殿彈正樣を殺したる御疑に由つての事、尤も其場に落ちたる小柄の證據に是非なしとは申せども、其小柄を以て民部丞樣が自ら御手に掛けられしか、但しは外に曲者あッて切害なし跡を掩はん其爲めに民部丞樣に濡衣着せしか、虛實の程は今以て相分らず、夫れに何ぞや其調べをも成さずして直樣御裁許の御沙汰を乞ひ玉ひしは何とも以て心得がたし

大炊『然らば掃部法眼の兩人には此方が好んで民部を自滅さするると疑ひ居ると申すのか

高田『アイヤ申々以て其儀には御座らねど先づ第一には去年四月先殿御横死の砌より只今も掃部が申し述べたる如く小柄の證據あればとて一概に民部丞樣にのみ疑を懸け更に外々を御詮議なきは不審なり次に民部丞樣の御匿家は憚りながら我君の御實家に由緣の家、然らば內々我君の御取り計ひにて御匿ひありしかと思ひの外修理亮殿が詭り向ッて召し捕りに相成つたるも我君より御內意あッてと申すと、是ぞ卽ち不審の第二……

秋庭『民部丞樣御召し捕りの上は御裁許を申し乞はるゝ其前に先殿御殺害の儀に付いては一應も再應も下調

の御吟味あるべきに更に夫れ等の事なきは不審の第三……

大炊『默れ兩人去年彈正殿横死の砌より民部丞を匿まひ置きたりとは覺えも無き事、又修理亮が召し捕つたるも余が内々の差圖にあらず、彈正殿を殺害したる曲者詮議は固より怠られど其手掛りは殘りし小柄のみなれば先づ民部丞に疑ひ掛かるは遁れ難なき事ならずや、已に其疑ひある上は假初ならざる囚人なれば召し捕ると直に其盡管領家へ申し立て御裁許を仰ぐは是蓋子たり臣下たるものが當然の致し方、其を何ぞや僻事なりと批判するは無禮であらうぞ

ト辟荒らげて罵れど忠義に凝つたる秋庭高田少しも驚く氣色も無く

秋庭『御諚誠に恐れ入り奉る、去りながら我君に於て當家御相續の其折まで思し召されたる御心底に相違なくば今日の上使御入來の席に於て先殿を殺害なせし曲者召し捕るまで民部丞樣の御裁許の御日延願ひを遊ばさるゝ樣致し度う存じ奉る

大炊『ム、其日延の日限中に殺害の曲もの捜し出だす手段があるか

秋庭『サア夫れは

大炊『小柄の證據はありとは云へど民部丞が殺害せしに非ずと云ふ證據があるか

高田『サア夫れは

大炊『其證據も無く又日延べの中に曲者も捜し出さゞる其時には民部丞を愈々叔父殺しの罪に陷し豐島が罰にて碎に上げ諸人に耻を曝さすか

兩人『サア夫れは

大炊『エ、兩人返答はどうであるか、サア別に分別もあるまいがなア

ト理に詰められて兩人は返す辭も中々に默然たる許りなり。大炊助は左こそと心に打ち諾き故と詞を和らげて

大炊『イヤ何兩人其方どもが民部丞を救ひ得させんと一途に思ふ忠義の心底、大炊助嘗ばしう存じ居るぞ、余とても民部丞、助け度きは山々なれど懲ひに言ひ譯立てを致しなば若し叶はざる其時に屍の耻辱を見するが不便、ジヤに由つて武士道を立てさせ度しと存じ居る余が心底の切なさを推量して呉れコレ兩人

ト涙を流して打ち明かす心の底の善惡は測り知れれど差詰る道理に敵ひ難ければ

秋庭『然る上は民部丞様御痛はしく御座れども
高田『御裁許の筋に由つては尋常に御生害を
大炊『ム、勸めねば相成らぬかア、是非も無き世の
三人『有様よなア
ト嘆きの折りしも廊下より取次のもの出で來り
取次『ハッ申し上げます御上使にはハヤ貝塚の里まで御越しとの報知に御座りまする
大炊『然らば入來に間も有るまい、兩人御出迎ひの支度いたせ
兩人『長ッて御座ります
ト心の中は解れども君の仰せに是非なくも取次打ちつれ出で行く。後には獨り大炊助は腕叉ぬき思案に暮れ默然として居たりけり。襖の外には侍女どもの聲として「アレ〳〵御姫様が又御居間を御出遊ばして「ソレ其所へは御出でなされますな」瀧川どの御止め申して下されい「サア御入り遊ばしませ」と欺し賺かせど聞き入れなく襖を颯と押し明けて出で來りし鶴姫は狹き心の一筋に身の憂事に堪へかねて取り亂

たる亂れ髪二世の夫と契りてし民部丞の筆の跡今は形見かなつかしやと持つたる文を播げては泣きつ笑ひつ狂ひしが、大炊助を見るよりも顏をばッッと打ち覗き
鶴姫『オ、此所に居やるは誰じや、サア民部丞を返してたべ〳〵
ト近寄れば大炊助はジッと見て
大炊『また氣狂どのが參られしよな、侍女ども早く奥へつれて參れ
鶴姫『ナニ妾を氣狂どのと云やるのか、妾が氣狂なら其方も同じ氣狂どの、氣狂とは曲もなや、物に狂ふは人ばかりかは
唄『風には花の物狂ひ、花には蝶の物狂ひ、磯邊に寄する荒浪や、尾上の鹿の曉に、妻戀ふ聲も物狂ひ實に幼しの假の世は、夢か現か味氣なや
アレ〳〵あれを見や、桐の一葉のヒラ〳〵と落ちては秋に狂ふぞや
唄『狂ふと云ふも理りぞ、世にあき風のはや立ちて、枯々になるさゞめごと
我は夫れにはあらなくに、いとし夫を仇人の、戀慕の爲に失はれ

ト文を見てワッと泣き出だし

唄『形見こそ、今は仇なれ是なくば、忘るゝ隙もあるべきに、我に思ひを増せよとや、情をこめし雁の跡

ト歎きに沈めば侍女どもは「サア御姫さま御奥へ御入りあそばしませ「御庭の園の秋草が面白う咲いて居りますればあれを御覧あそばして「御心を御慰め遊ばしませと云へば鶴姫不審げに

鶴姫『ナニ秋草が面白う咲いて居るとやドレ〳〵ドコに

侍女『夫れソコに

唄(秋の草)『思ひ亂れて秋草の、露も涙に爭そへば、戀の道の邊ふみわけて、ちらと見そめし女郎花、をとこへしとはどの花ぞ、身は朝貌のあさましや、紅葉重れの其の薄葉に、書いて送りし文見草、人目忍ぶの我涙、乾く間もなき尼花が袖を、引かば靡くと思ふてかいな、さりとては、葛の恨のかず積り來て、いつかは君を、また宮城野の、萩の下葉の露にぬれ、萩吹く風の便をも、きくやと待ちし果かなさは、亂れみだるゝ浪華江の、蘆の穂先の短かき夢を、憎や醒すか桐の雨

ト鶴姫は狂ひ〳〵て正體も無く泣き伏せば、大炊助が楽岡にて侍女どもは介抱なし伴ひ往くぞ無慙なる。

大炊助は姫が姿を見送りて

大炊『アッあの鶴姫が心狂ひし其因も我が色慾の迷ひから……

ト一命すてゝ亡き母の意見に從がひ本心に立ち歸らんは此時ぞと覺悟極めし其折から近習の侍伺候して

諸士『ハッ御上使御入來に間も御座りませれば我君には御着替を

大炊『ムゝ心得て居る、裝束これに持て

ト取りよせ着替し禮服の大炊が死出の晴れ着とは後にぞ思ひ知られたり

(二) 豐島大炊助切腹

去る程に豐島の館に於ては鎌倉よりの上使として和田隼人正赤堀左馬助の兩士入來あッて豐島民部丞の吟味を遂げたるに民部丞は叔父彈正を殺害したる覺え更に無しとは申せども殺害せざると云ふ明白なる證跡も無かりければ小柄の證據ある上は切腹仰せ付けらるゝもの也と言ひ渡され即ち座敷の正面には兩使撿分の席を設け庭前には民部丞切腹の座を仕つらへ左右には白張の幕を附たせ敷盛白砂に至るまで都て武家の

作法を素さず用意して一門には豐島次郎富盛、同下野入道淨念、須俣平兵衛智足、鳩谷隼人助禮義、老職並に物頭には秋庭掃部助、高田法眼、板橋十郎三郎、神谷左近太郎、音羽平内兵衛、巣鴨八九郎を初めとして諸代外様の諸侍列を正して着席なす。兩使は豐島大炊助近盛が案内にて書院より出で來つて設けの席に着座あれば大炊助は椽側に座を占めて兩使の差圖に由り庭前に控へたる秋庭高田の兩人に打ち向ひて

大欣『秋庭掃部助、高田法眼用意よくば民部丞それへ出座いたさせよ

トいと殿かに云ひ渡せば主人の差圖に是非なくも幕の外にぞ出でにける

痛はしや豐島民部丞秀盛は身に覺えなき濡衣も小柄の證據に乾きかね、叔父彈正を殺したる罪の疑ひ辭ずして切腹せよとの御裁許に最後を飾る水干の露も萎れて萎々と幕の内へと入り來り行儀正しく着座して上使に向ひ一禮なせば

和田『いかに民部丞、其方と叔父彈正を殺したる覺え更に無しとは陳ずれども其言ひ譯相立たざるに由つて武士道の御扱ひを以て切腹仰せ付けらるゝ段有りがたく存じませい

民部『切腹仰せ付けられ有りがたく存じ奉る、秀盛この期に至り敢て未練の心を存ずるにあらねども覺え無き御疑ひを蒙り罪に處せらるゝこと屍の恥辱甚だ殘念に御座りまする

ト無念の涙を眼に湛へ言葉正しく述べたれば言はせも果てず副使の赤堀嘲り顔にせゝら笑ひ

赤堀『此期に臨み卑怯の泣き言グヅ〳〵言はずと男らしく切腹いたせ夫れとも痛くて切れぬと云ふなら武士の情に此左馬助幸ひ是なる新身の一腰試しかた〴〵介錯して細首刎て遣はさうか

民部『ホヽヲ御信切なる赤堀殿の御詞、忝うは御座れども民部が最後に貴殿の御手を煩しは仕らぬ僕と一旦御所方に心を寄せたる曉より事成らざる其時は固より一命を擲て兩公達の御供をと覺悟を極めて罷り在れば切腹は愚か磔に上げられ獄門に掛けらるゝも更に厭ひは仕らぬが此身に取つて覺えなき叔父殺の罪科に處せらるゝが殘念なりと申す儀に御座る、同じくは武士の情を以て管領家へ弓引いたる御咎めを以て切腹仰せ付けられ度いが今はの願ひに御座ります

赤堀『フヽウ左樣か、どうて自滅いたす民部御敵となりとも叔父殺しとなりとも勝手次第に心得て早く腹切つて仕舞へ

ト傍若無人の惡口に聞くに堪へかね隼人正

和田『アイヤ赤堀殿左樣には相成るまい、抑々これなる民部丞管領家に敵對たるは京都の御旗に弓引いたる罪なれば其科最も輕からずとは申せども豐島大炊助が結城攻の勵効に代へて御赦免を願ひ其砌り願の趣き御聞き屆けに相成つたれば民部丞は最はや管領家の御敵に非ず、唯今の御裁許は彈正横死の爲めなれば貴殿の如く勝手次第とは成り難し

赤堀『扨々理屈立ての堅い御詮議。然らば叔父殺しの科を以て早々あの民部めに腹切らせて御仕舞なされい、ト苦り切つたる憎まれ口、おのれと心に思へどもジッと堪らへて秋庭高田恭しく上使に向ひ

秋庭『主人大炊助を差置き老職の私共より御直に何ひ奉るは甚以て其恐れありと云へど、是なる民部丞先程の御吟味に於て叔父彈正を弑たりとは白狀いたさず、飽くまでも其身に取つて曾て其覺えは是なしと申陳じたるに切腹の御裁許は愚昧の私共一圓理會仕り兼て御座ります

赤堀『ヤア無禮なり倍臣め等、勿躰なくも管領家の御裁許に批判を容るゝは不埒千萬、畢竟切腹と仰せ渡されたるは格別の御慈悲、それを彼是申すとあらば民部めを拷問なし鉛の熱湯背中を割て洒込で彈正殺しの白狀させ鋸引か磔に死耻搔せて呉れてやらうか

秋庭
高田『何と仰しやる

和田『アイヤ兩人、民部丞が切腹は赤堀殿の宣ふ如く格別の御慈悲、假令其身に覺えが無いと申し張るとも小柄の證據に彈正を殺したる疑ひは遁れ難し、明白に覺えなき證跡の相立たざる其間は問註所の條目に於て許すべき限りに非ず、筋目正しき武士の身分に取つては恥辱にては有らうとも只今も赤堀殿の申さるゝ通り是非なくも拷問に及ばねば相成らぬ、其時に至り白狀なさば重き刑罪もし白狀せざるに於ては外に證據の擧るまで牢舍に繫ぎ其上にて矢張り刑罪に處せらるゝは必定なり、左るに依つて叔父殺しの疑ひを以て武士道を立て切腹と仰せ渡されたるは不便には似たれども實は是なる副使の赤堀殿と不肖ながら正使に立つたる此年人正と兩人が裁許を下す武士の情、相分ッたかコレ老職

ト事を理たる諭しの詞、兩人ハッと首を下げ

高田『段々の御理解よッく相分りまして御座る、然る上は民部丞切腹に付き固より一言の御不審は申し上げまじきが、若し又唯今にもあれ彈正を殺害したる誠の罪人顯れ出でし其時には

赤堀『無益の葬ね聞く耳持たぬ、ェ、扣へ居れ

和田『コレサ赤堀殿ソウもぎどうには仰せられな、彼等が上使へ伺ふも主人の血筋を助け度き忠義の心底イヤナニ兩人、只今にも其曲ものを召し捕へて差し出ださば其時こそ民部丞が身に覺えなき明りが立てば叔父殺しの疑ひ霽れて原の身の上

秋庭『然らば其曲者を召し捕へて差し出だすまで民部丞の切腹を御猶豫は成し下さるまいか、此の儀偏に願ひ奉る

和田『如何にも申し立て次第では猶豫も致し遣さんが、シテ其方共には日限を極めて其曲者を搜し出す見込みがあるか

高田『サア日限を極めて搜し出す見込みとては御座られど

赤堀『夫れが無くば相成らぬワ、併し和田殿には猶豫がして遣度と思はッしやるなら今日より三日の猶豫は身共とても聞き屆けんが、其代はりに三日立つて搜し出さゝる其時は切腹の御裁許は止にして刑罪に行はるゝがソリア承知か

兩人『サア夫れは

赤堀『夫れが否なら暫時の猶豫も罷り成らぬワ

和田『赤堀殿暫く御待ちなされ、コレ兩人の老職どもよく承はれ、管領家に於ては固より無實の罪に人を處すること最も其恐れあり篤と吟味を遂げよとの御沙汰あれば既に吟味の席に於て民部丞愈々彈正を殺したる覺えなしと申さば、證據の小柄は如何いたした、其の小柄を誰の手に渡せしか、但しは何地にて如何なる譯で取り落せしか、明白に申し立てよと、再三問糺たりと云へど民部丞は唯々取り落したりとのみ陳じ月日場所柄あり躰に申さゞると不審の一ッ是に依つて其方ども其小柄の顚末をば民部丞に問ひ糺さば、ヒヨットしたらば……眞の曲もの……

ト信切簡たる上使の詞に兩人は忝なしと會釋して左右より民部丞に摺り寄ッて

秋庭『何に若君、唯今も御聞きなされし通り御叔父殺しの疑ひに汚名を死後に殘さんよりサア證據の小柄の往立を

高田『我々共に御話しあッて御身の明を立つる手掛かり是非とも御漏らし下されよ

ト一途に凝たる忠義の兩人何に〳〵と問掛れば、覺悟を極めし民部丞惡びれたる氣色も無く

和田『コレサ赤堀殿ソウもぎどうには仰せられな、彼等が上使へ伺ふも主人の血筋を助け度き忠義の心底イヤナニ兩人、只今にも其曲ものを召し捕へて差し出ださば其時こそ民部丞が身に覺えなき明りが立てば叔父殺しの疑ひ霽れて原の身の上

秋庭『然らば其曲者を召し捕へて差し出だすまで民部丞の切腹を御猶豫は成し下さるまいか、此の儀偏に願ひ奉る

和田『如何にも申し立て次第では猶豫も致し遣さんが、シテ其方共には日限を極めて其曲者を捜し出す見込みがあるか

高田『サア日限を極めて捜し出す見込みとては御座られど

赤堀『夫れが無くば相成らぬワ、併し和田殿には猶豫がして遣度と思はッしやるなら今日より三日の猶豫は身共とても聞き屆けんが、其代はりに三日立つて捜し出さゞる其時は切腹の御裁許は止にして刑罪に行はるゝがソリア承知か

兩人『サア夫れは

赤堀『夫れが否なら暫時の猶豫も罷り成らぬワ

和田『赤堀殿暫く御待ちなされ、コレ兩人の老職どもよく承はれ、管領家に於ては固より無實の罪に人を處すること最も其恐れあり篤と吟味を遂げよとの御沙汰あれば既に吟味の席に於て民部丞愈々彈正を殺したる覺えなしと申さば、證據の小柄は如何いたした、其の小柄を誰の手に渡せしか、但しは何地にて如何なる譯で取り落せしか、明白に申し立てよと、再三問糺たりと云へど民部丞は唯々取り落したりとのみ陳じ月日場所柄あり躰に申さゞると不審の一ッ是に依つて其方ども其小柄の顚末をば民部丞に問ひ糺さば、ヒヨットしたらば……眞の曲もの……

ト信切篤たる上使の詞に兩人は忝なしと會釋して左右より民部丞に摺り寄ッて

秋庭『何に若君、唯今も御聞きなされし通り御叔父殺しの疑ひに汚名を死後に殘さんよりサア證據の小柄の往立を

高田『我々共に御話しあッて御身の明を立つる手掛かり是非とも御漏らし下されよ

ト一途に凝たる忠義の兩人何に〳〵と問掛れば、覺悟を極めし民部丞惡びれたる氣色も無く

民部『今に始めぬ兩人が赤心民部丞嬉しう存ずるぞや、去りながら證據の小柄が我身を離れ他人の手に入つたる次第恐れ多くも上使の御尋ねにさへ答へざる心の内證何んて其方達に漏らさうや、如何程命が惜しいとて恩義を受けし其の人に難儀を掛けて一命を免れ度いと思はうか、左迄卑怯の民部に非ず、彼此と此場に臨み手間取つては最期の不覺上使に對して面愧かし、イザ原の席に戻り呉れよ

兩人『ぢやと申して

民部『エヽ上使の前だぞ扣へ居らぬか

ト思ひ切つたる民部が覺悟力なく〳〵兩人は原の席にぞ着きにける。斯と見るより赤堀は

赤堀『ムヽ民部丞よい覺悟。サア時刻が移る手間隙取らずに切腹いたせ

民部『委細畏ツて御座る、就ては最後の一言和田殿御聞き置き下されよ、叔父彈正横死に付き御疑を蒙り民部唯今切腹いたせど毛頭御恨には存じ申さぬ、但し後日に至り眞の罪人相知れたる其時には豐島民部叔父殺しの大罪を犯せしものに非ずと云ふこと室町殿への御披露は貴殿へ御頼み仕りまする

和田『尤なる頼み隼人屹度承知いたした

民部『快よく御承知下され忝う存じ奉る（と夫れより大炊助に向ひ）扨大部助殿には去年三月以來一方ならざる貴殿の御厚志禮は詞に盡されず、御武運益々愛度くして豐島の家名を輝し召されよ、民部草葉の陰より貴殿の繁昌祈るで御座らう（と夫れより秋庭高田に向ひ）兩人を初め諸士一同が民部に對し二十餘年の信切は過分でありしぞ、我が亡き後は一同に猶更以て大炊助殿に忠勤を勵まれよ（と少し考へて秋庭に向ひ）コレ掃部、分けて其方に頼み置くは鶴姫への傳言、果かなき契りは過し昔の夢と諦らめ大炊助殿と陸まじく友白髮の八千代まで添ひ玉へ春の朝秋の夕に民部がと思ひ出し玉ひなば、一遍の稱名回向して玉はれと申し傳へて呉れよ

ト流石に剛き民部丞慰墓の執着鞨となりホロリと翻す一雫心の底のやさしきは實に武士の花なりけり、稍々あッて氣を取り直し

民都『誰かある用意よくば短刀もて（と秋庭高田の兩人を見て）太儀ながら介錯は兩人の中にて致し呉れよ

ト詞にハッと兩人は答へはなせど躊躇て大刀取り兼ねて居たりける。最先より椽側にて眼を閉ぢて默然と始終を聞き居し大炊助何思ひけん上使に向ひ

大炊『民部丞既に切腹と事定まる上は是非に及ばず、去りながら民部丞は武藏八平氏の其一にして武藏白旗一揆の旗頭たる豐島の嫡流武藏介幡盛が長男にて御座りますれば其介錯は拙者自ら仕り度う御座る此儀御聞屆下されよ

ト上使に斷はり太刀引提げ會釋を爲して悠々と庭に下立ち民部丞が側近く歩行寄り

大炊『如何に民部丞豐島の城主大炊助平近盛其許の介錯相勤むる、臨終の正念を亂さず心靜かに生害あれ

民部『貴殿の御介錯とは忝なし

ト武家の作法の行儀を正し胸寛げて氣を鎭め家來が持ち出す三寶を兩手に取つて押し戴き短刀取らんとする所に、後の方には大炊助太刀拔きそばめて居たりしが民部丞が短刀に掛けたる手をば太刀の峯にてハッシと打つ打たれて短刀取り落とし「コハ狼籍」と振向て「扨こそ大炊ごさんなれ」と落ちたる短刀取り上ぐる、其手を早速の大炊助右の足にて肩越しにシッカと踏まへて動かさず。すはや事こそ起ッたれと諸士一同に立ち騒ぐ、近寄る猶豫もあら氣の大炊太刀を逆手に持ち直しガッパと左の脇腹に立つると見えしが右に掛け眞一文字に切つたる立腹、流るゝ血潮は瀧をなし民部丞が最期の裝束赤に染めなし時なら

ぬ紅葉重ねに成つたりける「コハ何故の御生害」と民部丞は驚きて下よりウンと跳返し秋庭高田諸士一同「御狂氣ありしか我殿」と介抱なせば氣性の手負はどッかと座し疵口シッカと手綱の布にて自から卷き

大炊『去年豐島彈正を切害なせし大炊助上使の前にて切腹いたす

ト兼れて用意の一封を取り出して差し出せば取手遲しと和田赤堀數通の書面讀み下し餘りの不意に驚く折りから、民部丞が切腹と聞いて駈け來る鶴姫は此體見るより呆れ果て死んだと思ひし我夫の無事に狂氣も癒りしか「大炊助樣の御生害どうした譯じゃ」と泣き伏したり。書面を看畢り赤堀は兩眼活と睨み付け

赤堀『ムヽ扨は大炊助の練馬左門彈正を殺したは其方であッたよな、アノ此な主殺しの大罪人めが

ト威長け高に罵れば

大炊『如何にも拙者が手に掛けて弑したるに相違なし其小柄こそ鶴姫が居間にて拙者が拾ひし品

民部『そんなら左門は叔父御の敵か

鶴姫『父上の敵

秋庭高田『先殿の敵なるか
諸士一同
皆々『イデ君父の御恨みを

ト各々刀に手を掛けて手負ひの側に詰め寄すれば

和田『騒がれな方々、大炊助の練馬左門が彈正を弑したるも民部丞を救はん爲め、殊に左門は武藏介の子息にて親の敵を打つたる孝行

皆々『何んと仰せらるゝ

和田『疑はしくば是なる書置證據の書付一同夫れにて披見いたせ

ト上使が渡す書物を民部鶴姫秋庭高田一門一家の諸侍打ち寄り讀んで恟りなし

民部『夫れでは貴君は私の兄上にておはせしか

皆々『武藏介樣の御落胤にて御座ありしか

民部『母御の遺言御大切に思し召し數ならぬ私を御救ひありし御恩の數々江戸の海より猶深く秩父の山より

猶高し何時の世にかは報ずべき勿躰なし御免しあれ

ト伏し拜めば、秋庭は眼をしば叩きて

秋庭『叔父上とは申しながら御兄の武藏介樣を毒害ありし彈正樣は我君の御爲めには親の敵、御系圖と云ひ御所業と云ひ道に缺ざる御振舞

高田『何故あッて其仔細明らさまに管領家へ仰せ立ては成されずして

民部『かゝる最期を遂げたまふか御恨めしの兄上や

皆々『御短慮の我君や

ト嘆ちつ口説きつ悲しめば、大炊助は聲を勵まし

大炊『愚か〳〵、武藏介の落胤は表立たざる私事親の敵を打つたりとは申されぬ、然のみならず此近盛八歳の時よりして左門と召されて彈正殿の寵愛うけ廿一歳にて老職に補せられ養子と迄に思し召されし高恩を蒙りながら其殿を我手に掛けて弑したる惡逆無道の大罪人天道爭でか免し玉はんや、是に附けても此身の懺悔聞いてたべ、民部丞殿御敵の御勘氣御赦免の上は彈正殿を弑したる罪を悔ひ切腹なさんと豫て覺悟は

ありながら面目なや耻かしや鶴姫どの〻色香に迷ひ戀と欲との二筋に心の道を踏惑ひ現在我身の大罪を民部殿に押しかづけて自滅させ鶴姫を我手に入れんと巧みし悪心、忠義に厚き落合五郎夫婦のものを殺したも、民部丞殿鶴姫殿の兩人に難儀をさせたも皆余が成したる業、許してたべ御兩人、

民部『勿體ない其御詞何て貴君を御恨み申しませう

鶴姫『是迄貴君を恨んだは堪忍して下さりませ……

ト涙に暮れて泣き伏せば

大炊『御兩人の心打ち解けたれば其て重疊（と形を正して上使に向ひ）書面の趣き管領家へ仰せ立てられ民部丞家督相續之儀を宜敷願ひ奉る

赤堀『ソリヤ成らぬ、民部丞裁許の上使に立つたる我等豐島の家が潰れ様が我等の存じた事て無い

ワ

和田『アイヤ赤堀殿にも似合はざる御詞、裁許の上使は彈正を殺害したる曲者を罪料に處するが裁許の役目然るに豐島大炊助は其主人たる彈正を弑したる大罪を犯したりと雖ども其父武蔵介の讐を報たると證據に

於歴然たれば別に御咎めも無き筈なるに自から望んでなせし切腹忠孝二ッを全くせし健氣の最期和田氏人正慥に見分いたしたり右に付き豐島の家督に民部丞を立てゝ鶴姫と婚姻の願ひ聞き屆けて執達するは是以て上使の役目、隼人委細心得て相勤むるで有らう、ナント赤堀どの左様では御座るまいか

赤堀『豐島蛔負の隼人殿どうなりと貴殿の隨意に扱かひ召され我等は彼にて休息せん

ト間の悪さうに立ち上がり襖手荒く押し明けて奥に入りしぞ笑止なる。大炊助は打ち悦び

大炊『信切なる和田殿の御詞それにて大炊安心いたした、いざ此上は一刻も早く冥土に赴き父上に對面なし

毋上まッた彈正殿に此の身の罪の御詫を成さん、方々去らば……

ト疵口包みし手綱の布を解かんとするを「暫し待てよ」と押し止め

和田『大炊助が家督相違なく弟豐島民部丞に下し賜はり鶴姫と婚姻仰せ付けらるゝ間此段上使より申し渡す、

御教書は追つて鎌倉へ出頭なして頂戴あれ

ト臨機の沙汰に大炊助痛手を忘れて膝摺り寄せ

大炊『上使の御沙汰有りがたく存じ奉る……コレ一同も喜べ豐島の家は今日よりして民部丞殿……大慶至極

……ナゼ恐悦を申さぬぞ……エ、忌はしい何で泣顔いたし居る……大炊助目出度く一指舞ふてあらう……掃部扇をもてト痛手に風せぬ大炊助、蹌踉ながら扇を取ッて立ち上がり

謠『さも潔よき山の井の水〳〵山の井の「水滔々として浪悠々たり治る御代の君は舟〳〵臣は水水よく舟を浮かべうかべて臣よく君を、仰ぐ御代とて幾久しきに盡せじや盡きせじ、君に引かるゝ玉水の上すむ時は、下も濁らぬ瀧津の水の浮き立つ浪の返す〳〵もよき御代なれや〳〵萬歳の道に歸りなん〳〵

舞畢り動と倒るゝ斷末場豐島の嵐に吹散らす最期は惜き武士の共名は後に傳はりて物語とはなりにけり

此の舞の間に大炊助痛手に惱むも、和田華人正の思ひ入れ、民部丞鶴姫共の外一座の悲嘆夫々あるべし、讀者の煩ひを憚りて略したれど舞臺にては其逸最も緊要なり。惣別此編は眞の脚色の草稿なれば愈々劇場に登するか若しくは藝大夫の淨瑠璃に語らしむるに際しては更に一層の校正を加へて眞の脚本または院本となすと論を俟ず讀者諸君批評を賜はらば著者の幸甚

欠

MISSING

の障りがあるものか、滑稽小説や茶番狂言には又と無い面白い材料、イヤ玉へ、とひた勧めに居士は忽ち其氣になり生來は好なり御意ば宜しと膝を進めて「然らば御同道して見物に出掛けやうが人が見たらば：

「オット身體は見せぬ僕が方術「ムヽ鐵拐の傳で魂ばかり飛出してか「いかにも左樣「ソンなら夢野君「櫻癡先生「サア參りませう、と其所は夢だけ至つて調法、遊蕩漢の人魂見た樣にブラリ〳〵と出掛けたるは選擧競爭嘘八百のはじまり〳〵

彼園無息齋

唯見る一個の大厦高堂、たとひ内證は兎も角も看板がらとて、派手なる暮し、主人の彼園無息齋は安樂椅子に打ちもたれ己れが黨派の機關とか云へるある新聞紙の社説を半ほど讀て机の上に抛り出して大息を吐き「ハテ困つたものだナ、コウ乾兒の青年めらが騒ぎ立て余までが本統に其氣で居ると思はれては閉口するヨ、眞逆に政府の連中も否な事は嫌ひだからヨモヤ減多に解散などゝ云ふ樣な手荒い事は仕まいとは思つて居るが、併し待てヨ、かう云ふ息込では思ひ切て遣附ろかも知れないぞ、余も采配取る身の悲しさには「貴公たち

勇進し玉へ、解散するなら解散させて我黨の人望を大に天下に試むべしだ、再選は屹度受合ひ必らず今日に一倍するの多數を得るであらう、其時には内閣に總辭職させて甲の宿禰は外務大臣乙の眞人は内務の次官丙の朝臣が何役で丁の連が何所の知事月給は今の倍増し其外に交際費は別途に出して遣る程に必死になつて働け者共、と煽動ては居るものゝ解散にでも成つて見い再選擧の覺束ないは扨置て第一に銘々が一昨年選擧の競爭で投票買集に遣つた入費の借財を拂ふべき目途は無くなり差向き在所へ歸る旅費の工夫から仕て遣られば成らぬが扨々難議千萬の場合には相成つたなア、と天を仰いで大嘆息見るも内々氣の毒なり。斯る所に次の間の襖を明けて周章しく入來りしは茶加介と云へる田舍出の書生「ヘイ御前申上げまッすル只今御使が戻りましたが機械は返さんさうで御座イまッすル、と大聲にて云へば無息齋は是を聞て「ナニ機械を返さんト、そりや何處の使だ「ネイ何處の使だか存じまッせんがア大方御前が新聞屋に御貸しなさいました機械をば催促しても返さんので御座イまッせう、と答ふれば「エヽ阿房な事を申すな議會を解散したと云ふ注進では無いか早く往て聞て見ろ、エヽ何をグヅ〳〵して居る早く往て聞て見ろ、と急立れば、「ネイ〳〵と答へて書生はバタ〳〵と駈出す。入り違へて執事の家扶が「ヘイ羽目高狐内さま風取さま御揃ひで御出になり直に

拜謁をと仰せられますが……「ムヽ分つた、早く是へ御通し申せ早く〳〵、「ヘイ畏りました「エヽ畏つたじや無い早く〳〵、と待ち搆へたる其處に入り來る兩人顏の色は三河島の菜も宜しくと云ふ位に唇まで青くなつてせい〳〵と息を吐き「ヘイ早利先生「ヤア兩君、どうだ、解散になつたか「ハイ、カヽ解散にアヽ相成て御座ります「誠に殘念千萬で御座りました、とぐたりと投首して打しほるれば、無息齋は力を附けて「イヽヤ殘念で無い決してから云ふ時に落膽すべからず兩君は余の股肱だから打明けて云て聞かせるが、實は余も内々案じて居た所だけれど、此際少しでも弱つた顏を見せては味方の瓦解、なんでも附け燒刃の附け元氣で遣らねば往かんぜ、マア氣附に其燒酒を一杯引懸けて顏の色でも好くしたまふべし、成程余も一杯やらかして元氣を附けやう、ナンノ〳〵大變は大變だが案じる事は無いワ……さうサ案じないでは無いが出來た上は仕方が無い、コレだから余が危險々々と云つたのだ、ダがまさかに斯う早く解散の大地震は搖まいと思つたね……ア、困つた〳〵、イヤ〳〵困らぬ〳〵、是からが余の智惠澁の口を解て大名案を持出す時機だ……ナンノ見事に名策を出して見せるヨ……ヨシカ黨員が集まつたら、愉快々々と云ひ囃すだぜ「解散萬歳ー「コレサ今萬歳を云はずとも宜いワネ「ヘイ一寸下稽古を致した處で御座いますハヽア、と無理に作りし笑顏

は山伏がベソを掻たる如くなり

廣間の集會

夜に入れば廣間の襖押開けて燭臺ランプ點し列れ白昼より明かなり。廣間の左の方に膝を並べ臂を張つて力身返つて扣へしは誰々ぞ彼の無息齋が股肱たる羽目高狐内、鼠取楠猫を初として陰謀巧之助、揚足取右衛門、裏切四太郎、烏勘左衛門、朽先馬之進、厄荷不立之丞、青菜鹽八郎、投首當惑之助、鐵切駒利之助、胴舌學獣郎、小理屈夕兵衛等其勢凡四十餘人とは注したり、痛はしや昨日までは世に時めける榮華の夢の水の上なる泡沫と消えて跡なき今日の狀況、明日は何なる淵瀬にや此身を寄せて暮すべきと打ち萎れて見えさせ玉ふ心の中兵家の公卿公達たちが一谷を攻落されて八島の浪に漂へるが如くぞ見えし。廣間の入る側に列を敗き椽を後に取て扣へたるは是も宗徒の面々にて、假ひ弓折れ刀曲り叶はぬ迄も打つて出んと氣込みたるは殊勝には似たれども其心細氣なるは自づと面に顯はれたり。去れども此等の人々は固より一人當千の兵にて新聞ひつ書き演說こち並べては何なる敵にも遇はうと云ふ盲滅法の勇士なれば心を勵まし氣を引立てゝ我等が最

後の一軍見事にして見すべきと痩我慢しながらも思ひ入りしは天晴なり。大將軍早利先生無息齋は中央に座を占めて左右をじろりと打ち見廻して「イカニ各方申述べらるゝ趣意やある、某これにて承はらん、と威儀を作つての玉へば、陰謀巧之助はズッと進みて一禮なし「事此に及びぬる上は改めて申すまでも候はず、但し今度の解散は疑も無き味方の勝利、我々是に扣ふる者ども唯一途に人民の御爲なりと詞を飾り種々の戰略相廻らし合縱連衡の勢ひを以て鎌倉勢を取り挫ぎ善惡邪正を問はゞこそ彼等が申し條は盡く是を打ち破り一陣擧つて泡を吹かせし功名手柄諸人存知の事にて候ふ間、何れ此事世間へ吹聽に及ぶべきが先取敢ず御聽に達し奉る、と詞滯まず相述べたり。無息齋は打ち諾きて「實に誠今度の解散は全く以つて各方の盡力にて疑ひも無き味方の利運、抑も我々斯く對陣に及ぶ上は敵の本城乘取るが兼ての目的、その目的を達せんには誰彼の用捨が成らうや、今よりしては一層の奮發にて再度の勝利を謀られよ、アッ今日は如何なる惡日……イヤ〳〵何なる吉日ぞ、解散に逢ひ我々が胸の浮雲舜たれば此上も無い大愉快、サア目出度勝鬨を上げられよと差圖に一同勢つき——解散萬歲——我黨萬歲——再選萬歲——と呼はつたるは威勢よくは見えたれど其實は痛ましくぞありける

無理に名付けたる祝盃を取替したる焼酒をいくら飲んでも酔もせず何程に賑やしても何所と無く陰氣なるは亡者の前に終夜するが如くなり。陰謀巧之助は寄楽鹽八郎に向ひ「カウ君は酷く鬱で居るじや無いか「ソウヨ是が鬱がすに居られやうか、マア考へて見たまへ去年の選擧に僕が遣つた入用は三千以上家も地面も二重三重の抵當にして金策なし其上に賓は眼の玉が飛出る様な高い利の金を遣つて居るに、今度てタツタ千二百、どう遣繰が附くと思ひ玉ふか「そりや君ばかりでない、此座中恐らく十に八九は其通り、併し今更仕方が無いに由て、乗掛つた舟じや、盗賊に追錢と思つて今一算段無理でも遣かして再選して貰はうさ「その氣では居るけれど再選してくれ様か「サア其所は知れないが、出來ぬ迄も遣て見るサ、どうて引かれた米だもの、モウ一度のせ掛けて一勝負せねば仕方が無いぜ「ムヽ僕も其氣だが何だか覺束なくッて入れ佛事に成りさうだネ「入佛事でも何でも往く所まで遣つて甘く往かなかつたら其の時に踏さ「ムヽ踏と云やア、君あの鐵道株の賓はどうしたネ「どうした斯したと云て此方の大將が『今こゝが賓時だ』と云はれたから朋友の金をちよろまかして證據金に入れて力一杯賓て置いたら水は逆に流れて大損ヨ「僕もさうだヨ、イヤ斯う諸事萬事逆流に成つてはモウ堪らぬ、人が善く云はうが悪く言はうが此混雑に一利益しなけりア身の上が往立ぬワ「ソウトモヽ命あつての物種、政治政論黨派議員つまる所が金の世の中サ

塔の上

雲際に高く聳え愛宕館や凌雲閣は余に比べて見れば低いものサと云はぬ計りに突立たるは世に知られたる民塔と云へる塔なりける、元來高い所には魔が住まつて恐ろしい事があるものじやとは昔からの言傳へ、鞍馬の絶頂愛宕の峰二本杉の天邊一ッ松の梢みな魔所也と古い小説には書いてあるが、夫れかあらぬか知らねども現に此塔の上に集まつたるは日本諸國の大天狗小天狗、緋の衣を身に纏ひ羽扇を手に持て悠然と正座に着かれたるは問はても知れたる大僧正の御坊、あたりを屹度見廻して「時に各々是から先はどう云ふ飛行の魔術を施さんや、大小の諸天狗方、所存の程を自由に相述べられよ、とありければ、太郎坊は鼻をひねりて「さればて御座る一體我々天狗連は人界を離れて自由の運動を成したるに大僧正の御坊が不臨かの無息齋に欺かれ玉ひて用も無き變化と道連に相成つたが末世の不埒一代の名折れ、既に今日の解散と相成つたも畢竟彼奴等がなせる業……「エ、言ふな大郎坊某が鎌倉勢と道連に相成つたは深い仔細あつての事、併し今更離縁を

致す譯にも相成らぬが、夫れは格別、差し向き我々是よりしての手配りは如何々々と問ひ玉へば、次郎坊は喙を尖らして「されば御座る、是から先の手配りは篤と衆議を盡さんが差向き我々籠城の支度が肝心緊急問題、既に我々が配下に屬する草紙天狗は木葉武者とは申せども食綻きはさせねば成るまい、尤も八百枚の御札の内で夫々に寄進して其入用に充たれど是とても上つて仕舞へばモウ出る穴も絶て御座る、其上ならず斯く列座の諸大天狗鼻は中々高けれど其實内證の算段は火の車の輪廻にまとはれ昼夜三度の苦しみ所か居ても立てもゐられぬ苦現、いくら我等に羽があつてお負に草鞋を履て居ても飛行自在のならぬ悲しさ本國本山に歸る事も殊によつたら六かしい位マア夫れから第一工夫あれ「エ、又しても次郎坊が染垂たる泣言話、安心し玉へ、まさか借金乞が命を取らうと言ひは仕まい、ナンノ大丈夫が世にあるや磊々落々日月と光を爭ふべしサ有時に拂つて遣れば澤山だ、遣らぬとは決して云はねば無い時に取らうと迫るは彼方の不條理、少しも天地間に愧る所なして御座る、ソコデ此の先の運動はどうしたのて御座らうか、日暮途遠し倒行逆施は我等が長技。思ふ樣快活に働かうでは御座らぬか、と云へば大僧正は笑を含みて「其儀尤も然るべし併し今度は官軍方臍を固て掛つて居ればサウ容易くは退治が出來まい、其邊の所存は如何に「ハッ其邊の狂言仕組は

北陸勢の陰謀、裏切、揚足、鳥の面々が得意の智恵を振ひまして何とか彼とか附會ますれば辭柄に支は御座るまい「とは云へ今度の官紀振肅條約勵行其外に尻込いたして世の中の人氣に戻りし如くなれば「アイヤ御案じあるな大僧正、振肅する本意であれど信任出來ざる夫故にと辭巧みに相逃ぶれば根が百姓や素町人、成程左樣と感心いたすは知れた事「シテ又此節商人共外の實業者が起り立ち自から振つて出掛けんと相談いたすは味方に取つて恐るべき大敵「いかにも大敵に相違なけれども高の知れたる龍商御用商人ばら手酷い議論で彼等が氣勢を挫かば敢て掛念はござるまい「モシ又選擧の其時に我等が目的方向を一つ〳〵に問尋ね根ほり葉ほり聽かれなば「其の時こそは我等が得意の大長刀大法螺ブッと吹立て大體論で一同を胡摩化しおふすは我が方寸「勇まし〳〵然らば是より打つて出て今度の選擧に再度の勝利必らずともに頼みに思ふぞ「御安心あれ大僧正見事に成就させて見んが、但し軍の支度に掛り用意をなすに無くて叶はぬ軍用金は「サア其の軍用金はどうしたもので御座らうなア、と流石に猛き天狗でも是にはハタと差支へ思案に餘つて手を叉て居たりけり。折から一個の木葉天狗次の間より出で來つて次郎坊に向ひ「ヘイ先生、明日の新聞に遣ふ紙が切れましたが「切れたら紙屋に取に遣れ「現金でなくては渡しません、夫れに印刷職人も給金を渡さねば動き

ませんが「ムヽ困つたな、今日の所は何とか仕て置け「何とも成りませんヨ「モシ太郎坊さま草紙天狗の食料が盡きましたに由て御渡しを「ムヽ今は無いよ「モシ三尺坊さま郡桎右衛門の手代が一寸御目に掛り度いと申して參りました「留守だと云へ「モシ五尺坊さま執達吏が御宅へ參つて居りますと「エヽ煩いなア

旅店の秘密會議

櫻癡居士は兩所の見物にはや退屈して「ドウダ根から面白く無ぜ、コンナ所を見たからと云て滑稽小説の材料にもならず作家が難儀で讀者が迷惑、モウ歸ると仕やう、と云へば夢野實は首を打振つて「先生、ソレは餘り辛抱が無いと云ふもの、小説でも發端は面白く無く芝居でも序幕に當場は無いもの、是からが徐々面白く成つてお臍が轉宅をいたし片腹が大苦痛を感ずる程の活劇が始まらうと云ふ所で御座る、たツタ半日の暇を潰した所が左迄貴重の光陰なりと宣ふ程の御躰でも御座るまい、まづ〳〵僕と一所に巡回し玉へ、と勸められ、どうて乘掛つた舟、浮れ出たる魂なれば夫れもさうサと同窓して二ツの魂は飄々乎として何所とも無く飛行したり

此は何の府縣か知らねども一個の旅店の奥座敷、唯今しがた到着したりと見えて年の頃は廿二三、鼻は無遠慮に大きくて横に幅をなし、眼は三角に尖りて奥の方にキラリ〳〵と光を發ち、眉はゲジゲジの如く、耳は木茸かと疑はれ、鼻の下から頤に掛けて生たる髯は生來人手の馴致を被らねば長短不揃にて所謂天然の自由を表し髮の毛は一年計り理髮店の御厄介に預らぬと見えて自然の發達に任せたり、出來合のズボン既に足に適たりと雖ども踵より三寸ばかり上にて止まり、古着のコート徒らに通常禮服の躰を備へたれども一面に毛の摺切たるは生魚を喰過たる魚河岸の犬に似たり、其上に襦袢は二月メリヤスは三月の間一日片時たりとも主人の肌身を離れず親接したる事なれば寒氣の時節とは云へ火鉢の暖りにて得も堪へ難き臭を發ちたり、此先生の側に在て日蔭町仕入の四洋鞄を明けて何やらん書たるものを讀殘の新聞紙と倶に取り出し居たる隨行の書生兼護衛壯士の躰裁は云はずとも推量し得らるべし。茲に此先生を出迎の爲に罷り越たる一個の有志家は性得下戸の甘味好と見えて黑魚子の羽織の色は羊肝を顯はし、着たる袴の垢は飴を塗たる如く、顔の圓き志家先程より先生と差向ひにて何やらん頻と話しの最中と見えて茄子の鹽漬の樣なる印殿皮の煙草入の角を

眞鍮の煙管にてコツコツと敲いて煙草の粉を一服に纏め骨を折て之を雁首に次ぎ獅噛火鉢の炭團にて吸付フーと一喫して直にポン〳〵と叩き先生に向ひて「ソレダから困るネ、明日君が來た時に不都合があつては大變だと思つたから忙しい中を繰合せて此まで出掛て來たのがまだしも幸ひてあつたヨ、先づ第一その古洋服では勿躰が無くて是が我一郡下の候補者て御座るとは吹聽が仕惡じやア無いか、…イヤ決してさうて無い、馬士にも衣裳だ幾ら君が學問が有ても議論が名人でも演壇で怒鳴る事が上手ても其穢い躰裁では明日の演説場て『諸君々々唯今是に御出席なさるは即ち我縣下出生で有名なる大政治家にして今わが選擧區の議員候補者たる闇雲怒鳴君（是が先生の姓名なり）て御座る同君の御意見を演説に相成ますれば御神妙に御聽取を願ひます、先は其爲口上左様 と紹介しても難有味が薄いぜ…どうかして衣服の工面を急に仕たいものだが…イヤイヤ洋服は不可よ矢張り日本服の方が宜しい…ナニ無いと、ハテ困つたなア…ヨシ〳〵明朝まで に羽織袴だけ算斷を仕やう…ソコて演説の後が懇親會て燒助亭で郡内の口利連中を御馳走せにやア成らんが、ソリヤ君疎々承知だらうネ、と云へば、闇雲先生は諾いて「懇親會の催は君の手紙て承知して居るが誰が會主だね、と尋ぬるに「サア會主は僕と其外兩三名の名前て案内狀を發しては置いたが、其入費は素より君

が、支辨せにやア成らぬぜ「ソウカ、其リア大變だ、僕は全く君たちの御馳走だらうと思つて居つたに「馬鹿いひ玉ふな、君が議員に成らうと云つて演説をするのに此相鎚打五郎が（是れが有志家の姓名なり）四文たりとも散財して堪るものか「ソリヤさうだらうが、ソコデ入費は幾許掛るなア「さればサ、仕上げて見にやア分らぬが、先づ明日有志連中の迎ひ送りの車賃が一人前五十錢づゝ十人て五圓ヨ「ウ、夫れから「夫れから演説場の芝居小屋が小屋代と下足料ともて十五圓ヨ「併し傍聽切符の代が取れるだらうが「戯談いひ玉ふな、傍聽無料サ、誰が君の法螺を錢を出して聽奴があるものか「是れは怪しからぬ御輕蔑だ、是でも錦輝館の政談演説一人前十錢の切符で露拂を勸めた辯士だぜ「その時にやア大先生が大勢顔出しを仕たから取れたのヨ、ソコデ其後の懇親會に招かねばならぬ顔役だけが一寸二十人これに君だの僕だのゝ有志家を入れて凡そ三十人、この料理代が一人前二十錢づゝて二三が六圓「ムゝ「酒が三合宛て三々が九升の九十錢「それ切て濟まうか「どうして〳〵酌取の藝者が四人て玉祝儀とも「四圓「エゝ「帳場の茶代女中の祝儀が一圓五十錢「エゝ「それから呼んだ連中を乘せて歸す車賃が一臺廿錢づゝて四圓六十錢「エゝ……「是だに依つて先づ概略の豫算三十七圓「卅七圓とは莫大の金高、少し位は節減が出來さうなものだネ「所が薩長内閣じやア

無いが一錢一厘たりとも此上の節減は出來ぬヨ、モシ之を査定案に掛て減額し樣ものなら君の顏見せは行ばれぬに由つて斷然解散にするよ「コレサ〳〵さう短氣を出してくれ玉ふな解散されて堪るものか、此度の選擧に頼と思ふは君ばかりだに、併し僕が携へて來た用意の金は今こゝに有る、所が掻集めて十三圓六十八錢しか無いが、どうしたものであらふなア「急に本部に電信を掛けて取り寄せる工夫を仕たまへ「ソウ仕樣か、本部にも拂底だから急に間に合へばよいが「ソリヤ困つたものだなア

政談演說の中止解散

本舞臺五間の間一面の平舞臺。正面後の方は都て諸生山中遠見の書き割。上手寄りには愛身寺と額を打ちたる破れ寺を森の中より半分ほど見せ、下手寄には山の麓に示雄塔と云へる塔の曲り掛かつたる所を見せ、左右ははぢ墻むだ塀の書き割りにて見切る、平舞臺の眞中には水落より三尺程下がつたる所に常足の二重を二枚並べて演臺となし、其上に牛肉店土間用のテーブルを置き、辻人力車用の赤ケットを上に掛け、近所の御寺より借り受けたる銅の花瓶に時候の花を花屋流に押し込んでテーブルの左の方に置き、白淵菊酒の空罎に

水を入れ一打五錢ぐらゐの水呑を一ツ其の側に付けてテーブルの右の方に置く。尤も當日は傍聽無料と云ふ觸込ゆゑ大入りと思ひの外、少し身分ある者は申し合せたる樣に一人も來ず、中等以下のタイ〳〵連中好みの拵にて二百四五十人土間の眞中に集まり上下の棧敷高土間には當日掛り合ひの面々疎に散つて程よく座つて居る。但し舞臺の上手には役目がらとして警察官兩人制服にて腰を掛くる。都て某縣某市の某區政談演說會の體。割竹の音に竹螺を冠せたる鳴物にて幕明く

(コレサコレサ先生そりや何の話で御座る、芝居の本讀みては有りませんぜ「知つて居るヨ こりや演說場の景況さ、會場が芝居小場だから正本風でも好いじやア無いか)

此に當日の會主相鎚打五郎は、縣廳所在地の通り町の西洋各國裁縫店と黑板に白ペンキで書ける看板を掲げたる洋服店にて三年前に新調したる晴れの洋服を着して下手より出で警察官に挨拶をなし設けの演壇に上れば兼ねて注文の通り見物人がバラ〳〵と手を拍つを相圖に相鎚はエヘンと一聲高く咳拂ひをして

「エー諸君に申し上げます、今度衆議院解散に付き我縣下の當選擧區では、前議員某君が無暗に政府に反對いたされて解散頂戴まで受けた功勞がありますから、無論に同君を再選擧と存じた所が、此再選擧は實に選擧

區民の德義でありつゝあるに係はらず、惜かな同君は再選擧を公然と辭退致されて御座ります（ナゼダ〳〵）エー其理由と申すは、蓋し議員たるの四角を失なつた故だと聞きました（ドウシテ〳〵）どうしてかは、僕も知りませんが（財産差押か）否々左樣では御座らぬ樣だが（抵當が流れたのか）否々實は資格を貸して置いた財産家が吏塔に左祖して其資格の地所を取り戻したる故ださうて御座る（ヒヤ〳〵）同氏の如き英雄に貸したものを取り戻すと云ふは實に殘念極まる處置て、是が公義の敵と云ふべきものであります（ヒヤ〳〵〳〵）附きましては新たに議員候補者を求めねば相成りませんが、其事は他日の事として僕は當時我日本は申すに及ばず亞細亞西洋アフリカ迄も政治家の雷名を轟かす所の闇雲怒鳴先生閣下を今日諸君に御紹介申します、此樣なる大先生が我鄕里より出ると云ふ事は誠に我輩諸君の榮譽であります、と吹聽をして下手を願みれば、闇雲怒鳴先生どう算段したか八丈の小紬に五仙平の單袴を着て黑羽二重に直經二寸と云ふ位な大きなる紋所を附けたる短羽織を着用なし一寸俳優氣取りになつて乙に勿體を附け聽衆並に警官に横柄な樣に丁寧な樣にむづかしい會釋をして演壇に昇り、余は場所慣れて居ると云ふ風體にて水呑に壜の水を注いでガブリ〳〵と飲み、襦袢の紬で口の周りを拭ひ、舌を出して上下の脣をペロリと嘗廻し、エヘン〳〵と三ツ半ほ

ど咳拂ひをして、左の手でテーブルをトンと叩いて

「扨諸君――諸君ヨ〳〵――我輩は本日この演壇に於て諸君と相見るは實に我輩の幸福である、否々我輩の嘆息する所である、如何となれば則ちエー（と差支へたるが急に懷より演說趣意書を出してテーブルの上に置き是を見て）エー如何となれば則ち、若し昨冬第五期の議會をして解散に會ふの不幸なからしめば我輩ごゝに演說するの必要なければなりてあります、（ソー〳〵）是は怪しからぬ、何がノー〳〵て御座る……、ソコデ我輩が懷いて居る政治思想は全く昨今の議會と同一の意見て御座る（ト云ふ所に聽衆の中に思ひ掛けなく此先生の說に不同意の者あつてガヤ〳〵と喧く云ひ出したり、或はエヘン〳〵と空咳をするやらアー〳〵と大欠をするやらしたりければ、先生ヤツキとなつて）諸君は議院に於て演說妨害をする惡例を學ぶは宜しく無い事てあります、抑も……敢て官紀を振肅せぬとは云はぬ……敢て條約勵行を不可なりとは云はぬ……イヤサ監獄費を國庫から出すが惡いとは申さぬ……（と云ふ中に聽衆はソロ〳〵と立つて歸り掛かり勢ひ制す可からざるに至りければ先生兩手を廣げて大聲を發し）……モシ〳〵、マー〳〵お待ちなさい……コレからが肝心で御座る……早い〳〵コレからが而白い所でありますゼ……折角御來聽あつたのに……アレ〳〵、

アレ、皆出て仕舞つタ……、相鎚君どうしたものだなア「實に驚いた、實に呆れた「是じやア演說も出來ないワ「ソウサ演者はあつても聽者が無いから「止めに仕やう「仕方が無いのウ、と相鎚は警察官に向ひて「此通て御座りますから今日の政談演說は是で中止解散に仕りますと斷われば警察官は眞目顏にて「イヤ中止解散になさらないて宜しい、差支へは無いに由つてズン〳〵お遣なさい「イヤ〳〵手前の隨意で中止解散に致すので御座りますから御引き取り下さいましと强て斷わつたれば、警察官は其座を立ちながら余も度々政談演說に臨監したが警察官が會主の中止解散に出會つたのは是が始めてだ、と心の中に思つて出て去れば、闇雲相鎚も心の中で「中止解散とはエー悪い緣起じやなア、と戀いだり、これて當夜の宴會も無かりければ豫算の入費は掛からなかつたが、痛いかな悲しいかな闇雲が骨折は無駄とはなりにけり、櫻癡居士は夢野實を顧みて「コレから此方の見物も中止解散とする歟と問へば「中々、是からが見もので御座るサア出掛けませう、と再びブラリと此場を立ち去りたり、

直に變說

「ヤア是は〳〵宜うこそ御來臨サアずつと火邊へ御近づき下されい、と主人の挨拶に「然らば御免を蒙りまして、時に酷い寒氣では御座りませんか、既に昨朝の降雪は如何で御座りましたな、御障りも無くて重疊：：何樣當御宅は眺望が宜いから雪は又別段て御座りませう惜しい事をした昨朝參殿いたして拜見すれば宜かつたに……イヤ御揚ひ下さりますな、ヤア大層大きく御成りなすつたネ……お幾許……御十三……日々學校に御通ひ成さいますと……感心〳〵……ム、佳狗だ……チン〳〵は妙だ妙だ、と飼犬にまて愛想の安賣りをして無暗に世詞を並べたる來客は是れ別人に非ず曩に無息齋の廣間にて一寸顏を見せたる朽先馬之進と云へる政治家なり。朽先は此家の主人の周仙藏に向ひて「時に周君、例の摸樣は如何で御座りませう、昨夜の御集會で凡その所が決定しましたらうか、と尋ぬれば、主人の周仙藏は眉の間に皺を寄せて「サレバサ先生、此度の再選は餘程危なさうで御座るぜ、と答ふるにぞ、朽先は兩眼をクルリ〳〵と三ッ四ッ廻して「ソリヤ困りますネ、此間中から尊君を初め一昨年僕の爲に盡力して下すつた方々が『ナニ此度の再選は大丈夫だ大

船に乗つた氣で居るが好い』と仰せられたに由つて僕も頗る安心した所が今に成つて危ぶなくては夫れこそ實に大變だが一躰どうした譯で御座りますな「サレバ別にどうした譯と云ふ事も有るまいが、君と反對の候補者が續々と現はれ出て其勢ひが强いからサ「ソリヤ僕も固より承知して居ますが、先づ策一が古井節蔵で御座りませう、彼奴例の吏黨で前年解散の初めより竊に野心を懷いて所々方々を奔走いたし、内々縣官の聲援を假て選擧人を瞞著し樣と云ふ色が見えたに由つて僕も透さず矢鱈搔助を語らつて其情實を訐き有ると無いと增補附加して當地二三の新聞紙に載せ散々に叩いて置いたら言論の勢力は實に著いもので忽ちに彼れの勢力は挫けて猶屋上の霜の旭に遇て消ゆるが如しで御座りました「ソリヤそうて有らうが根元堅右衞門が君の大敵じや無いか「ナンノ〳〵彼奴元來當地で有名の農家だけれど辯舌は鈍し學問は無し詰まる所が天保度の老蠚ゆゑ敢て恐るゝに足らずサ、尤も年來の怨意で或は彼奴の肩を持つ連中が少しは有るだらうけれど是も我黨の新聞や演說で寵商御用商人の提灯持だとケチを附けて置いたから多數を得る氣遣ひは御座りますまい、と辯ずれば、仙造は首を打ち振つて「否々、決して左樣で無いよ、成程古井節造の方は躰した事は有るまいが、根本堅右衞門は恐るべしだぜ、寵商だの御用商人だのと汚名を附けても彼漢これまで政府の筋に少

しも關係を持たずして眞の獨立獨行で居る丈に當人も他人も更に何とも思はずに居るよ、其に思ひの外あの連中には理の分つた者が居ると見えて、ヤレ上奏案をば輕忽に議決したのは怪しからぬとか條約勵行を以て政府を責むるは其宜しきを得ないとか、何の彼のと僕が聞いても尤もに思はれる樣な說を頻りに吐て聽かせて居るから選擧人の中でも顏の好い連中は彼方に傾き掛かつた樣に見えるぜ「ソリヤ容易ならぬ事で御座ります、一體ソンナ約束ではなかつたじや有りませんか「ダけれど朽先先生よく考へて見たまへ、君が此の間の演說は餘り上出來で無かつたヨ、アヽ言つたに由つて却て重立つた連中は先生の議論を不安に思つて來た樣だもの「デモあの演說は即ち我々民塔の趣意宣告書の主眼で有りますから……「サア主眼だか胃癌だか知らないが幾ら民塔でも貧黨でもアレじやア當區の者は承知しないヨ、既に昨夜の集會でもアノ演說が酷い不承知の種子に成つて居る樣に思はるゝネ「ソレヤ案外ですネ、アレ位言つたら大に區内の氣受けが好からうと思つて馬之進畢世の雄辯を振つた所がサア當が違つては困却仕りましたなア……と云つて此度の再選にても値なからうものなら夫れこそ世間の信用は墜るし、首は愈々廻らなく成つて來るし、身體の遺端に當惑いたしますが、尊君大人の御威光で何とか御取り計ひは御座りますまいか……何にも〳〵至極御尤で御座いま

す、夫れでは明晩の御集會に推參仕りまして皆様に……へイ〳〵申しますとも〳〵ナンノ譯は御座りません先日の演説に申し逃たる趣意は全く塔論の表面だけで内實拙者は左様なる拙い考へは毛頭も心底に御座らぬと悔悟謝罪いたしませう……、ナンノ君子は過つて改むるに憚るとなれと云ふ金言、少しも顧みる所は有りませんヨ……監獄費、無論に國庫支辨……鐵道、勿論認可……取引所の改正、直ちに承諾を致さいで何と致しませう……萬事都て御注文の通りに心を飜へしますは猫の目を見るが如しでげス……ナンノ倶樂部……民黨……飛んでも無いと、直に脱黨の屆けを電信で發しますヨ……原來僕は實業執心の不黨不偏……民黨は名ばかりゆゑ……何分お頼み申し上げまする偏に〳〵

志願候補者の審問

「アノ通り周仙藏が泣く様に頼むに由つて一度は面會して遣らずば相成りますまい「いかにも左様で御座る「然らば今夕御同様に無駄だと思つて逢つて見ませう「左様サ逢つた上て其の朽先馬之進とやら云ふ先生が眞に實業者の爲にもなり又終始因循姑息なる議論を議院に押し通すと云ふ了見て有るならば民黨てあらうが

政府黨で有らうが其方に選擧は御座らぬ我々も其の人に投票しても好いからネ「サウとも〳〵何も政府黨が親でも子でも無し國民派や民黨が仇の末でも無し、詰まる所が自分が大事、家が大切、其爲に成る人なら誰でも彼れでも選擧するのが此方の本意で御座るヲ「其通りで御座る、然らば今夕その朽先とか云ふ政治家の先生に逢つて見ませう、と個様に相談を極めたるは蓋し此地にて實業を專らにする名望家の選擧人甲乙丙丁の四名とは知られたり

斯かる相談のある事とは知るや知らずや此日の黄昏ごろより例の朽先馬之進先生は周仙藏と共に此四人が集會せる所に來り、今夜の面會が肝心要、なんでも甘く此連中を説き附けて余が味方になし投票させずんば有るべからず、ナンノ高が片田舎の土百姓、天保生れの時代後れ、地價修正やら地租輕減やら得意の餌を擔ぎ出して民力休養の講釋で嬉しがらせるものならば忽ちに感喜の涙を翻して隨從するは錐を嚢中に探るよりも猶易し、元來此輩與し安きのみ、と口には云はねど腹の中ではクット高を括た傲慢根性を慎んで面に顯はさず。着座の初めより時候の挨拶浮世の雜談、口當りの好いやうに相手と成りて時を移し、扨てソロ〳〵と緊急問題に話しを進めたる所が豫期と何やらは向ふから外れると云へる諺の如く此甲乙丙丁は案外に理屈が分つ

て根性の据つたる連中で一分試の審問に遇て朽先天狗は大困難、其狀は恰も被告人が豫審に會ひたると一般

「ハヽア左樣な譯で御座りますか、貴君は國民派だと仰やるかと思へば民黨じやと仰せられますが孰で御座りまするナ……へヽエ自由改進が夫婦に成つて民黨とお成りなすつたのてナ……一體犬と猿見た樣に酷く御仲が惡かつたが能く御夫婦になれました、先々恐悦千萬です、ソコで其、御夫婦になられたには定めて深い理由が有る事と御察し申せど其邊は御尋ね申すにも及びませんが夫れては當節新聞にある宜告書は即ち貴君の御議論じやと認めて宜しう御座いませうネ、と念を押されて朽先はコリヤ堪らぬと思ひたれば咳拂ひに紛らして「イヤ何も一から什まて盡く同論だと申すでも御座らぬが先凡の所が一寸同じ樣な趣意だと申す丈の事て御座りますと曖昧に胡魔化さんと試みたれど彼方の四人は中々其手に乘らずして「アイヤ先生サウぬらくら仰やつては手前共の愚昧には、相分りませんて困ります「貴君盡くは同論で無いと仰しやるなら何所が同論では無いかお示し下さいナ「イヤ何所と云つて是と明白に辯論する所も御座らぬが……「ヘーエ明白には辯論せぬと仰しやるならば、然らば愚昧の手前共より一寸二三個條お尋ね申しませうが、先づ先生が議員にお成りあそばしたなら地價修正は唯今も仰しやつた通り行はうと云ふ思召しで御座りますナ「いかにも左

樣、是非とも行はうと熱心に存じます「ソレから地租輕減も同樣に行はつしやる御所存に相違御座いませんナ「尤も尤も必らず行はねば相成りません「屹度それに違ひは御座いませんネ「御念には及び申しません、抑も我日本は維新以來人民過大の負擔に苦しみ農は其耕作の時を失なひ租稅非常に重くして夙に起き夜半に寢れども其衣食を得るに道なく……と此ぞ十分御氣に入りの辯舌を振つて說敎を初め掛ると四人は暫しと押し止めて「イヤ百姓の御講釋なら貴君に伺はずとも手前共が遙かに好く存知て居りますヨ、夫れで其地價修正と地租輕減で百姓が助かると思はつしやりますかネ「御尋ねにヤ及ぶべき、是ぞ即ち此上も無い善政で御座りますワ「ソリヤ貴君、稅が輕くなつて不承知を云ふものは誰一人も御座いませんが、其通り一千何萬圓とか國庫の收入が減た所て、其お蔭を蒙むるものは何種百姓だらうと思はつしやります、僅か一枚か二枚かの畑を持つて居る小百姓や小作の水呑百姓は少しの御蔭も御座いませんから夫れ程に嬉しいとはハイ覺えますまいぜ「併し元來租稅の原則たる平均を求むるが第一の主眼……「モシ〳〵御講釋は止めにして貴方が唯今も實際問題とやら仰しやつた通り實地の話しが修正輕減で御恩を蒙むるものは大地面持の大百姓て御座るが……ハヽア夫れじや貴君の御連中は其大地面持の手合からどつさり賂を取る約束でも仕て居さつしやりま

すナ「是は怪からぬ苟も吾輩は國家の爲に盡力する正義の論者で御座る何の穢しい賄賂沙汰「コレサ〳〵先生サウ急腹をお立て召されますな、お取りなさらんければ夫れて宜しう御座いますワ、そこでモー二三個條承はり度ござるが、と膝を進めたり（ドウダ櫻痴先生ソロ〳〵面白くなつて參りましたらう「何樣少し面白くなつて來た樣だ……「先生靜かにお仕なさいまし朽先が何だか口を尖らかして辯じ出しますぜ「成るほど辯じ出した、ヤア妙ダ〳〵、ヤレ〳〵窮した說を吐き出したぜ「お靜かに〳〵

謝罪の無効

何にも僕は作年の議場では申し合せに背く事が出來ませなかつた故に、委員選擧の入札には蒟蒻板の通りに其人を選び、又いざ起立と申す場合には假令內心には感服いたさいでも何でも黨議內決の方に起立いたしたに相違は御座りません、併し夫れを廉に取つて今更僕を御責め下すつては誠に當惑仕ります子。是が即ち黨派政治の不得止ところて實は黨略の妙所で御座りますからネ……と朽先馬之進は口を極めて辯解すれども此方の四人は中々承知せず「イヤ〳〵先生ソウは參りません樣で御座るテ、一體手前共が一昨年先生を當區

で選擧した時には、先生が何黨だから御賴み申した次第で無い、畢竟先生その人を信じた譯合で御座る、然るに先生が唯今『僕が內心では左樣も思はなかつたが、黨略ゆゑ是非が無い』との御申し譯は甚以て其意を得ません子、夫れじやア丸で先生は當區の代議士では無くつて黨派の旗持と云ふもの。尤も一昨年手前共が今日の樣に親しく先生の御目に掛かつて篤と御心底を承はつた上で選擧すりやア宜しう御座つたが、世間の廣い周仙藏殿が達つての賴み、是非朽先先生に投票して呉れい、先生なら大丈夫だ、其上に私も顏が立つて都合の宜いともあるから何分御賴み申すと云はれた故、夫れじやサウと先生を選擧した所が、今日唯今の御話では實に驚き入りました子、是じやア御氣の毒さまで御座いますが、手前共も今度はしつかり分別を致さねば相成りませんで御座るテ、と詞鋭く論じられて、朽先天狗は益々窮して「イヤ何、左樣に角を立てゝ仰せられては馬之進益々迷惑仕るが、マア個樣で御座る、成程僕は一昨年から黨派の旗持に成つたに相違ない昨冬の議場で斷然理屈を並べて脫黨すれば宜しう御座つたが、何分是迄の往掛りもあれば餘儀なく良心に背いて同意いたして國家の利益を知りつゝも反對に起立いたしたに相違ない、又此程當地にて我黨の趣意を公然と演說いたしたに相違御座らぬが是には段々深い仔細のある事なれば……「どう云ふ仔細で御座るか「モ

ウ此上は何も彼もザック破刺里と打ち明けて晒打の御前披露と致しませうが、實は今日の内閣の手合に政治を握せて置いては安心が出來ぬに由つて……「ハテナ今日の内閣が官紀不振粛で酷い賄賂や私慾の尻穂を蹊審で捕りましたか子」「イヤ左様でも無いが、彼等が何時までも今日の通りに顯要の地位を占め居つては僕等の如き正義公論を吐く政治家の烏達が上らぬに由て、何でも今の内閣に總辭職をさせて我々共の黨派が議院多數の勢ひを以て政府を乘つ取らねば面白く無い、サウさへなれば先づ人民の爲になる結構の政治を行ふに便利で第一に僕等の懐合が大變樂になりますワ、實の所が内閣を乘つ取る曉には我黨の大將が總理大臣で誰々が各省の大臣になつて内閣を組織し夫れから各省の次官局長を初めとして府縣の知事書記官は云ふに及ばず、課長屬官郡長區長までもソックリと入れ替へて僕なども當縣の書記官ぐらゐには成れると云ふ兼れての約束、コレが樂みで今日まで無理な算段に借財の上塗りをして漸と一昨年議員に成つたので御座るもの、今更是切りで市が榮へては實に上げも下げも成らぬ次第、夫れ故に惡いと知りつゝ昨冬一味の段々何卒心事御推察下すつてどうぞ今度の再撰は枉て御承知下し置かるゝ樣に只管願ひ奉ります、既に周仙藏氏より精く御聞き取り下さりましたらうが再選さへ下さるならば屹度直樣改心いたして脱黨も仕り論説をも改めまする事

は請け合ひ、どんな證書でも差出しませう、夫れに又當節は吏黨が殊の外活潑に運動いたして甘い事を言ひ散らして人心を買ひ其上に種々樣々に我黨の擧動を譏言いたしまするに由つて、決して其等が申す事に御迷ひ下さりますな、彼奴は吏黨又は吏犬黨と申して官吏の犬で御座りますぜ、又その外にヤレ實業者の團結など丶申して當今專ら世に行はれますが、是も其實政治學では寵商と云ふ種類に入れまして是を翻譯いたせば御用商人英語ではガブルメントマーチヤントと申して盜賊の贓品買と同種類に屬するものと定めて有ります、夫故に是等にも御惑ひ成されては相成りますまい、と首を下げて賴む内に拔目なく得意の手段を用ひ掛かれば此方は聞いて「ムヽ其じや何て御座りますか、此節先生の向ふに立つて居る古井節藏殿が官吏の犬で、根本堅右衛門殿が盜賊の贓品買で御座りますかナ」「左樣さ、學問上から觀察すれば先づ左樣なもので御座りますテ「ハテ扨怪からぬ事を云はつしやる、古井は手前の從兄弟」「根本は手前の叔父「この座て御前さんに「ソウ云ふ惡名を附けられては「手前共了見が相成らぬ、と既に事にも及ぶべき所を幸ひに他の二人に障られ其御陰にて朽先は遣々の體にて此場を逃げ出したり

内幕の苦現

民塔選挙事務所と杉板に灰墨もて黒々と山陽風の怪しき書躰にて認めたる一構は大通の横町にて一ヶ月七圓五十錢の借宅料を出して新に構へたる假陣屋。交際の廣い名士が沒したる時の如く玄關には書生兼壯士躰の人物が二人ほど机に倚て名刺を受け取りたり往復の取次をしたり來者に應接したり中々の雜踏。仲の間には會計の局を設け、奥の間には密議の座敷ありて其混雜の體は『葬儀社の掛合は宜しいか『神官は何人來るか『イヤ〳〵強飯は酷い奮發して饅頭に仕やう、と相談すると一般の思ひあり

表より息せき切つて入り來るは此塔中にても敏捷怜悧と評判せられたる小刀細九郎、玄關にて沓を半分脱ぎながら玄關番に向ひ「オイ〳〵猫又君だれか僕を尋ねては來なかつたか……ナンダ蟻實が來たと、直に歸つたか惜しい事をした待たせて置いて呉るれば宜いのに、夫れから例の檄文は郵便で皆出したかネ……マダ少々殘つて居ると、早く出し玉へ、時機を失つては妙が無いソ、君たちも議論ばかりせずとも、少しは事務に敏捷になり玉へ、と叱言ながら沓を脱ぎ捨てゝ案内も無く奥の機密室に入り來れば、是を見て南海大先生は

「ヤア待ち兼ねて居た小刀君、シテシテ都合はどうだネ、と問へば小刀は一禮して動かと坐し「隨分談判が六づかしう御座りますネ、色々と遣つて見た所が彼の守錢奴め中々頑固で、ヤレ抵當だの公正證書だのと御托を並べて應ずるの色なしで御座つた故に、實は窮策だけれど例の一件を事成就の上は屹度させて遣ると云ふ事に取り極めて其爲に先生が御約定に調印して遣はさると云ふ話でヤッと是だけ（と指を五本出して）調達する事にこぢ附けて參りました、と手柄顔に報告すれば、南海先生眉に皺を寄せて火箸にて頭を掻きながら「それは實に御苦勞千萬、相手が彼だから嘸御骨が折れたらうが、併し僕が約定書に調印すると云ふのは……と流石に正直の性質だけあつて躊躇の色を顯はしたれば、小刀は夫れと見て取り「ナンノ〳〵聊か德義に背く所は有りませんぜ急場には鼻を殺と云ふ喩もあり況て例の一件ぐらゐの事は大事に比べては瑣細の話し、昔し家康は關が原の時に伊達政宗に會津百萬石の御朱印を渡して味方に附けたる例もあり、今日は即ち我塔の關が原、ナンノ是等の方便は百萬石の朱印に比ぶれば何でも無い事で御座る、斯る細節を御苦慮あつて彈藥兵糧に差支へては肝心の關が原天下分目の軍に時機を失ひますぜと説伏すれば、大先生も「成程サウじゃ、と御同意あつて何やらん小刀が懐中より出したる書付に記名調印して渡したり。受取つて飛んで出て

嘘八百

暫く有つて再び歸り洋服の隱袋より紙幣五百圓を取り出して大先生に渡せば、大先生は直に手を叩き會計局長を呼んで是を渡す、是にて漸く少々水の手が廻つて本營より各地の出張陣へ應援の道も附いたるなるべし

「ヘイ先生今日はと入り來るは大參謀の綾志經策と云へる諸葛孔明なり、鮪將を撫でて大先生に向かひ「マヅ一方は甘く說得して味方に入れましたが、何れ後ほど此方から社說の草稿を廻して遣る事に談示を附けて置きましたが、其節十圓だけは現金に持たせて遣ませねば明日の間に合ひますまい、是は會計から受取ると

じて大先生の御承諾を得て置いて……夫れから昨日の端書は實に大効能ありてした、僕も最初は餘り無情とは存じましたが陰謀が何でも遣附べしと勸めた故に少しは愧る所なきに非ざれども思ひ切つて實行した所が今朝から彼の國民連中の加擔者も稍二の足を踏む色ありと申す注進て御座ります、と得意氣に誇れば、小刀は首を打ち振つて「否々そりやア未だ實說て御座りますまいぜ、彼の連中も中々度胸を据ゑて居るから端書ぐらゐでは驚くまいと僕は考へますネ、今一ッ嚴しい手段を用ひなくては勢力を挫く事は難う御座らう……ソコて昨夜御話の腕力策はどうなりましたか、と問へば、綾志は「無論に行ふべし〳〵だ、今日の模樣に依つて實行を命じ樣と思つて居る所てす、と云ふを聞いて、大先生「イヤ其の腕力は暫らく俟たまへ、今行つ

嘘八百

ては却つて評判を惡くするぜ「ナンノどうで好くない評判の我塔てござるもの……「サウて無いよ綾志君コリヤ先生の仰せの通り暫らく時機を見合すべして御座らう、と云へば、綾志は大嘆息して嗚呼我塔の衰微は即ち是に在る哉、他日先生必らず悔いたまふ所あるべし……

「ナンダ手紙か、何處からの注進だ、と先生の問に、綾志は封おし切つて讀下し「サア大變我塔の腹心の根據と頼み切つたる某縣の第一區ては大神が敗北しさうな景況て御座るとの注進「ムヽシテシテ競爭の相手は吏黨か、何だ「吏黨ならばまだしものを、手を引合つて歩行と云ふ野狐で御座る「ソレハ怪からぬ亜々不埒、速かに無息齊に談判の使節を向けやう、「宜しう御座ります、是より僕が直に彼塔に向ひませう

「オヤ此新聞は變だ、甲縣乙縣の兩所て眠塔の旗色惡るしとあるが「ナンノ夫ヤ御用新聞だらう「イエ〳〵我塔の機關、コレこの通り、と新聞を示せば大先生は取て見て「成るほど……ムヽ成程……コリヤ變だ……コリヤ乙だ……から云ふ理由は無い筈だが……「有つても無くても實際その吏黨共に我々が土俵を踏荒されては商賣に障ります、から速かに妨害退治の手段を運らさねば相成りません……ナンノ大功は細瑾を顧みずて御座る……

「イヤ〳〵……ソウ渡しましては後が直に差支へますに由つて往復の滾車賃だけ渡して其餘は自費に致させませう……

「自費で往るかネ「イヤ往ませんヨ「往けなくては仕方が無いじや無いか「デモ此方にも無いから仕方が御座りません「デモ唯今五百圓……「其内は此通り（ト書付を示して）急場に仕拂ひましたゆゑ……「成るほど殘りは少しだなア……と嘆息の所に書生が「ヘイ電信、と出すを先生一覽して會計に示せば「ナニ運動費が無いと、當然サ、此方にすら無いもの

候補者の御馳走

五十疊敷の廣間。九尺の床には當日の料にとて殊に其夥件の大先生と呼ばれたる干渉氏が揮毫の一軸、その書風は元來何流とか云へる俗樣の上に菱湖風の柔弱なる所を習ひ覺え此節では世間を瞞着さうとて四五年前より表面を粧ほひたる米元章なればベロ〳〵したる筆意に變な跳返りが有つて真持の成らぬ書體、この罪深い惡筆にて恥かしいとも思はずに書いたる文句は疑ひも無い御當人自作拙吟の七絶にて即ち左の如く讃まれたり（但し原文の通りに寫したれば誤字は一字もなし）

天將國命托君身議會安危存此人吏黨勝利
請休怪今回撰擧滿堂春　恭呈
里軒賢臺大人併乞正　拙策干渉拜□□

尤も裝潢は唐紙仕立にて至つて粗末なれども是が此怪軒賢臺大人に取つては當日第一の緣喜なりと知られたり。この外同塔の知己より贈り寄せたるピラ四五枚を床の間續きの壁に貼り附けたるが其中にて一際目立つたるは

晋上
一疝虚湯　百袋　ひいき周旋連
里軒先生丈へ

しん上のし
一凍氷餅　千枚　彌次馬連
里軒さんえ

のし
一人氣　澤山　わい〳〵組
進上　里軒前代撰士君

兼ねて御馳走の案内時刻は午後五時よりとの招請なれば此招待に應じて、刻限に至りて陸續と入り來るは里軒先生の品負連中。洋服にはフロックコート背廣マントル獵裝束、日本服には羽織袴着流ドテラ股引半纏、思ひ〳〵の裝束にて肝腎の選擧人は有るか無いかは知れねども、新聞記者に演說屋書生壯士若衆頭或は順禮古手買節季候にまで身を扮し（オット是は間違）種々の人體その勢凡そ四十七人座敷狹しと居並びたり。里軒其の日の裝束には、縞フラヂルを日本流に仕立てたる肌繻絆に身を固め秋田八丈の下着に上州仕込みの京御召を上に襲ねてグヂヤリと着成し、黑魚子に淺葱海氣の裏附けたる二尺八寸の長羽織に流行後れの小さき定紋煙管の雁首ほどの大きさなる五ツ附けて紫紐を胸低に結び先年金談の周旋に骨折つたりし時は借方より賜

はつたりける萌葱縞の仙臺平蹴廻し廣に縫はせたる襠高の袴を家鴨尻にゾロリと穿き、アルミの金鎖の胸の犬を繋ぐべき大いさなるに心の猿の狂ひ時計を附けて帶に挿みたるは天晴一派の似紳士此人ならば覺束なしとは見受けられたり。去れども里軒もとより口に覺ゑの猿物なれば來客には一々に挨拶して平常鍛錬の虚世事追蹤此を先途と振り時き〳〵御機嫌取らんと首を下げ何分何卒只管にと厚かましくも賴みしは流石に老狡下腹に毛の無き質とは知られける。やがて里軒が差圖にて搬び出したる馳走の膳部吸物口取刺身燒物膝の廻りに並べたるが内實料理は鯛の引物丼びに酒ぐるみにて一人前が一圓二十錢の嚴密なる懸合（但しビールは此外なるべし）酌取に賴んだる藝妓が玉祝儀箱屋の支度まで一切合切で一人前二圓づゝ雛妓は此半減なりと經費節減の査定案で極つたれば是にて座敷の模樣は都て推量するに餘りあるべし。御盃ぐるりと廻つたる時を見て主人の里軒下座の唐紙を小楯に取つて立ち上がるにぞ宗徒の面々スハヤ演說の口上よと手を叩いて聞いたれば里軒は座中を見廻して三拜なしエヘンと咳拂ひして述べて云く

諸君今日は寒氣の折から御忙しい所を御繰合せ下さいまして僕が身に取つて難有うございます、抑今度議院が解散に相成りましたによつて愈々新規に選擧が初まります譯であります、此解散は我黨の爲には頗る

利益かと思ひます、ナゼなれば我黨の主意が輿論に適つて居りますから我黨の人物が必らず澤山に選ばれて議院では是迄よりもモツと多數であると云ふ事を疑ひません故であります、ソコで當選擧區では選擧人の諸君が御目鏡を以て適當の人物を御選びに相成られば成りません、保守でも改進でも諸君の御隨意、その點に向つて僕は決して脅迫も依賴も致しません、賴み廻つたり御馳走を仕たり投票を買つたりするものは反對黨のする事で我黨が屑とせざる所ゆゑ僕は選擧人に御賴みは申しませんが、……併し……是は表面上の理論であります……理論は理論として大切に棚の上に上げて置いて（ヒヤ〳〵）實際上では諸君の御盡力を御願ひ申さねば成りません（ヒヤ〳〵〳〵）僕が今度の選擧に成るも成らぬも諸君の御鼎負諸君の御周旋諸君の御愛顧諸君の御憐愍に由る事で有ります、諸君が僕の顔を立てゝ下さる事は大丈夫で有らうとは信じて疑ひませんが中々安心が出來ませんに由つて此事を此席にて御願ひ申し上げまする、是即ち僕が此里軒が我國家主義の爲に我國の社會の爲に盡す所の義務であります、モシ萬萬一不幸にして僕が選擧に洩る樣な事が有つては僕の顔の遣端が有りません、尤も遣端が無くても左程惜しい顔では有りますまいが實は一身の進退に窮して起つても居てもをられません、此事情はどうぞ御賢察を偏にお願ひ申し

まする（此所哀れッぽい聲を出してどうぞや申し叶ひません畸者には旦那様や御新造さま……の口調あつて大出來〳〵）其代りには諸君の御召し通りに議論は如何様にも變說致しまする、諸君の意を受けて其如くに論ずるのが代議士たる本分であります、諸君の御差圖次第に由つて鐵道の敷設が悪いと仰しやれば無論に委員說に反對いたします世間に札が拂底なら紙幣をドシ〳〵增發致します、執達吏巡査裁判所……よろしう御座る直に止にいたします、相場富籤チーハ……勿論人民の自由に致しまする、振肅論……怪からぬと、花を引いたり藝妓を愛したりするのはコリヤ紳士の權利であります（ヒヤ〳〵）其外諸事萬事何でも彼でも選擧區内の望みに應じてキット遣り通すのが僕の主義で御座いますから左様御承知を幾重にも願ひ奉るで有ります（拍手喝采）

同志打の風波

里軒が口から出放題の演說に一座はワット手を拍つて賞めるもあれば譏るもありて、ノー〳〵、ヒヤ〳〵、愚說、謹聽と取々の品評頻りなりける其中に「里軒先生怪からぬ說を御吐召さるな、と大聲にて一喝なし傍

近所の膳部を蹴散らして座敷の中央に飛び出したるは吏黨の中にて其名を知られたる樫木捨喜と云へる正直もの、書生羽織の兩袖を肩まで捲り上げ振舞酒に充分の醉を帶びて滿面亦銅色になつたるが眞赤なる眼の球をむき出して里軒をハッタと睨み「唯今の演說頗る其意を得ない、自分の選擧を賴む事ばかりに氣を揉んで我黨の政略に反對する趣意を述べられたは如何の譯て御座る、苟も政治家たるものは主義が大切だ、夫れに何ぞや反覆表裏七面鳥の面の如く盜賊猫の眼睛の如くなるは實に德義を失ひ卑劣極まる次第個樣な者を我黨の候補者などゝは實に我吏黨の面汚し、國家主義の大敵、所謂獅子身中の虫と云つて可なりだ、主義を何と心得て居るか……とわめき叫びて罵りたれば、サア大變、内輪から火事を出しては我黨の恥辱他人の物笑ひ殊には里軒が一期の浮沈この時なりと一味の輩こぞり立つて、樫木を慰め誘し湖つと其口を鎖させたり。されども此一大攻擊にて座興は俄かに醒め一座靜まり返つて互に顏を見合せては眼で話をのみ仕たりければ、流石の里軒も默つて居られず、今は樫木が攻擊を罵り返して辨駁せれば相成らずと再び演席に就かんとするに、此時遲し彼の時早し里軒が腰押しの大參謀黑幕の大軍師と呼ばれたる長下古名「暫く〳〵此演席小生に御讓り下されよ、と市川流の蓋詞口調にて止め袴の裾を取つて其席に顯はれ出て〳〵眼付てソレと知らすれば

ム、と飲み込む里軒は「然らば左様、と挨拶して己が座には返つたり。長下古名は名詮自稱の長舌もてペロリと唇を嘗め廻して

諸君、實に今夕の集會は眞正なる政治家の會合たるに背きません、僕は支那の天文家を賴んで見て貰つたなら德星が燦爛として此屋の上に集まつて光り赫て居るであらうと信じます（大喝采）即ち唯今御主人たる里軒君の御演說と云ひ桂木君の御論難と云ひ其爭ひや君子なりで有ります、斯くてこそ我吏黨の萬歲を祝すに足ると思ひます（ヒヤ〳〵）或は桂木君の論を以て里軒候補者を攻擊したものじやと思ふ人もありませうが、夫れは所謂皮相の見で其實相を看破し得たとは申されません（ナゼ〳〵）ナゼと云つて里軒候補者の演說と桂木大辯士の論難とは反對の樣には見えますが實は同論同趣意で有るからて御座る（大喝采うまいぞ〳〵）抑も桂木君の申された所は政治家たるものゝ心得て、政黨に連なる者は其主義を貫くが即ち德義で有ります、故に御同樣に平日ともアノ通りに心得ねば相成りません（ヒヤ〳〵）併し實際に於て殊には天下分目の軍とも云ふべき黨略の爭ひに當つては里軒君の演說の如くで無くては味方の勝利が得られません（謹聽々々）蓋し政黨の目的は多數を得るのが勝利てす、此勝利の目的を達する爲には何の樣な

る策略ても用ふるが必要、逆に取つて順に守るが肝心て有ります（喝采）夫れ故に桂木君は順に守るの正道を論じ、里軒君は逆に取るの奇道を辯ぜられ、奇正虛實陰陽上下ものは二ッに見ゆれども種は一ッが手品の妙術と申すもの、是れじやに由つて政治の理論をする時には主義のプリンシプルが大切德義のモラルが大事、これに背いては政黨に對しての大不忠たると即ち桂木君の申された通りじや。併し政略上の爭ひに臨んでは德義を顧みるに及ばぬ、イヤ顧みたくても顧みる事が出來ぬ。況してや主義の如きは最も其通りで既に今を距ること、百三十六年と八ヶ月半前のと、西洋にては那破倫と彼得との大合戰その時獨逸の議院に於て總理民黨のワルポアが議院の多數に向つて『左樣相成つては主義に反對しませんか』と一本突つ込んで來ると吏黨の總理大臣スタインが『アイヤ主義と云ふ物は政治上の實際問題には有りません主義と云ふ詞を議院に發するは、即ち憲法に違反である主義と云ふ詞は、憲法違反の詞である』と云ひました、夫れからは我黨國家論の本家本元たる獨逸國では議院に於て主義と申す詞を禁止したりと憲法史に明記して然もコウントカウールと云つた書記官長が贊成の評語を下して盡く議員に配布した、夫れて其評語を附けたが善い惡いと云ふ論が起つたが、クリサンテニームと云ふ菊の盃で落着に成つたとあ

る。然る時は里軒君が主義を捨るが如き語氣を發せられたるは是れ實際議員たるの膽力を示されたもので有る（喝采）誠に目出度いと信じまするに由つて僕は諸君と共に之を祝して一盃を傾け、此所に居りまする女樂人に申し付けて音樂踏舞を奏させ樣と存じて謹んで諸君の贊成を乞ひまする（大喝采）

と辯じたれば大贊成〳〵の聲々四方より起りて是にて怪木も無事里軒の顏も曲り形に立つて大恐悦。サア此機を外すな、又もや議論の出ぬ内にソレ藝者早く御座附を附けろ……ナニ調子なんぞは合はなくても宜い……文句は何でも構はない……座附が濟んだら直にお酌の踊りぢや、藝者も踊る支度をしろ……と差圖してどうやらこうやら御茶を濁したるは長下古名が當座の功名にてありぬ

むねのわる（梅の春）どふせうじ（道成寺）

氣轉の利いたる長舌古名が計ひにて先づ里軒候補者の顏も丸潰にならずに相濟みたれば、イザ此機を外さず奏樂舞踏との御差圖に、其座に侍つたる藝者ども畏まつたと持ち出す三絃、早う〳〵と促され左なきだに調子の合はぬが持ち前なれば、何が扨トテン〳〵と幾度鳴らしても、ナンデきちんと律呂の合ふべきや、マツ

こんなもので宜からうと交渉談判も調ふたるか五人がズラリと並んで正面を向いて、下手な鍵助が十能を抱へた樣なる態にて、無遠慮にも大きな口を開いて其聲は高いもあれば低いもあり、甲所の遣つたる弦聲に調子外れの震へ聲梅は紳士仲間で評判ある一中節木挽町の清元濱町の二上り新内小石川の義太夫向島の長唄根岸の常磐津と好い道伴れとも云ふべき唄ひ方にて呻り出したる開口の文句は御約束の通り古めかしい老松の三下り

『まつの魔遊の内幕は、無駄の催しぶち色の（合）おせじあいそは、みんな、〳〵話しは偽じやもの……テツンシヤン』……ヘイおやかましう……とお辭宜をすれば、ヤンヤ〳〵と一同の拍手大喝采「コレ〳〵小みけ、喏吉、ごろ助、ナニカ賑やかものを彈いて陽氣に仕ないかヨ「ハイそれじや此娘たちに何か踊らせませう「ヨカ〳〵踊は妙だ、大贊成だバイ「何に仕ませうネー「何てもよかバツテン、靜かもんは否んぞ「ハイ宜しう御座います……そんならでれ八ちやんとぶた松ちやんと二人で三番をお踊りな、と喏吉が差圖に二人の雛妓ハイと答へて立ちながら小聲にて「でれチヤンお前たしかゝネ、私は三番は怪しいヨ「ぶうチヤン宜ないねエ私も形なしだワ、と當惑の景色を見て「お前たちにア困るネ種蒔が怪しいなら雛鶴は「姉さん猶あり

ませんワ「仕方が無いネ夫れじゃア梅の春か北洲に仕やうが覺えて居るだらうネエ「ハアどうやらかうやらは座に着いて踊つたり、即ち清元淨瑠璃梅の春（但しむねのわると名づけたる替唄の新文句）

『かり景色、浮て頼みの一二三四、いつか多數になるつもり　あのもこのものうばひどり、イザ事問はん當區さへ、萬よしあし奸潜、他から振りこむ票買に、よいお直段を無理工面、干渉ざたて虚喝の、鼠の智識の飾り本、廿許も積み重ね、物知りらしく居すわれば、ホンニ田舎は眞に受けて選べ選ぶの螺煙……

「コレ〳〵、そんな梅の春があるものか怪からぬ文句を唄ふ奴じや……ム、汝やア民黨に加憎して里軒先生に傷を附けて政府黨お味方の選擧を妨害する奸策を行ふ奴だの「アラ御免なさいましョ、妾輩は子宮病はありますけれど血の道は起りませんから清婦湯を飲みやア仕ませんヨ「デモ政府湯を飲まん奴が、ナンデ彼な文句を唄ふたか「それでも此節この皆唄が流行ますもの「ム、扨は反對黨の奴輩が流行らせるのダなア、憎ハ奴等だ……ソシテ貴樣は誰に敎へて貰つた「ハイかの隣町の裏切さんに敎へて貰ひましたヨ「ナニ裏切四太郎から「ハイなんでも裏切さんが御自分でお拵へなすつたと云ふ事で御座いますワ「彼奴が〳〵、彼奴當

區から出やうと思つて、扨は野心を包藏して我黨の憲法に逆反なし民黨に心を寄せたと見えるな「良々それじゃア此方にも其了見があるぞ、何の離間讒誣は此方が本家本元だ、彼奴の出來發智に仕て遣られて溜るものか、と初めて知つた味方の裏切。これにて座興は又もや醒めんとしたる折しも、何をがなと心中に思ひ居つたる樫木捨喜最前の怒を再び洩すは此時なりと屹度思案をなして「マア其な議論は後にし玉へ、本日の議事日程に無い事を論じて居ては座興の妨げソコで僕が一番唄ひませう「至極妙だ〳〵、緣喜直しに唄つて呉れたまへ、併し君ナニを唄ふ氣か、琉球と鹿兒島ぐらゐな物だらう「馬鹿の玉ふな、いくら藩閥臭氣の僕でもソリヤア唄はないヨ、と喏吉に向ひて「オイ道成寺を彈いてくれい余が唄つて聞かせるから……と此樫木捨喜は見掛けに似合はぬ通り者にて捨喜に美聲で左の如く唄ひ出したり

『彼に忌味は數々ござる、初度の說を聽く時は黨無情と演すなり、平常の議論は藩閥維時折合は僕滅氣樂と演すなり。今の說を聞くときは。自黨滅法と演す貧女の面を眺めあかさん「云はず語らぬ我心亂れし黨の亂るゝも、つれないは唯うつり氣な、どうでも彼奴は惡性もの螺だ〳〵と唄はれて、いふて議論のわけ二ツ、勸めさへ唯浮々と、どうでも辯士は辯茶羅も

の、官省育ちは選擧なものじゃ（……面白の選擧騒ぎや、三國一の闘の山、止かと見れば、賴むふしぎがよしの山、ぐらちやら〳〵仇し山、あまた山〳〵を見わたせば、腹の無山意地山の、むねの惡山いつか外れ山、いくさの勝の遂けれど、利慾に迷ふ淺間山、ひどい儲の有馬山、あとは野となれ恥かき山わらい山、我味方山、祈る北山、いなり山、變な結びの妹背山、二人が中の黄金山、花咲くゑいこの〳〵置去山……（エ、面倒だ此等で中止に仕やう）

變說自慢

口こそ利かね理屈こそ饒舌られ流石に累世金持の名家ほど有つて相應に譯の分つたる執中正太夫、五十有餘の分別盛り、その向ふに居つたるは襟元搗内これを助くる虎井雁藏、れこ撫摩して執中に對ひ「エ、御主人、今度の選擧には是非とも當區から然るべき人物を出さねば恥辱に成りますぜ、全體解散に成つたら是が非でも前の議員を再選すると云ふのが即ち立憲政體國で人民の意地と申すもの、サウ無くては人民の威權が地に墜る譯で御座るデ、ソコで當區の前議員音無駄止郎君の如き純粹の民黨で僕などゝは全くの反對ですが、音無君が再選の冀望が有ると云はるゝなら、ハイ僕は主義の反對なるに係はらず投票しますネ、併し肝心の御當人が否じやと斷言して、辭退いたされたに依つて、サラバ止を得ない、別に候補者を選ぶと云ふ一段の今日に相成つた所で、僕は當區の爲に此襟元先生を推選いたし度いと存じますネ、と咄し出せば襟元は其尾に附いて「如何にも鼠取君の申さるゝ如く實に前議員を再選するが此際では至當で御座るに由つて、既に僕も鄕里の舊選擧區から再選の積りて勿論ソレに極て居た所が、僕の同主義の鐵切駒利之助が國家の爲とあるなら營業の利益をも打ち棄てゝ議院に出やうと奮發いたして御座る、所て此人物僕と同鄕ゆゑに僕が自ら退いて此度は其鐵切を候補の後任に推選いたした、是が即ち政治家の德義ですテ、ソコて僕の一身が遊んで居るのを見て虎井君が頻りに勸められますが僕も相成るべくは三四年は政治世界を離れて閑散に暮し度くまた苟も他の候補者を蹴落して當選を爭ふは快よからずと存じて屢々辭退いたしたなれど實は當縣の知事公からも内々て達つてと宣ふ故に、然らばと應じた譯て御座ります、と嘘八百を並べ立てゝ喋着し掛かれば執中は、「ハヽア左樣で御座りますか、ソリヤ御苦勞さまで御座ります、シテ襟元先生は民黨と聞いて居りましたが、扨は御味方黨で居らつしやいますかネ、と問へば、虎井は膝を進めて「サア其所が妙て御座るテ、襟元君の

機敏は即ち其點ですテ、…逆に取つて順に守るは政略の秘訣とは誰れも知つて居るが行へない事であるに襟元君は立派に實行されましたネ…一寸搔撮て其顚末をお咄し申さうが一昨年の選擧に當つて襟元君の郷里は或筋の手が廻つたかして全區擧つて政府黨の官權黨の吏權黨の保守黨の薩長黨の御用黨の寄合、ソコデ先生ズット說を變じて獨逸流と出掛けて甘く地方の愚物を說き伏せた、愚物等は大に悅んで先生が其お說ならばと歸伏したると草の風に偃くが如しで、或筋でも其は賴母子と有つて內々手を廻して運動費を何處からか知らぬが出して遣やら著述出版の資本を補助して遣るやら、先生大福德到來で十分に腹を肥しお負に向ふ頤で議員に成られましたと思ひ玉へ、是だから其筋でも、ナニあの襟元氏が議場に居さへすりやア反對黨が何人饒舌ても刄が立つ事では無い吏權萬歲と悅んで安心して居た所が、イザ議場に立つて見ると先生は私恩の爲に公義を滅す可からずと政治家の大德義を重んじて頭巾を脫いて大百になりウームと吏黨を睨み付けて初めて本色を顯はされた所は、實にゑらい手際ひどい腕前で御座ります、執中さん、ナント左樣ては御座らぬかと誇り顏にて襟元が反覆の功名話をなしたれば、執中はジッと襟元を見て「へ！夫れじやア今度は先生が當區を踏臺にして議員にお成りなさる曉では政府黨に成らつしやるので御座りますナ、と詰つたり「是は

怪しからぬ、中々左樣な譯合では御座らぬ、他くまでも人民の自由幸福の爲に身命を擲つて議論いたす決心で御座る「イヤ何も先生に命を捨てゝ貰はいでも宜しう御座りますが、ナニモ私風情に御相談が無くても其思召しなら貴君方御隨意に御運動なさいますが宜しう御座りませう「イヤ〳〵選擧の事をサウ冷淡に御捨置きては實に國家の爲に相成りません、執中正太夫殿と申しては當區第一の人望家その向背では投票の二百と三百は何方にでも成るべき方が御搏ひないとは失敬ながら權利を重んじ無いと申すもの…「イヤ〳〵虎威さん、ソレでも貴君方は實業者が集會をして議員の候補者を選定する相談を附けるのは宜くない實業者は退讓の德を守つて引つ込んで居るが宜い、政治家專門の商賈人の內で自分の宜いと思ふ人物に投票するが宜しい、他人を勸め廻つては相成らぬぞと立派に仰やるじやア御座りませんか「イヤサ夫れは民黨に對して申す詞で御座る、政府にお味方をする場合なら決して搏ひませんワ、ドシ〳〵運動して退護どころか進取を十分に極めれば成りません譯合で御座る、是が即ち國民の國民たる所以ですテ、と說き立つれば執中は呆れたる面色にて「へーイ其じやア吏黨と申すものは得手勝手なもので御座りますネ「左樣サ、敢て得手勝手と申す次第でも御座らぬが、マア政治上の運動と云ふものは箇樣なもので御座る、一から什まで新聞や演說で書い

たり述べたりする樣な角張つた事ばかり仕て居ては夫れこそ我黨政治家は一生涯甘い汁は汲へませんヲ

執中正大夫

襟元搗内得意に成つて膝を進め「エヽモシ執中君玆が實に政治家の巧妙手段と申すものでゲス、ナンノ政府が金を遣はぬのは僞で御座りますヨ、ナニモ自分たちの懐が痛むと云ふ次第では無し何れドウかした金を遣ふのですもの思ふさま遣はせるが宜しう御座るハヽヽヽアヽヽヽイヤ併し其位な小策はホンノ詰まらぬ小刀細工朝飯前の三番叟コレからが肝心で御座るテ、一躰政府が今度解散したと云ふのは實に非常の大英斷マア御覽なさい今度の改選で政府が以前に倍して勝利を占むるは疑ひなし、少しも驚く所は御座らぬが、氣の毒なは民黨の輩ヤレ御馳走をして投票を賴み廻つたり無理な才覺をして金ビラ切つて頻りに稼いで居ますが愈々選擧が相濟んでズラリと頭を並べて見ると極めて少數僅の人數ドウして政府黨の多數に對して齒が立つ譯のものじやア有りませんワ、其を知らずに力瘤を入れて居るのは所謂蟷螂の斧を揮て龍車に向ふが如しで御座ります、コレだから貴君などは猶更以て此邊を篤と御分別成りませんでは相成るまいと失敬ながら存じま

する、とソロ〳〵水を向け掛かれば執中は此奴胡亂と覺たれば「アイ其は先づ恐悦で御座りますネ、其位御勝利がチヤンと見えて居ますなら別に先生が氣を揉で是非とも當區から御出なさるにも及ばんでは有りませんか、と一本突込めば襟元コレハ失敗たりとは思ひしが故意と笑に紛して「實に貴説の通り何も心配は御座りませんが僕も一旦身を政治海に投じたものですから苦海十年面壁九年つらい辛抱いたしても政治家で身を立ちませねば第一僕の一身が……イヤ一身は學術技藝で暮には十分ですが、國家の爲に相成りません、其故に國利民福の爲に止を得ず出掛けるので御座ります「ヘイ夫れは〳〵賴まれもせぬ事に御苦勞千萬で御座りますネ、僕など見た樣な俗物はサウ云ふ考へも有りませんから、先々手出しをせずに拜見を仕りませうヨ、と當らず障らず開きを乘る樣なる景色なれば、此奴迚も一朝一夕で籠絡らるゝ翁にあらずと覺つたれば、虎威は傍より「成程御尤〳〵實に深い御了見恐れ入りましたネ、唯今も襟元君の云はるゝ如く我黨の全體勝利は十分に見込が立つて居りますし又當區の如きも別に賴み廻らずとも正義公論の在所は明でエすに由つて襟元君の當選は無論で有らうと信じます既に此節は歴々の大頭の御用商人方も知事公の御説驗に從ひ忠節を盡されますに由つて尊君に於ても御盡力あつて宜しう御座りませう、と云へば、執中は默て聞いて居たりける

が稍々あつて「ハテナ御用商人が政府の提灯持と云ふことは東京の惡口新聞は毎日書いて有りますれど新聞紙屋の惡まれ口と打ち棄てゝ置きましたが唯今貴君も其御說とある上は改めて心得の爲に窺ひ置きたう御座る、全體御用商人とはドンナ種類の商人で御座りますヲ……ム、政府諸官省の用達官吏の友達……それで利益を得るもの……其の緣に出つて濡手で粟を握むもの……成るほど左樣な連中は廣い世間には隨分ありませうが失敬ながら此正太夫などは四十年來未だ一度も政府の御厄介に預つた事の無い男ですが、ソレでも商人ゆゑに政府の提灯を持てと貴君は仰しやりますか……イヤ〳〵其御分疏は卑怯で御座りませうぞ、現に貴君は實業者の連中は政府の御味方であると仰しやつたで無いか……憚りながら貴君方の茶羅辯口に乘せらるゝ執中正太夫では御座りませぬ、私は政府の提灯も持たぬ代りに豆藏の手傳ひも仕らぬ……青二才の書生上がり皮包一ッの風見鳥政治論でヤット飯を食つて居る連中に大切な代表を賴む事は御斷りで御座ります、世間話の世事雜談なら何時でも御話相手に成りませうが議員候補の押し寶り相談は眞平御免下さいまし……どうぞ是を御覽なすつて……柱を指さして示したれば最黑々と書いたる張札の文句に云く

諸遊說投票買入るべからず
附選擧相談御斷申候

女將軍の參謀

四疊半の小座敷、九尺二ッ割りの床の間には是眞が給たる梅に若松の一軸を懸け、其下には三四年前濱町の依田が店で寶捌いた幸兵衞が作の籠花入に猪尾助（イヤ間違つた、詫助）と紅梅の早咲きとを挿け、床側の上には、勸工場仕入れの紫壇の硯箱と碁盤の上に棋器を二ッ並べて飾つたり、尤も此棋石を何の用に使つたるか黑石の中には紙を裂いて白石を一ッ包みて引き締めたるお捻りの如きもの三ッ四ッ程あり、或は云ふ是れ杵環の標なりと居士は果してその然るや否やを存じ申さず。扨て此座敷には此家の女將軍の某とて三十五六の垢脫たる意氣な年增、問はずとも原はソレ者の果てと一目で知れる代物を相手にして、香々酒を飲みな